e+FICTIONS

SEIKAISHA

ダンガンロンパ霧切
DANGANRONPA
KIRIGIRI

本作品は、縦書き表示での閲覧を推奨いたします。横書き表示にした際には、表示が一部くずれる恐れがあります。

ご利用になるブラウザまたはビューワにより、表示が異なることがあります。

ダンガンロンパ霧切 4

北山猛邦
Illustration／小松崎類

星海社

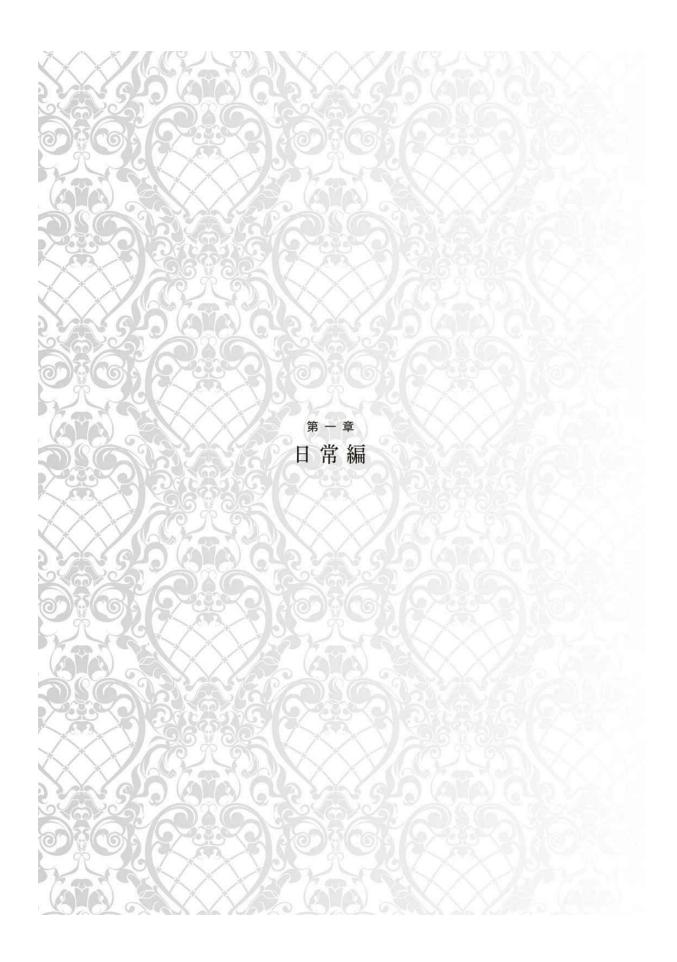
4
ダンガンロンパ
DANGANRONPA
霧切
KIRIGIRI

Contents

第一章
日常編

第二章
複 殺 怪 奇

第一章

日常編

もしも彼が過去を笑って話すような人間だったら、わたしは彼を許せなかったかもしれない。

――会っていきますか？

――合わせる顔がないよ。

そう云（い）って肩を竦（すく）めた彼の、思いつめたような横顔に、かけるべき言葉など見つけられなかった。そもそもわたしのような他人が、彼らの事情に少しでも口を挟めると思っていたのが間違いだったのだ。まして家族の問題ともなればなおさら……

彼はわたしと出会った時から、別れる時まで、名乗らなかった。出会ったことさえ忘れてほしいと云った。たとえるならわたしたちは、何処（どこ）か遠いこの世の果てで、偶然すれ違った旅人同士でしかなく、五分後には背中を向けて別れる宿命にあるかのようだった。彼はそういう関係を望んでいたし、名前を聞き出せる雰囲気（ふんいき）ではなかった。

それでもわたしにはわかっていた。

彼が霧切響子（きりぎりきょうこ）の父親であるということ。

六年前に娘を残して霧切家を出た男であるということ。代々探偵の血を継ぐ家系に生まれながら、探偵となることを拒否したこと。そして今は希望ヶ峰学園（きぼうがみねがくえん）で教師をしているということ。

車で寮まで送ってもらう間に、彼とやりとりした会話を思い出す。

「霧切響子を出し抜ける人間はそう多くないはずだ」

彼は車を運転しながら、霧切響子によく似た目もとを細めた。上品なスーツに、少し緩めたネクタイ、そして着崩したような襟元（えりもと）が、彼の人間性を表しているみたいだった。

「だが心当たりがないわけでもない」

真っ直ぐ（まっすぐ）前を向いたまま云う。

車はありふれた街並みを、ごく当たり前の速度で進んでいた。わたしたちの存在は、日常の風景の中に、微塵（みじん）の違和感もなく溶け込んでいる。

「新仙帝（しんせんみかど）――」

わたしがその名を口に出すと、彼は瞳だけを助手席のわたしに向けた。

けれどすぐに正面に向き直る。

「やっぱりそうなんですね？　教えてください。霧切家と新仙帝との間には、一体どんな因縁（いんねん）があるんですか？」

「世の中には知らない方がいいこともある。真実が常に人を救うとは限らない」彼はそう云ってすぐに言葉を続ける。「もっとも……もはやそんな常套句では君にとってブレーキにもならないだろう。君の目がそう云っている。あまり感心はしないがね」
「教えてください」
　わたしが重ねて云うと、彼は困ったようにため息を零した。
「その前に、君の素性について話してもらおう。君があの屋敷を訪れた経緯についてもだ。教えるべきかどうかは、そのあとで決める」
「わかりました」
　わたしは霧切響子と出会ってから、霧切の祖父の屍体を発見するまでのいきさつを語った。『シリウス天文台』の殺人事件で彼女と出会ったこと。『ノーマンズ・ホテル』の事件で新仙帝と出会ったこと。今もわたしたちは、新仙帝が会長を務める犯罪被害者救済委員会との闘いのさなかにあるということ。そして霧切の祖父について、ある事実を確かめるために屋敷へ向かったこと。
　屋敷では最悪の出来事に直面した。霧切の『おじいさま』はすでに数ヶ月前に殺害され、庭に埋められていたのだ。つまりわたしと霧切が出会った時にはもう、『おじいさま』はこの世にいなかった。
　ではわたしが彼女から紹介された『おじいさま』とはなんだったのか……
「霧切ちゃんの祖父が探偵であるということは彼女から聞いていました。実際に会ったこともあります。でもふと——何かが間違っている気がしたんです。わたしの頭の中で思い描いている『お祖父さま』と、霧切ちゃんの云っている『おじいさま』は違っているんじゃないかって。振り返ってみると、確かにちぐはぐなところがたくさんありました。『お祖父さま』はDSCナンバーの導入を認めていないはずなのに、霧切ちゃんを探偵図書館に登録させたり、帰国していないはずの『おじいさま』が屋敷にいたり……わたしはそれらの矛盾についてもっと考えるべきだったんです」
　わたしは自分の不甲斐なさに泣き出したい気分だった。感情を押し込めるように、太ももの上で拳を強く握り締める。
「霧切ちゃんは……自分のこととなると、あまり話したがらないし、特に家のことについては話題を避けようとすらしていました。でも意図的にわたしを騙そうとするつもりは全然なかったと思います。ただ単に、わたしが勘違いをしていただけで……」
「相手が自分と同じように『わかっている』という前提で話を進めるのは、彼女の悪い癖だ」
　彼は眉間に皺を寄せて云う。
　霧切響子は昔から頭がよかったのだろう。彼女の見ている世界と、わたしの見ている世界は、時間の流れ方も、目に映る光景も、きっと違う。だからすれ違ってしまう。

はたして彼女の目には、この世界はどんなふうに見えているのだろうか。凡人のわたしにはとうてい見ることもかなわない世界だ。

　それでも彼女は、積極的なくらいに、彼女の世界をわたしに見せようとしてくれていたように思う。そうでなければ、わたしを『おじいさま』と会わせることもしなかっただろう。

　彼女が少しはにかみながら、それでもわたしに見せようとしてくれたもの。それは彼女が求めていた日常だったのかもしれない。あるいは探偵であることが日常という彼女にとっての、非日常。

　しかし——それさえ新仙によって、あらかじめ偽装されていた。

　わたしはそのことに気づいてあげられなかった。

「結論から云えば……祖父は二人いました。でもそれ自体は何一つ不思議なことではなくて……普通、誰にでも祖父は二人いますから。父方の祖父と、母方の祖父。探偵の血をひく霧切家の『お祖父さま』が父方ですよね。そして坂の上に屋敷を持ち、帰国した霧切響子を迎えた『おじいさま』が母方。振り返ってみれば、霧切ちゃんは常にその二人を区別して話していましたが、わたしは探偵の祖父にばかり気を取られて、ずっと混同したままでした」

「仕方ない。彼女の説明不足だ」

　車を運転する男性は同情するように云った。

「霧切ちゃんは、五年くらいの間ずっと海外で生活していたと云っていました。帰国したのは二ヶ月半ほど前——つまりそれだけの間、彼女は母方の祖父に会っていなかったはずです。だから霧切ちゃんといえども、『おじいさま』が別人とすり替わっていることに気づかなかったのではないでしょうか。事実、クリスマスの時点では、彼女も新仙の変装に気づいていなかったと思います」

　ましてや新仙は偽装と変装を得意とする変奏探偵（ヴァリエーショニスト）だ。相手が素人（しろうと）なら、たとえ身内でも変装に気づかせない術（すべ）を身につけているだろう。今回は相手が霧切響子だから、五年の空白が利用されたと考えられる。

「元日（がんじつ）に電話で新仙について警告してくれたのは父方の祖父、つまり霧切不比等（ふひと）さん本人でしょう。あの時もっといろいろと聞いていればよかったと悔（く）やまれます」

　祖父からの警告も空（むな）しく、わたしたちは新仙帝と出会うことになる。それは偶然ではなく、最初から仕組まれていたものだったのかもしれない。

　新仙の企（たくら）みは霧切響子が帰国する前から始まっていた。目的はわからないが、彼は変装によって母方の祖父に化け、屋敷に潜り込んでいたのだ。おそらく『お手伝いさん』たちも彼の手下だ。

「きっかけはわたしの勘違いでした。でも霧切ちゃんの様子がおかしいのを見て、それだけでは済まない何かが、あの屋敷で起きているのではないかと思ったんです。それを明らかにするために屋敷に向かいま

した。そのあとは……あなたも知る通りです」
　屋敷に忍(しの)び込んだわたしの前に『お手伝いさん』が現れ、襲いかかってくる。それを救ってくれたのが、運転席に座る彼だった。
「庭に埋められていたのが本物の母方の『おじいさま』ですね。霧切ちゃんがそのことに気づいたのは、ノーマンズ・ホテルの事件のあと、屋敷に戻ってからだと思います。もしかしたら以前から『おじいさま』の異変には薄々気づいていた可能性もありますが、新仙帝という存在を知ることで確信に至り、庭に埋められた屍体を発見することになったのではないでしょうか」
　頼れる唯一の身寄りであった『おじいさま』は偽物で、本物はすでに殺害されていた。その真相に至った彼女の気持ちを考えると胸が痛くなる。霧切家の探偵は、家族の死よりも探偵の仕事を優先させよと教えられているが、はたして霧切響子は動揺せずにいられただろうか。
「それから彼女は姿を消しました。まずは自分の身の安全を計ることを優先させたのでしょう。けれど数日経(た)って、わたしのところに戻ってきてしまいました。わたしに危険が迫る可能性に気づいたからです。本当ならわたしのことなど放っておくこともできたと思います。そのまま海外にいる不比等さんのところへ行くという選択肢もあったはずです。それでも彼女は……」
「立ち向かう決意ができたのだろう」そう云って、運転席の彼は初めて、わずかに表情を緩めた。「心配することはない。彼女は霧切家の探偵だ」
「でも……まだ十三歳の女の子なんですよ」
　わたしはつい責めるような口調で云っていた。
　彼を責める権利などないことはわかっている。それでも云わずにはいられなかった。彼が父親として、帰国した霧切響子を迎えていれば、こんなことにはならなかったかもしれない。あるいは彼が家を捨てなければ、あるいは彼が探偵を継いでいれば……いくら仮定の話をしても、どうにもならないことはわかっているけれど……
「――もう十三歳か」彼は独(ひと)り言(ごと)のように呟(つぶや)く。「彼女が幼くして選んだ道は、人殺しも裏切りもまかり通る修羅(しゅら)の道だ。その道を歩き始めた時にはもう、この先誰ともわかり合えることはないと覚悟したはずだ。それでも――」
　彼は何か云いかけて、途中でやめた。
　余計なことを喋(しゃべ)りすぎたと、ふと我に返ったような顔つきだった。
「いずれにせよ、君が彼女の祖父について誤解をしていたことは、結果的によかったと思う。もしあの屋敷の異変にもっと早く気づいていたら、排除されていたかもしれない」
「排除……」

「それに君のおかげで、あの屋敷で何が起こったのか私にもおおよそ把握（はあく）することができた。ありがとう」
彼はさりげなく礼を云って続ける。「君の推測通り、庭に埋められていたのは霧切響子の母方の祖父だ。名前は卯槌棟八郎（うづちとうはちろう）。空手、剣道、柔道、弓道（きゅうどう）、合気道、居合、薙刀（なぎなた）、それに書道を足した八つの道で段位を持つ才気煥発（さいきかんぱつ）なご老人だった。そして霧切家のよき理解者でもあった」
　クリスマスに会ったその人は、霧切家の教訓めいたことを口にしていた。あれは新仙の変装に違いないが、本物の卯槌氏もかつては同じようなことをよく云っていたのだろう。少なくとも霧切響子は、彼の言動を不審には感じていないようだった。
　想像するに――生前の卯槌氏には、霧切家に対する尊敬の念のようなものがあったのではないだろうか。おそらく孫に対する期待も大きかっただろう。修道の集大成として霧切響子の未来を見据えていたかもしれない。
　霧切響子が身につけている護身術は、卯槌氏に由来するものかもしれない。変装した新仙が見せた動きは、卯槌流を真似（まね）たものだろう。運転席に座る彼も同様の技が使えるようだが、彼もまた探偵見習いの頃に護身術の稽古（けいこ）をつけられた過去があるのかもしれない。
「新仙帝について話そう」
　運転席の彼は唐突（とうとつ）に云った。
　車はすでにわたしの寮に近づいている。
　あまり時間は残されていない。
「彼が何者なのか――一言で云えばブラックホールみたいな男だ。霧切響子が一等星なら、新仙帝は肉眼で見ることもできない、それどころか周囲の光さえ捻（ね）じ曲げてしまう暗黒星だ」
　暗黒星――
　わたしたちが相手にしている存在は、あまりにも大きく、暗く、取りとめがない。
「彼がいつ何処で生まれたのか……その答えは驚くほど平凡で、取り立てて語るべきことはない。ある冬の日、この国の片隅で、ありふれた家庭の三男として誕生した。その記録は君でも簡単に見つけられるだろう。もっとも、それさえ彼の偽装によるものかもしれない。だからこれ以上のことを知ろうとしても、徒労（とろう）に終わるだけだと忠告しておく」
「新仙はいつから探偵として活躍するようになったんですか？」
「公式の記録として残っているもので云えば、少なくとも十歳の時には事件に関与し、解決に尽力している」
　やはりその世界の頂点に立つような人間は、幼い頃から頭角を現していたのだろう。オリンピックに出るアスリートたちがそうであるように、探偵の才能も幼少時から発揮されるものなのかもしれない。

わたしから見れば超人的にも思えるけれど、霧切響子もその歳の頃には祖父と一緒に仕事をしていたし、御鏡霊（みかがみれい）も九歳の時にはトリプルゼロクラスになっている。はるか雲の上の話だ。
「それでも他の名探偵たちと比べたら、彼は地味で目立たない方だった。名探偵と呼ばれるような連中が常識外れなだけかもしれないが、彼はごく普通の、ごく常識的な人間だった。むしろ正論にこだわりすぎて、いい意味で云えば真面目（まじめ）、悪い意味で云えば融通（ゆうずう）の利（き）かない青年だった。探偵をやっていれば嫌でも、人間の汚い部分や、世の中の理不尽さを目（ま）の当たりにするものだが、彼はそれに対し目をつむることも背（そむ）けることもできないたちだった」
　その気持ちはなんとなくわかる。少なからずわたしもそういう傾向にあると思う。
　けれど彼を理解するつもりはない。したくない。犯罪者集団のラスボスの気持ちなんて、理解してたまるものか。
「探偵として仕事をこなしていく過程で、彼が霧切不比等という探偵と知り合うことになったのは、偶然ではなく必然だったのだろう。そのうち彼らは一緒に仕事をするようになった」
「**霧切不比等さんと新仙帝はパートナーだったんですか**？」
「そうだ。パートナーであり、相棒であり、師弟（してい）でもあった」
　若き探偵のエースと、熟練（じゅくれん）の名探偵のコンビ。
　その語感だけでいえば、この世に敵なんていないと思えるほどだ。
　しかし結果的にコンビは解散し、片方の孫が探偵となり、もう片方がその敵として立ちはだかっている。
　なんて悲惨（ひさん）な運命だろう。
「十五年前、探偵図書館が発足した際には、不比等さんも新仙も創立メンバーとして名を連（つら）ねていますよね。けれど不比等さんは探偵図書館に自分を登録せず、DSCナンバーの導入にも反対していたと聞きます。もしかしてそのことがきっかけで、二人は袂（たもと）を分かつようになったのでしょうか」
「いや、そうじゃない。そんなことは瑣末（さまつ）な問題だ。二人が別々の道を歩き始めるようになったきっかけは――」
　車は見慣れた通りに入っていた。
　あと少し直進すれば、わたしの寮が見えてくる。
　運転席の彼は云いづらそうに口元を固くしていた。
　わたしは急（せ）かすように云う。
「きっかけは？」

「おそらく霧切響子だ」

「……え？」

「霧切家は代々、その血を引く者が探偵業を継いできた。しかし十五年前の時点で、霧切不比等には後継者がいなかった。何故（なぜ）なら、彼には息子が一人いたが、その男は探偵という業（ごう）を拒絶し、家を出ていたからだ」

「その話は霧切ちゃんから聞いています」

「それなら事情は明白だろう？　要するに霧切不比等は跡継ぎを必要としていたんだ。そこで才能のある青年をパートナーとして、将来は名を継がせることを前提に、従わせていた」

「新仙帝が……霧切の名を継ぐ？」

「ああ。襲名（しゅうめい）させるにふさわしい才能が新仙にはあると、霧切不比等も認めていた。高名（こうめい）な探偵の弟子や、遺志を継ぐ者が、その名を襲名することは稀（まれ）にあるんだ」

「でも……結果的に新仙は別の道を歩き始めたのですね」

「そうだ。新仙が霧切の名を継ぐことはなかった。霧切響子が生まれたことで、霧切の血が優先されることになったからだ。そのせいかどうかはわからないが……その後、新仙帝は霧切不比等の前から姿を消した。二人の間でどんなやり取りがあったのかは、本人たちしか知らない」

　彼が霧切家に執着するのは、継ぐはずだった名前を霧切響子に奪われたから？

　彼の目的は……霧切の名を奪うこと？

　そんなことのために、わざわざ巨大な犯罪組織を率（ひき）いてたくさんの人を殺し、霧切ちゃんを追い込もうとしているのだろうか。名家でもなんでもない家に生まれたわたしにとってみれば、とても馬鹿（ばか）げているように見える。

　彼らにとって『霧切』とは？

　彼らにとって探偵とは？

　まるで呪いみたいだ。

　霧切響子はかつて、生きることと探偵であることは同じだと云っていた。今ではその意味がわたしにも少しだけわかる。それは彼女の意志とは関係なく、血に刻み込まれた呪いなのかもしれない。

　車はいつの間にか車道の片隅に止まっていた。

　窓の外にはわたしの通う学校が見える。校門の目の前だ。寮はその門の先にある。

　運転席の男性は、わたしが自らドアを開けて車を降りるのを待っていた。

　けれどわたしは食い下がる。

「新仙帝の素顔を見たことがありますか？」
　尋ねると、彼は無言で首を横に振った。
　そもそも彼と新仙は直接会ったことがあるのだろうか。
　霧切不比等と新仙がパートナーだったのは、霧切響子が生まれる前だから、実家を出ていた彼が新仙と会っていなくても不思議ではない。だから新仙については独自に調べたのか、それとも——
「さあ、行きなさい」
　促される。
　わたしはドアに伸ばしかけた手を、ふと引っ込める。
「最後に質問してもいいですか？」
「なんだね？」
「あなたは新仙帝ではありませんよね？」
　まさかとは思うけれど——
　新仙ならやりかねない。そもそも運転席の男が霧切響子の父親だとして、あの屋敷で、あのタイミングで現れるというのはできすぎていないだろうか？　彼は霧切響子の父親に変装した新仙帝ではないのか。今までの話は新仙の立場からでも語れる。嘘も交じっているかもしれない。
　運転席の彼は言葉を探すように、正面を向いたまま首を竦めていた。
「誤解させたのだとしたらすまない」彼は口元に苦笑を零して云った。「私が何者であれ、私はこのまま君を帰すつもりだ。それが答えでは不足かい」
「あなたはあの屋敷で何をしていたんですか？」
「答える必要はない」
「いいえ。答えてください。その答え次第では、今ここであなたを拘束します。もしあなたが新仙なら——ゲームを終わらせるチャンスですから」
　わたしは眼鏡を押し上げて身構える。
　と云っても、武器らしいものなど持ち合わせておらず、彼が新仙だろうと霧切の父親だろうと、本気で襲って来られたら一瞬で組み伏せられてしまうに違いない。わたしにとって唯一有利なのは、ここが人目につく車道という点だけだ。
　運転席の彼はしばらく考え込むように、ハンドルに両腕を載せ、組んだ指先を見つめていた。
　やがてやれやれというように小さく首を振る。
「元々帰る場所などない身だが、今となっては帰る自由さえ保証されない身だ。厳しい職場でね……昇進するたびに身辺調査も厳しくなる。そうでなくても、私の実家は少し特殊だから、評議員たちの心

証がよくないというのに……」
　彼は独り言のように云いながら、スーツの内側に手を忍ばせた。
　わたしは息を呑む。
　何か武器でも取り出すつもりだろうか。
　思わず手がドアレバーに伸びかける。
「これで事情を察してもらうわけにはいかないかな」
　彼が一瞬、胸元にちらりと覗かせたのは――
　一枚の写真だった。
　写真の中央で、霧切響子が笑っていた。今よりもずっと幼くて、屈託のない笑顔で、父親らしき男性に両脇を抱え上げられている。
　彼女がそんなふうに誰かを信用しきった表情をしているところを見たことがない。
「かわいい……」
　わたしが写真を覗き込もうとすると、彼はすぐに隠してしまった。
「彼女とはもう二度と会えなくなるかもしれない。この先、私はそういう場所へ行くことになる。だからその前に思い出を拾いにね――それだけのことだ」
　彼はわたしと目を合わせようとはせず、車道の先を見たまま云った。
　わたしはドアのサイドポケットに突っ込まれたバインダーを盗み見る。そこには希望ヶ峰学園の学園章が記されていた。政府公認の特権的学園だ。霧切響子の父親はそこに教師として勤めているという。要人を多く輩出する学園であるだけに、機密の扱いには厳しいはずだ。
　彼もまたなんらかの決意を秘めて、自分の道を歩いているのだろう。それが家族と離れてでも為すべきことなのかどうかはわからない。けれど少なくともわたしは彼を疑うことをやめた。あんな写真を見せられて、これ以上疑う余地もない。
「詮索してすみませんでした」
　わたしは深く頭を下げる。
　それから大人しくドアを開けて、車を降りた。
　ドアを閉じる前に、車内に向けて云う。
「あの……無理を承知でお願いしますけど……わたしたちに協力してもらうことはできませんか。霧切家を憎んでいるのでもなく、彼女を嫌っているのでもないのなら……」
「それはできない」彼は即答する。「――というより私の出る幕などないよ。探偵としては彼女の方が優れている」

「霧切ちゃんが探偵を続けることには反対しないんですか？」
「当然だ」彼は初めてわたしに向き直り、云った。「彼女には才能があり、霧切家という居場所もある。それでいい。むしろ居場所をなくした時にこそ、私の力が役に立つだろう」
「でも……今の彼女を救ってあげられるのは……」
「君がいるじゃないか」彼は優しく微笑(ほほえ)んだ。「彼女に君のような友だちができてよかった。これからも彼女の傍(そば)にいてあげてくれ」
　その言葉に、わたしは報(むく)われた気がした。
　彼女の役に立てなくて、自分の無能さにうんざりすることも多いけれど。
　そんな人間でも、傍にいてもいいのかな。
　わたしは涙が溢(あふ)れそうになるのを隠すように、もう一度頭を下げた。
「卯槌家の件は私が処理しておく。一応、警察にも通報しておくが、新仙が関わっているのだとしたら、まともな捜査は期待できないだろうな。それから……釘(くぎ)を刺すようですまないが、私と会ったことは誰にも内緒だ。もちろん彼女にも。いいね？」
「わかりました」
　私はドアを閉じて、車から離れる。
　特に別れの挨拶(あいさつ)や合図などはなく、車は車列へと戻っていった。
　あの人と会うことはもうないかもしれない。
　そう思わせるような別れだった。
　霧切響子から話に聞く限り、彼は逃げるように家を捨て、一人娘をほったらかしにするひどい男だったのだけれど、実際に会ってみてその印象はだいぶ変わった。理知的で、哲学者のような難しげな表情の裏側に、温和で優しい人間性が窺(うかが)える。確かに彼のような人間は、霧切家の探偵には向いていないかもしれない。
　才能が問われる世界に生まれながら、認められずに『居場所』をなくした彼だからこそ、希望ヶ峰学園は人生を捧(ささ)げるべき職場になったのだろう。何故ならその学園は、才能ある子供たちの育成機関であり、彼らの『居場所』でもあるのだから——
　けれどどんな大人の事情があるにしろ、こんな状況でなお霧切響子と距離を置こうとする態度には、煮え切らないもどかしさを感じた。二人の間にある溝(みぞ)は、そんなにも深いのだろうか。それとも探偵としての霧切響子に、絶対の信頼を寄せているからこそ、手出しは不要と考えているのか。
　いくら彼女が才能に満ちた探偵だとしても、身体(からだ)は未成熟で、心もまだ幼い。
　霧切の名の誇りと、その呪いに一人で立ち向かう彼女に、いつか報われる日が来るのだろうか……

「──結(ゆい)お姉さま？」

　霧切が振り返ってわたしを見つめる。

　寮の部屋だ。

　彼女はベッドに腰掛け、自分の髪に手櫛(てぐし)を通している。

「あ、うん？」わたしはふと我に返る。「何？　霧切ちゃん」

「もう片方も」

　彼女は髪を左右とも三(み)つ編(あ)みにしてほしいとせがむ。

　わたしは云われるまま彼女の髪を編んだ。

「結お姉さま、目が赤いわ」彼女はわたしに背を向けたまま云う。「疲れているの？」

「んーん、大丈夫」わたしは目もとを拭(ぬぐ)って、霧切の髪を丁寧(ていねい)に編み込んでいく。「それより霧切ちゃん、少しは休めた？」

「ええ、充分よ」

　無理しているようだけど、だいぶ声に元気が戻っていた。

　彼女はその小さな背中に、親族の死や事件被害者たちの無念を背負っている。わたしは少しでも彼女の力になれているだろうか。

「ところで結お姉さま、何処へ行っていたの？」

「あ……えっと……調べ物だよ、調べ物！」

「何を調べていたの？」

「新仙のこと」わたしはごまかしつつ喋る。「かつては探偵としてトリプルゼロクラスになったくらいだから、事件の記事に名前が出たこともあったんじゃないかな……って。インターネットで調べてみたんだ」

「結果は？」

「うん……探偵図書館の創立メンバーに関する噂(うわさ)が幾(いく)つかあって、十歳の頃から事件を解決している若い探偵がメンバーの中にいたとかいないとか……もしかしたらそれが新仙かもしれないな……とか」

　わたしはしどろもどろになりながら言葉を探す。これ以上喋っていたら、車の中で会話したことをうっかり漏(も)らしてしまいそうだ。

「あまり参考にならないわね」

　霧切は眉間に皺を寄せて、ちらりとこちらを向く。

　その仕種(しぐさ)はあの人とそっくりだった。

「ごめん……」わたしは三つ編みを結(ゆ)い終え、最後にリボンを結んであげた。「終わったよ」

「ありがとう」

　霧切は嬉しそうに髪に触れて云った。

「どういたしまして、お嬢さん。それで、これからどうする？　時間的には少しだけ余裕があるけど、悠長(ゆうちょう)にはしていられないよね。挑戦状はあと五枚もあるんだから」

　今回の『黒の挑戦(デュエル・ノワール)』が始まってから二十四時間が経過した。

　残り１４４時間。

『黒の挑戦』は犯罪被害者救済委員会が仕掛ける犯罪ゲームだ。犯罪者は委員会が提供するトリックを駆使して、１６８時間のタイムリミットまでに標的をすべて殺害し、探偵に告発されなければ勝利となる。逆にわたしたち探偵は、犯人を告発することができれば勝利。

　今回の挑戦状は、トリプルゼロクラスの探偵にして犯罪被害者救済委員会の幹部である龍造寺月下(りゅうぞうじげっか)によって、直接わたしに突きつけられた。

　挑戦状は全部で十二枚。

　パラレル・シンキング＆マルチ・タスクの天才と呼ばれる龍造寺ならではの趣向(しゅこう)だろう。

　制限時間内にすべて解決できたら、龍造寺月下は敗北を認め、犯罪被害者救済委員会から抜けるという。もし解決できなくてもわたしにペナルティはない。といっても、人命がかかっているので、気を抜くわけにはいかない。

　多くの探偵や警察関係者からも尊敬される龍造寺月下が、どうしてわたしなんかを挑戦相手に選んだのかわからない。潜伏している霧切響子を引っ張り出すためだったのかもしれないし、もう一人のトリプルゼロクラスである御鏡霊の正体を暴(あば)くためだったのかもしれない。もっと他の理由かもしれない。きっと答えは一つではなく、重複し、交錯し、並行している。それが龍造寺月下のやり方だ。

　とりあえず事件の一つは霧切の活躍もあって、昨日のうちに解決できた。同時にわたしたちの協力者となったリコルヌこと御鏡霊が、あっという間に五つの事件を解決してしまった。

　これで十二の事件のうち、半分が解決されたことになる。

　残り六つ。

　そのうちわたしと霧切の担当する事件が五つ。残り一つは、すでにリコが捜査中だ。

　わたしは未解決の五枚の挑戦状を並べる。

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場所	BAR『グッドバイ』	2000万
凶器	ナイフ	500万
凶器	カリブドトキシン	3000万
凶器	ロープ	100万
トリック	密室	2000万
	総コスト	7600万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場　所　中世西欧拷問器具博物館　３０００万
凶　器　アイアンメイデン　３０００万
トリック　密　室　８０００万
総コスト　１億４０００万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場所　枯尾花学園　３０００万

凶器　ろうそく　２０００万

トリック　密室　１億５０００万

総コスト　２億

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場所　リブラ女子学院　2億
凶器　鉄パイプ　300万
トリック　密室　1億5000万
総コスト　3億5300万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場所	双生児能力開発研究所	5000万
凶器	ナイフ	5000万
トリック	究極の密室	5億
その他	鎖	3000万
その他	南京錠	3000万
	総コスト	5億6100万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

五月雨結

「こうして並べると、1億円以下の事件がかわいく見えるね。それでも楽ではないんだろうけど」
　挑戦状に記されているコストが高ければ高いほど、事件の難易度は高い。
　昨日解決した事件はコストが1億5100万だった。はっきりいってわたし一人で解決できるレベルではない。けれど霧切は一晩で解決してしまった。結局は霧切の頭脳に頼るしかない。
「どう考えても龍造寺さんはわたしの実力を勘違いしているよ」
「そうかしら」
　霧切はそっけなく云う。
「だって今まで事件を解決できたのは、ほとんど霧切ちゃんのおかげだし……そもそもトリプルゼロクラスの探偵とわたしとじゃ、最初から勝負にならないよ」
　今回の『黒の挑戦』はトリプルゼロクラスの探偵たちによる代理戦争の色合いが濃い。各事件の犯人や、探偵役のわたしでさえ、戦争に巻き込まれ、利用された民間人に過ぎないといった様相だ。
「それは違うわ。結お姉さまが戦うことを諦(あきら)めなかったから、私も一緒に戦うのよ。もし龍造寺月下が結お姉さまを畏(おそ)れているのだとしたら、そういうところだと思う」
　――今となってはもう、逃げるのにも勇気が必要ってだけだよ。
　その言葉は云わずに呑み込んだ。
　弱音を吐(は)いてばかりいるわけにもいかない。わたしよりも霧切の方がよほど苦境に立たされているのだ。彼女のためにも戦わなければ。彼女を傷つけようとする者から、彼女を守ること。それならわたしにもできるはずだ。
「そうだね、少しでも前を向いて進もう」
「それでこそ結お姉さまだわ」
「さあ、次はどの挑戦状にする？」
　わたしは五枚の挑戦状を手に取り、見比べる。
　コストの安いところから攻めるか、それとも現場が近い場所から攻めるか――
「その前に行かなければならない場所があるの」
「え？　何処？」
　思い当たる節(ふし)がない。
　霧切は立ち上がって部屋の扉に手をかける。
　彼女はいつもの制服姿だ。すでに準備万端のようだ。
「ま、待ってよ」わたしは慌ててリュックを背負う。「何処行くの？　ねえ？」
　寮を出て、学校の前でタクシーを捕まえる。

霧切に促されるまま、わたしは後部座席に乗り込んだ。

「目由良（めゆら）駅まで」

霧切は運転手に告げる。

目由良駅といえば、昨日の午後に御鏡霊争奪戦が繰（く）り広げられた場所だ。数名の死者も出ている。現場の捜査も続けられているだろう。できることなら近づきたくない。そんなところになんの用があるというのか。

訊（き）きたいことはたくさんあるけれど、わたしは駅に着くまで大人しく黙っていた。貴重な時間を割（さ）いてまで霧切が行くと云っているのだから、きっと何か意味があるはずだ。

駅でタクシーを降りる。

相変わらず人が多い。買い物デート中らしい若い男女や、スーツ姿のサラリーマンたちが足早に交差している。駅ビルの百貨店で起きた陰惨な事件など、もう何年も昔のことであるかのようだ。見たところ事件の捜査関係者などは見当たらない。わたしは胸をなでおろした。

霧切はわたしの手を引いて、見覚えのある場所まで導く。

雪を象（かたど）ったモニュメントが見えてきた。

待ち合わせによく使われる場所だ。冷たい風が吹く中、ぼんやりと立ち尽くしている人や、携帯電話で話をしている人たちがちらほら立っている。

その中に、わたしの知っている人がいた。

彼はリーゼントにアロハシャツという姿で、モニュメントの前にしゃがみ込んでいた。その独特の雰囲気のせいだろうか、人だかりも彼を避けるように輪になっていた。

「よお！　ガキんちょ探偵ども」

彼はわたしたちを見つけると、立ち上がって片手を振りながら、大声を上げた。

八鬼 弾（やき はじき）　DSCナンバー『６６６』

周囲の注目が集まる。

「ちょ、ちょっと……どういうことですか？　どうしてこんなところに？」

「どうもこうもねえよ、そっちが呼んだんじゃねーか。助っ人を必要としているんだろ？」八鬼はにやりと笑って、親指で自分を指す。「それならこのオレに任せとけって」

彼は十二の『黒の挑戦』の一つ、武田幽霊屋敷（たけだゆうれいやしき）の事件で、現場に集められた探偵の一人だ。目撃

者の一人として、また容疑者の一人として事件に巻き込まれている。
「私が呼んだのよ」
　霧切はコートのポケットから携帯電話を取り出し、わたしに返す。龍造寺月下から借り受けているケータイだ。どうやらそれを使って八鬼を呼び出したらしい。いつの間に彼の番号を知ったのだろう。
「おめーら、悪い連中に絡（から）まれて困ってるんだって？　ま、オレが来たからにはもう心配いらねーぜ。相手は何処のチンピラだ？」
「確かに困ってますけど……」
「協力者は一人でも多い方がいいわ」霧切はコートのポケットに両手を突っ込んだまま、いつもの冷淡な顔つきで云う。「私たちの手が届かない範囲にある情報はリコ頼みになっている部分が大きい。それを補（おぎな）うためにも人手が必要なの。彼を信用していないわけではないけれどね。他にも水井山（みずいやま）さんと宿木（やどりぎ）さんにもコンタクトを取ってある」
「そっか！　前の事件で容疑者として巻き込まれた人たちなら、犯罪被害者救済委員会のメンバーであることを疑う必要はないんだね」
「探偵図書館で知らない探偵を選ぶよりはマシという程度だけれど」
「でも……」わたしは霧切に小声で耳打ちする。「新仙じゃないよね？　この人」
「おいおい、お前ら、何こそこそ喋ってんだよ」八鬼は怪訝（けげん）そうにわたしたちの間に割って入る。「オレが新鮮じゃないってどういうことだよ。こう見えてまだ二十八だぜ？　女子高生と付き合ってても違和感ないレベルだろーが」
　わたしは話を聞き流しながら、目を細めて八鬼を観察する。変装マスクをしているような様子は見受けられない。身体つきにも不自然な点はないようだ。わたしが知っている新仙帝は、全体的にもう少し引き締まっていたように思う。
「――で、オレは何をすればいい？」
「その話は全員集まってからにするわ」
「もう約束の時間は過ぎてんぞ」
「あと十分待って、誰も来なかったら行きましょう」
　霧切はモニュメントに背を向けて、通りを行き交う人々を観察するように佇（たたず）んだ。わたしも真似して彼女の隣に並ぶ。八鬼はその場にしゃがみ込み、火をつけていない煙草（たばこ）を口元でもてあそび始めた。
　たった十分の間にも、わたしたちの周囲で待ち合わせをしていた人たちは、入れ替わり立ち替わり動いていた。まるでわたしと霧切だけ時の流れから取り残されているみたいだ。本当にそうだったら、どれだけいいか――

結局、十分待っても誰も来なかった。
「怖気(おじけ)づいたんじゃねえか？」八鬼は指先で煙草を器用にくるくると回しながら立ち上がる。「ま、オレ一人で片づけてやっから、心配すんな」
「霧切ちゃん、どうする？」
「最初からみんな来てくれるとは思ってないわ。当然、昨日の件もあって警戒しているでしょうし。これ以上時間を無駄にするわけにもいかない。行きましょう」
「とりあえずサテンで茶しばこうぜ。ふーさみぃ、さみぃ」
　八鬼は背中を丸めながら云った。まずその服装をどうにかした方がいいと突っ込みたいけど思い留(とど)まった。
　わたしたちは駅ビルへと向かう。
　その時、背後から車のクラクションが聞こえてきた。振り返ると、モニュメントの向こうの道路にグレーの高級外車が止まっている。
　運転席の窓が下がり、そこに知っている顔が現れた。
　西洋人のハーフっぽい顔立ちに真っ黒なサングラスをかけたスーツの男。あれは確か……

サルバドール・宿木・梟(ふくろう)　DSCナンバー『752』

「お待たせしてすみません。道が混んでいたもので」
　わたしたちが近づくと、彼は左ハンドルの運転席で小さく頭を下げた。言葉遣いにやや外国風の訛(なま)りがある。日本語そのものは流暢(りゅうちょう)だ。
「つーか、駅で待ち合わせしてんだから電車で来いよ。ナメてんのか」
　八鬼が睨(にら)みを利かせながら詰め寄る。
　しかし宿木は穏やかな笑みを浮かべたまま少し首を傾(かし)げて、八鬼をやり過ごした。
「どちらへ向かうのですか？　よかったらお送りしますよ」
「秘密の話ができるのなら何処でもいいわ」
　霧切は頬(ほお)にかかった髪を払いながら云う。
「それなら車の中で話しましょう。ドライブでもしながら。どうぞ、乗ってください」
　霧切はためらわず後部座席のドアを開けて乗り込む。わたしも続いて乗り込もうとした。
「ちょっと待って！」

通りから女性の声がして、わたしを呼び止める。
着物姿の小柄な女性が、人ごみをかき分けるようにして近づいてきた。和人形のようなおかっぱ頭に眼鏡をかけている。右手には何故か双眼鏡を持っていた。
「わたくしも伺わせていただきます」

水井山幸　DSCナンバー『527』

「来てくれたんですね！」
わたしは嬉しくなって笑顔で彼女を迎える。彼女もまた武田幽霊屋敷の事件で知り合った探偵の一人だ。これで全員揃ったことになる。
けれど水井山の表情はけっして穏やかではなかった。むしろ怒っているようにも見える。
「昨夜はどうも」彼女は皮肉っぽく云って頭を下げた。「刑事さんからすぐに説明を受けて解放されましたけれど、一度でも犯人扱いされた屈辱、忘れもしませんわ。いくら真犯人を追いつめるためとはいえ、わたくしを名指しするなど……」
彼女は先の事件で、真犯人の計画により犯人役に仕立て上げられてしまった。霧切はあえてその計画に乗り、水井山を犯人として指摘したのだ。きっと生きた心地がしなかっただろう。
「まあまあ、そう怒らずに。もしも霧切さんがいなかったら、本当に犯人として捕まっていたかもしれないですよ」宿木がとりなすように微笑みかけながら云う。「何より、そんな怖い顔をしていたらせっかくの美人が台無しです。さあ、助手席が空いてますよ。乗ってください」
「話を伺うだけですからね」
水井山は顔を赤くしながら、大人しく助手席に乗り込んだ。何故か草履を脱いで、シートに正座している。
わたしと八鬼も続いて乗り込む。
車が発進した。
五人の探偵を乗せ、車は大通りの車列へと入っていく。
「ったくよー、オレしか来ないのかと思ったじゃねえかよ。いい大人なんだから集合時間くらい守れよな」
八鬼が後部座席から身体を前に乗り出して云う。
「わたくしはあなた方が来る前からずっといましたわ」
「はあ？」

「隠れて様子を窺っておりました」水井山は双眼鏡を見せつけて云う。「一方的に呼び出されて、事情もわからないまま事件に巻き込まれるのはもうこりごりですからね」
「疑(うたぐ)り深いやつだな」
「むしろ昨夜の事件があったあとで、警戒心も抱かずによく姿を見せられましたね。もしあの場所に来たのがあなた一人だけだったら、そのまま帰ろうと思っていましたけれど、宿木さんもいらっしゃったので……」
　探偵としてはそれくらい警戒心があった方が心強いかもしれない。
　車は公園の並木道が見える通りに入っていく。
「とりあえず音楽でもかけましょう」
　宿木がカーステレオのスイッチを入れた。何処かで聞いたことがあるようなクラシック曲が流れ始める。
「あら、ストラヴィンスキーですね」
　水井山が反応する。
「ご存じですか？」
「ええ、とても好きな曲です」
「私も特に初期のバレエ音楽が好きでしてね。私は探偵をやっていなかったら、バレエのダンサーをやっていたでしょう。探偵としては絵が専門ですけど、描く才能はまるでなくて」
　宿木はサングラスを押し上げながら、にこやかに笑って云う。確かに彼は探偵にしておくにはもったいないほど、すらりとしたモデル体型で、手足も長い。なんの因果(いんが)で探偵をやっているのかはわからないけれど、DSCのランク付けでも『2』をもらっているので、かなりの実力者だろう。
「水井山さんは確か建築が専門でしたね？」
　宿木が尋ねる。
「ええ。本職は一級建築士です。探偵はちょっとした成り行きで始めたのですけれど、今ではそちらの依頼が多くなってしまって」
「建築と犯罪は密接な関係にあると云っても過言ではないですからね。そういえばここから海に向かったところに面白い建物があると聞きました。今から見学にでも行きますか？」
「あら、それなら今度二人きりで……」
「おいおい」八鬼が会話に割って入る。「二人だけでお見合いみてーな空気になってんじゃねーよ」
「八鬼さんも一緒に行きます？」宿木は構わずに話を進める。「後学(こうがく)のためにギャンブルについても教えてください。あなたの専門でしたよね？」
「ギャンブルに興味あんのか？　やめとけ、お前みたいなマイペース野郎はカモにされて泣くだけだ」

「そういうものでしょうか」
「あたりめーだ、ギャンブルの世界をナメてんのかよ。バレーだかバスケだか知らねーが、温室育ちのぼっちゃんにはわかんねーだろうな。次の一手が命を焼き尽くすかもしれないっつう、ぎりぎりの綱渡りをする感覚がよ。そもそもギャンブルっつうのは……」
　結局、八鬼もいつの間にか宿木のペースに流されている。
「あの……話を進めていいですか？」わたしはたまらず口を開く。「霧切ちゃん、そろそろ説明してくれる？」
　霧切は肯くと、探偵を呼び集めた理由を語り始めた。
　犯罪被害者救済委員会と、龍造寺月下による十二の『黒の挑戦』について。そしてわたしたちが直面している残り五つの事件を制限時間までに解決するために、協力者が必要だということ。
「――というわけで、どうかわたしたちを助けてください」
　わたしは頭を下げて云う。
　ステレオから流れる音楽はいまや最高潮を迎えようとしていた。それに比例するように車内の空気は張りつめていく。
「なんだよそのナントカ委員会って犯罪組織はよ……チンピラとは訳が違うじゃねーか。しかもあの龍造寺月下が組織の幹部ってマジかよ」八鬼が顔をひきつらせながら云う。「でもお前ら、昨日の事件では龍造寺から派遣された捜査員として活動してたじゃねーか」
「龍造寺さんは警察にも顔が利くみたいですから……わたしたちの捜査がスムーズに行くように手配してくれたみたいです」
　わたしは答える。
「敵に塩を送るってやつか？」
「彼らはそれを『フェア』と呼ぶようです」
「何処が『フェア』だよ。全然公正じゃねえ」
「でも……これ以上厳しくされたら、解決できるものもできなくなっちゃいますよ」
「そうじゃねえよ、犯人にとって不利すぎんだろ、このゲーム」
「えっ……」
　考えてもみなかった。
「探偵側は仲間を何人呼んでもいいんだろ？　しかもランク無制限だ。犯人の選んだ事件のランクが低くても、場合によっちゃゼロがつくような探偵がくるかもしれない。探偵側が組織的に動いたら『黒の挑戦』なんて勝負にもならねえよ。ワンサイドゲームだ」

「でも……犯人は自分で事件の舞台や使用するトリックを選べるみたいですから、組織的な対応がとれないように設定すればいいと思います。わたしが犯人ならそうします」
　今まで『シリウス天文台』や『ノーマンズ・ホテル』など、クローズド・サークルが舞台に選ばれてきたのは、そういう理由があるのだろう。探偵はもとより、警察も介入できないような状況が理想的だ。
「いつもはそれでいいかもしれねーよ？　だが今回の龍造寺が用意した十二の挑戦状の犯人たちはどうだろうな。龍造寺は当然、複数の探偵が動くことを想定していただろう。もう一人のトリプルゼロが参戦することも織り込み済みだったんだろ？」
　考えてみれば確かに——特に事件を起こす前にリコに捕まった犯人たちは気の毒だ。ランク『7』程度の探偵を相手にするつもりが、何処からともなく現れた最強の『000』ナンバーに捕(とら)えられてしまったのだから。
「私はアンフェアだとは思いませんね」
　宿木が云った。
　穏やかな表情のまま、サングラスの位置を直す。
「『黒の挑戦』の犯人は、人の道を外れて復讐を為そうとする犯罪者なのでしょう？　そもそも人間社会のルールを逸脱(いつだつ)しているのですから、公正さを問うのは論外でしょう」
「そりゃ自分から裏カジノに足を踏み入れておいてイカサマだなんだと騒いでる連中には同情できねえっていう意見には賛成だけどよ……裏には裏のルールがあるからこそ、ゲームが成り立つっつうもんだろ。こんな不利なゲームなのに、よく十二人も挑戦者が出てきたよな。そこんところが解(げ)せねーつうか……」
「そもそも本当に『黒の挑戦』なるものが存在するのでしょうか？」水井山が云う。「わたくしにはまだ、あの安楽椅子伯爵(あんらくいすはくしゃく)が犯罪者だというのが信じられません」
「昨日の事件も『黒の挑戦』の一つです。当事者なら事件の異常性がわかるでしょう」わたしはリュックから挑戦状を取り出す。「これが挑戦状です。犯人はここに書かれている通りに殺人を実行したんです。水井山さんを犯人に仕立て上げることも計画通りだったと思います」
「このようなものを見せられても、なんの判断材料にもなりません」
　さすがに慎重だ。
　わたしが彼女の立場だったら、同じように半信半疑だったかもしれない。事実、今でもわたしは冗談じみた悪夢を見せられているような、ふわふわとした非現実感の中を漂(ただよ)っている。霧切響子という道しるべがなかったら、真っ直ぐ歩くことさえできなかっただろう。
　わたしたちが戦っている相手は普通じゃない。本来なら尊敬すべき相手でもある。だからこそ水井山たちを説得するのは難しいだろう。

「霧切ちゃん、やっぱりやめとこうよ」わたしは彼女の腕を摑(つか)んで云う。「わたしたちだけでやれるところまでやろう。時間がもったいないよ」
「おいおい、協力しねえなんて云ってねーだろ。ただ龍造寺だの委員会だの云われても、すんなり受け入れられねーっていうかよお……」
　八鬼はリーゼントを撫(な)でつけながら云う。
「わたくしは協力しかねます」水井山はきっぱりと云った。「犯罪組織の存在はともかく、殺人事件は専門外ですから」
　断られるのは当然だ。
　孤独な戦いになることは覚悟している。
「あの……宿木さんは手伝ってくれますか？」
　わたしはおそるおそる運転席に問いかけた。
「それを答える前に——一つ、霧切さんたちに尋ねたいことがあるのですが」
　宿木はバックミラーを覗くように顔を上げる。サングラスをしているので視線はわからない。
「何？」
「魚住絶姫(うおずみたえひめ)という探偵に心当たりはありませんか？」
「——えっ」
　わたしは思わず声に出していた。
　魚住絶姫といえば、『ノーマンズ・ホテル』の事件で亡くなった探偵だ。まさかこんなところで彼女の名前を聞くことになるなんて。
「どうやらご存じのようですね」宿木は穏やかな表情を変えずに続ける。「もしよかったら彼女の身に何が起きたのか教えてください」
　霧切は淡々と、魚住を襲った悲劇について語った。
　宿木はその話を聞いている間も、特に取り乱したりすることなく、運転を続けた。ただ一つ変化があったとすれば、赤信号で止まった車が、再び発進するのにいつもより少しだけ時間がかかったことくらいだ。
「わかりました。教えてくれてありがとう」
　話を聞き終えて、宿木は短く云った。
「あの……魚住さんとお知り合いなんですか？」
　わたしは尋ねる。
「ご想像にお任せします」宿木はミラー越しに、にっこりと笑顔を送った。「ともあれ私は全面的に霧切さんたちに協力することに決めました。相手が誰であろうとね」

「えっ、本当ですか？　あ、ありがとうございます」
　どういう理由かわからないけれど、仲間が増えるのはいいことだ。宿木は探偵としてもランクが高いし、何よりとっつきにくさがないのがいい。探偵には奇人変人が多いけれど、そんな中で彼はオアシスと呼べる存在かもしれない。
「よくわかんねーマイペース野郎だな、ほんとによ」八鬼が呆（あき）れた様子で云う。「置いてきぼりくらってるオレらにもご説明お願いできますかね」
「第一に、龍造寺月下が犯罪被害者救済委員会という組織の幹部であるというのは本当です。またその組織が、復讐心を抱く者を挑戦者に見立ててゲームをしているというのも事実です」
「はあ？　なんでお前、そんなこと知っているんだ？」
「そして霧切さんたちが委員会と戦っているというのも事実です」
「だから、どうしてそんなことが云えるんだよ」
「昨日の事件で幾つか気になることがあったので、実は今日の午前中、武田幽霊屋敷の事件の犯人に接見してきました」
「な、何？」
「犯人から直接、事情を聞いてきたのです。そこで委員会のことや、ゲームのルールなどについても教えてもらいました。さきほど霧切さんたちから聞いた説明とも齟齬（そご）はありません」
「はあ？　なんでそういうことを最初に云わねーんだよ」
　八鬼が前の座席に身を乗り出して云う。
　まったくだ。手の内を隠しておいて、わたしたちの出方を探ろうとしたのだろうか。
「よく接見できましたね」
　驚いた様子で水井山が云う。
「ええ、弁護人に同伴する形でなんとか許可してもらえました。私はつい最近、ある事情から謎の犯罪組織が存在することを知って、ひそかに調べていたのですが、昨日の事件がそれに該当するのではないかと気づき、犯人に会うことにしたのです。やはり私の推測は当たっていました」
「『黒の挑戦』は本当に存在するのですね……」
　水井山はシートに深く沈み込みながら云った。
「でもよ、昨日の犯人はゲームに負けてるじゃねーか。負けたら殺されるんだろ？」
「厳密には、委員会から前借りしたコストを支払えなかった場合ですね」わたしは八鬼の問いに答えつつ、ふと疑問を感じた。「宿木さん、彼女は無事だったんですか？　通常であればとっくに委員会に殺されていてもおかしくありませんが……」

「今回は特別、十二件すべてのコストを、龍造寺月下が肩代わりしているそうです。逮捕後、委員会からの使いがきて、そう告げられたとのことです。つまりコストは支払い済み。ゲームに負けても、委員会から請求されることはありません。だから抹殺されることもないようですね。もちろん捕まれば法律上の罰則を受けることにはなりますが」
「なるほどな……それで挑戦のデメリットを相殺しているってわけか。そういうことなら話は別だ。ためらわずに犯人どもをぶっ潰せる」
　八鬼は腕組みして云う。どうやら彼なりに『フェア』であることを認めたようだ。
「挑戦者本人がその事実を知らないのでは、『フェア』とは云えないのではありませんか？」
　水井山が口を挟んだ。
「いや、知ってたら今度は逆にゲームになんねーだろ。コストかけ放題の選び放題で、とんでもない事件になっちまう。コスト調整もこのゲームの醍醐味だろうし」
「……確かにそうかもしれませんけど、あなたが胴元側の思考をしていることが気にかかりますわ」
「ギャンブルの世界に長くいると、そうなっちまうんだよ」
　八鬼は苦笑して云う。
　それにしてもまさか、龍造寺が犯人たちのコストを支払っていたなんて。
　リコによって未遂で捕まった犯人たちは、龍造寺の城に拘束されているらしい。それも龍造寺の配慮があってのことなのかもしれない。ゲームが終了するまでは、退場という形で留置される。当然リコもわかっていてそうしたのだ。
「話がまとまったのなら、次に進むけれど、いい？　もし捜査に参加したくない場合は、ここで別れましょう」
　霧切が冷めたような口調で云う。
「水井山はどーすんだ？」
　八鬼が尋ねる。
　水井山は困ったような顔でしばらく唸ったあと、重たい口を開いた。
「前言を撤回します。協力いたしますわ。個人的にも、犯人にされかけたという不名誉を雪ぎたいですから。ただしわたくしの力が役立てられるかどうかはわかりませんよ」
「ありがとうございます」わたしは頭を下げて云う。「味方は一人でも多い方が助かります」
　こうしてばらばらだった探偵たちを乗せた車は、一丸となって冷たい風の中を進む。
　わたしは今までにないほどの自信を感じていた。
　みんなで力を合わせれば、きっとできないことはない。

今回もがんばって事件を解決するんだ！
「――では説明するわ」
霧切は事務的に話を進める。
さすがに冷静だ。わたしとの温度差は歴然。
「残り六件のうち、一件は別の探偵が受け持っているので除外するわ。残りは五件。ちょうどここには五人いるから、一人一件ずつ担当を割り振りたいのだけれど、いいかしら？」
「割り振るのはいいんだけどよ、その前にチームのリーダー決めね？」八鬼が云う。「チーム名はオレが考えるから」
「『チーム・フェニックス』なんてどうです？」宿木が話に乗る。「ちょうどストラヴィンスキーの『火の鳥』が流れているので……」
「いや、だからチーム名はオレが決めるって」
「もっとかわいらしい名前にしてください。できれば和風で」
水井山が発言した。
「おい、先にリーダー決めろって云ってんだろ。立候補するやついねーのかよ。仕方ねえな、じゃあオレがリーダーでいいな？」
「それでいいわ」霧切が云う。「話を進めるけど、事件の割り振りが決まったら、その現場まで捜査しに行ってもらうわ。目的は情報収集。ただし深入りは厳禁。必要なのは正確な情報であって、けっして手柄ではないから」
「犯人を捕まえるなって云うのか？」
「そうね、そう云い換えてもいい。『黒の挑戦』では無関係な人間も殺される可能性があるわ。だから細心の注意を払ってほしいの」
「おい、おめーら、細心の注意を払えよ」
八鬼がわざわざ云い直す。
「まだ事件が発生していない場合には特に気をつけて。犯人にとって第一の目的は、計画通りに殺人を実行することだから。それを妨害されそうになったら、なりふり構わず襲ってくるかもしれない。相手は『黒の挑戦』の時間中にどれだけ罪を重ねても、ゲームクリアさえすれば全部なかったことにできる」
「もし犯行を事前に知ることになっても、見て見ぬふりをしろと云うのですか？」
宿木が尋ねた。
「そうね。その場合は結お姉さまを呼んで」
「わ、わたし？」

「探偵役である結お姉さまは、犯人から攻撃されることはない。この中でもっとも心強い味方よ」
「ルール上はね」
　わたしは自嘲気味（じちょうぎみ）に云う。
「それから捜査の成果があってもなくても、毎日正午に結お姉さまに連絡すること。龍造寺月下のケータイ番号を使ったらいいわ。盗聴されてるかもしれないけれど、気にしなくていい」
「みんな同時に連絡したら話し中になるかもしれねーな。じゃあオレが正午で、マイペース野郎がその十五分後、水井山はさらにその十五分後、ガキんちょがその十五分後。それでいいな？」
　各々肯く。
「では次に割り振りを決めるわ」
「割り振り決めるぞ、おめーら！」
「一番コストの高い事件を私が担当する」
　霧切は『双生児能力開発研究所』の挑戦状を手に取った。究極の密室に挑戦するつもりらしい。さすが霧切ちゃんだ。
「では私は一番遠い場所の事件にしましょう」宿木が云った。「機動力には自信があるんです。仕事柄、国内に留まらず、世界中あちこち飛び回ってますからね」
「時間には遅れてきたけどな」
　ここから一番遠い現場は『枯尾花（かれおばな）学園』になる。もっとも、『枯尾花学園』という学校は実在せず、ある心霊スポットとなっている廃校がそのように呼ばれているらしいという噂があるだけだ。
　宿木の担当は『枯尾花学園』に決まった。
「残り三つ、どうするよ」
　八鬼が残った挑戦状をひらひらと振る。
「おねーさまはコストが高いやつでいいんじゃねーか？」八鬼が余計なことを云う。「対委員会って点じゃ、おめーらの方が経験あるだろうし」
「えっ、でも……」わたしは戸惑（とまど）う。「一人で捜査しなきゃいけないんだよね？」
　霧切がいない状況で戦えるだろうか。
　――いや、戦わなきゃいけないんだ。
　彼女に頼りすぎていてもよくない。わたしだって事件を解決できるところを見せないと。
「わかりました。じゃあわたしは『リブラ女子学院』ですね」
「女子高生的にはふさわしい場所だな」
「ではわたくしは……」

残りはコスト７６００万の『ＢＡＲ』と、１億４０００万の『中世西欧拷問器具博物館』だ。コストに倍くらい差がある。
「博物館の方にします」
「おい、オレに一番安いやつやらせる気かよ！」
「……では交換します？」
「いや、おめーがそれでいいならいいんだけどよ」
「その博物館には一度行ったことがあります。名前の通り、歴史上拷問に用(もち)いられてきた器具を展示していました」水井山は口元に手を当てながら云う。「でも確か何年も前に閉館しているはずですが……」
「閉鎖された建物を買い取って、事件の舞台にするのが委員会のやり方です」
　わたしは云う。
「残りは一つだな。それじゃ、リーダーは『ＢＡＲ』の事件を担当するぜ」
　それぞれの担当が決まった。

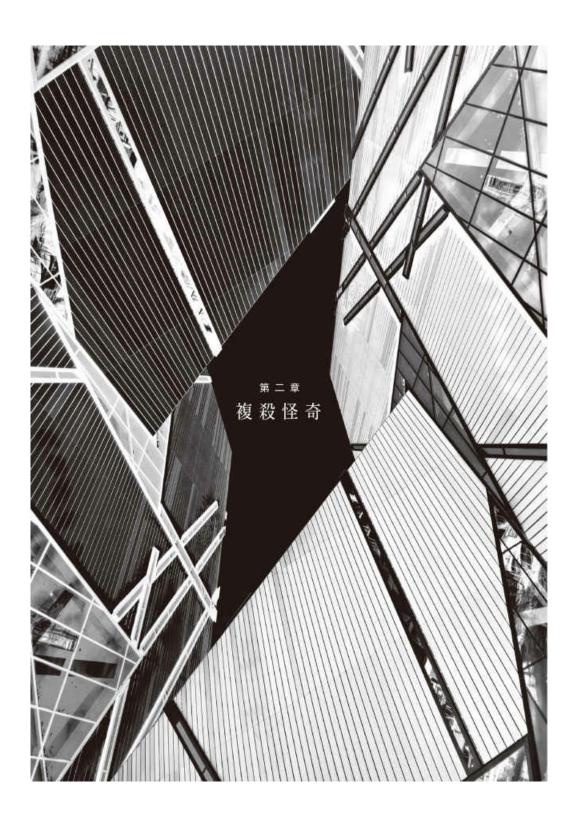
『ＢＡＲ　グッドバイ』　八鬼弾
『中世西欧拷問器具博物館』　水井山幸
『枯尾花学園』　サルバドール・宿木・梟
『リブラ女子学院』　五月雨(さみだれ)結
『双生児能力開発研究所』　霧切響子

「もう一度云っておくけれど、ほしいのは情報よ。犯人を捕まえるところまでは望んでいないわ」
　霧切は念を押す。
「わかったよ」八鬼が煩(わずら)わしそうに云う。「っていうか、具体的にどういう情報が必要なんだ？」
「主に現場の状況について。新聞の記事や、警察発表からではわからないような種類の情報が事件を左右するわ。たとえば現場に落ちているささいなゴミとか、あまり嗅(か)ぎ慣れない匂(にお)い、天候、地理的な条件、他にも色々。それから事件に関与した登場人物のプロフィールも重要ね。特に関係者の誕生日については必ず聞き出してほしい」
「誕生日？　なんか事件と関係あんのか？」
「詳しいことはあとで説明するわ。全員、無事に再会できたら」
「縁起(えんぎ)でもねえこと云うなよ」

八鬼は笑い飛ばすように云ったが、車内は水を打ったように静まり返ってしまった。沈黙の中で、死神の足音を聞いたのは、きっとわたしだけではないだろう。
「そろそろ駅に着きます」
宿木の言葉でわたしたちは我に返ったように窓の外を見回した。車はいつの間にか、駅の待ち合わせ場所に戻っていた。
雪のモニュメントの横に車が止められる。
「最後に」霧切が云った。「費用の請求については私が受け付けるわ」
「金なんか取れるかよ」八鬼は吐き捨てるように云って、車のドアを開けた。「その代わり、オレのことはリーダーと呼べよ」
わたしが肯くと、八鬼は背中を向けたまま親指を立てて、駅前の人ごみの中に消えていった。
「結果が出せたら相応の報酬をいただきます」水井山は車を降りながら云う。「領収書の送付先はのちほどご連絡いたしますわ」
彼女は歩道に出ると、こちらを振り返ってお辞儀(じぎ)をして、駅の構内へ入っていった。
「よかったら家まで送りますよ」
運転席の宿木が云う。
「いいえ、次の行き先は事件現場だから。一人で行けるわ」
霧切が答える。
「そうでしたね。お互いがんばりましょう」
わたしと霧切は車を降りた。
宿木は軽く手を振ってみせながら、車を発進させ、道路の先へ消えていった。
また霧切と二人きりになってしまった。
駅の改札を抜け、ホームに出る。
わたしと霧切の行き先はそれぞれ上りと下りで別方向だった。電光掲示板によると、霧切の乗る電車の方が早く着くようだ。
「ここでとりあえずお別れ？」
わたしが尋ねると、霧切は肯いた。
霧切と離れ離れになるのは不安だった。わたし一人で事件と立ち向かえるのかという心配もあるけれど、彼女とここで別れたらまたしばらく会えないような気がして怖かった。
「いくら探偵役だからといって、結お姉さまも犯人を深追いしてはだめよ。まずは情報を集めて無事に持ち帰ること」

「わかってるよ」
「それから、結お姉さまだけには事前に云っておくけど、天秤（てんびん）座に気をつけて。犯人の可能性があるから」
「え？　犯人？」
「そう、私の推測が間違っていなければ、『リブラ女子学院』の犯人の星座は天秤座よ。関係者全員の誕生日をチェックして、星座を確認しておいて」
「ど、どういうこと？　なんでそんなことがわかるの？」
「それが龍造寺月下のゲームのルールなの」
　その時、霧切の乗る電車がホームに入ってきた。彼女の髪がふわりとふくらんで、声がかき消される。
　ドアが開き、降車客がわたしたちの周囲を川のように流れていく。
「あとで説明するから」
　霧切はそう云って電車に乗ろうとする。
　わたしはとっさに彼女を強く抱きしめて、そのまま離さないと決めた——
　けれど実際にそうしていたのは三秒だけで、わたしは彼女を送り出し、目の前でドアが閉まるのを見守っていた。今何を優先すべきか、わたしにはわかりすぎるほどわかっていた。
　電車が発進する。
　霧切は姿が見えなくなるまで、困惑したような顔で窓越しにこちらを見ていた。
　残り１４２時間。
　八鬼、水井山、宿木の三人の探偵を巻き込むことになってしまったが、これでよかったのだろうか。
　わたしは不安を胸に抱えたまま、次の挑戦状の舞台となる場所へ向かうため、電車に乗り込んだ。

第二章

複殺怪奇

リブラ女子学院　――五月雨結

　あれ？
　頬が濡れている。
　どうしてわたしは泣いているんだっけ？
　哀しいことがあったから？
　それとも、あの夢を見たから？
　理由はよくわからない。
　それに……
　前にも同じようなことがなかったっけ？
　視界がぼやけている。
　眼鏡がない。
　わたしは無意識のうちに周囲に手を伸ばす。少しずつ覚醒していく意識の中で、ようやく自分が床に横たわっていることに気づいた。
　どうしてわたしはこんなところに倒れている？
　霧切ちゃんと別れてから、わたしは……
　えっと、どうしたんだっけ？
　ふと顔を上げると――
　目の前に、くるぶしまですっぽりと覆われた黒いマントの人物が、わたしを覗き込むようにして立っていた。
「ひゃっ」
　わたしはとっさに悲鳴を上げて、上半身を起こす。
　黒マントの人物はそれに反応するように一歩下がり、わたしから距離をとった。
　相手はフードを目深に被っている。また口元を白いマスクで覆っている。そのうえわたしは眼鏡をかけていないので、ほとんど相手の顔が見えない。
　誰？
　そう問いかけようとして思い留まる。

黒マントは右手に灰色の棒をぶら下げていた。

鉄パイプだ。

赤黒くまだらに染まっている。

血痕（けっこん）だろうか。

わたしは尻（しり）もちをついた状態のまま、黒マントから少しでも離れようとあとずさった。全身から冷や汗が噴き出し、自分の心臓の音が命のカウントダウンのように聞こえてくる。

一体なんなの？

そんな物騒（ぶっそう）なもの持って、どうするつもり？

わたしはあれで殴られて気を失っていたのか？

次はとどめを刺すつもりだろうか？

混乱したまま、本能的に逃げ出そうとして、あとずさりを続ける。

わたしの指先が、背後で何か柔らかいものに触れた。

振り返ると、そこにセーラー服を着た女の子が横たわっていた。顔面は蒼白（そうはく）で、目を見開き、天井（てんじょう）を見上げている。

周辺の床が血で濡れていた。

死んでいる……

わたしは黒マントに向き直る。

しかし黒マントはわたしに襲いかかることはせず、何を思ったのか背を向けて走り出した。

引き戸を開け、外へ逃げ出す。

「ま、待てっ」

わたしはよろけながら立ち上がり、黒マントを追いかけようとした。

その前に、眼鏡——

部屋を見回し、赤い絨毯（じゅうたん）の上に眼鏡を探す。部屋は円形で、わたしはそのほぼ中央にいた。壁沿（かべぞ）いに書き物机が一つ置かれているが、それ以外は家具も装飾品も見当たらない。ドアは一つ。窓はない。眼鏡はすぐ足元に落ちていた。

眼鏡をかけ、あらためて、横たわる女の子を確認する。見慣れない制服だ。ショートカットで、短く切り揃えられた前髪が血で額（ひたい）に張り付いていた。

白い首筋に触れる。

脈はない。

温（ぬく）もりはもうそこにはなかった。

わたしは戸惑いと同時に怒りを覚える。
また人が殺された。
どうして……
どうしてこんなこと！
セーラー服の胸ポケットから、生徒手帳が顔を出していた。それを抜き取り、中身を調べる前に、自分のポケットに突っ込む。確認はあとだ。
まずは犯人を確保しなければ。
わたしはスライド式の戸を開けて部屋を飛び出す。
正面に真っ直ぐ一本道の廊下が続いていた。
古い木造の建物だろうか。赤い絨毯が敷かれ、壁には等間隔にランプ風の照明が灯(とも)されている。
正面に見える扉が開きっ放しになっており、その先に広い空間が見えた。
そして――今まさにその戸口をくぐりぬけて、走り去る黒マントのうしろ姿があった。
「待て！」
わたしは声を上げながら走り出す。
黒マントは一度こちらを振り返り、さらに走る速度を上げた。しかし焦っているせいか扉を閉めず、逃げる姿が丸見えのままだ。
これなら見失わずに済む。
わたしは大広間に飛び込む。
ひんやりとした静謐(せいひつ)な場所――
そこは礼拝堂とでもいうべき場所で、マリア像や説教台の他に、礼拝者用の長椅子が並べられていた。縦長の広々とした部屋だ。
わたしは礼拝堂を横切るようにして、黒マントを追いかける。
黒マントは正面に見える扉から、再び細い廊下へ逃げ込んだ。やはり扉を閉めずにそのまま走り去る。いちいち閉めていたらタイムロスになると考えているのかもしれない。
再び真っ直ぐな廊下。
廊下の先を黒マントが逃げる。さらにその先には、またしても開きっ放しになっている戸口が見えた。黒マントはちょうどそこへ滑り込むように入っていく。
あそこか！
今度こそ黒マントが戸を閉じてしまった。
わたしは全速力で走り、ついに入り口までたどり着いた。

取っ手を掴み、引き戸を開けようとするが――

開かない。

ドアにはノブがなく、窪(くぼ)んでいる取っ手に指を引っかけて、横にスライドさせて開けるようになっている。けれどスライドさせようにも、戸がまったく動かない。戸が固定されているようだった。

鍵？

それともつっかえ棒で開かないようにしたのか？

少し力を込めて戸を揺すってみるが、びくともしない。

「開けなさい！　開けろ！」

わたしはドアに体当たりする。

当然、そう簡単に壊れたりはしない。

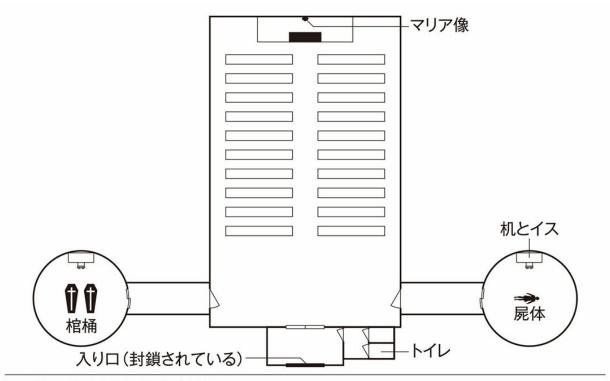
諦めたような気持ちで、再び取っ手を軽く横に引いてみると、ふいにあっさりと開いた。

え？

さっきまでは全然開かなかったのに……

まるで誘い出されているみたいだ。

おそるおそる戸を開ける。

その部屋は、さっきまでわたしが倒れていた部屋に似ていた。壁が曲面になっている円形の部屋で、壁沿いに書き物机がぽつんと置かれている。窓や扉など、出入り口は他に存在しない。

リブラ女子学院全体図

しかし室内に黒マントの姿は見当たらなかった。
消えた――？
その代わり、部屋の中央に二つ、横長の大きな箱が並べて置かれていた。
箱の蓋には十字架が彫られている。
これは棺桶だ。
棺が二つ並べられている。
礼拝堂と棺。何か関係あるのだろうか。
わたしはもう一度室内を見回す。
人の姿がないのは一目瞭然だ。
もし隠れられる場所があるとしたら――
「そ、そこに隠れているのはわかってるんだぞ！」
棺に声をかける。
この部屋に黒マントが入っていくのを、わたしは確かに見た。
他に逃げ場はない。
間違いなく黒マントは棺の中にいる。
問題は二つのうち、どちらに隠れているのか――
またわたしに選択を迫るゲームのつもりだろうか？
もし外れたらペナルティがあるのだろうか？
わたしは棺に近づき、靴の先で突っつくように、側面を押してみた。重さを調べるためだ。黒マントが入っている分、どちらかが重たくなっているに違いない。
二つとも押してみた結果、重量感に差はなかった。実際のところ、足で押そうとしてもどちらも押せなかった。
わたしはいったん棺から離れて、両方を見比べる。
どちらに黒マントが入っているにしろ、この状況はわたしにとってかなり有利ではないだろうか。
いっそ二つとも、開かないように封印してしまえばいいのだ。
そうだ。きっとそれが正解だ。
もしかしたら犯人はこんなに早くわたしが目を覚ますとは思っていなかったのかもしれない。これから手の込んだ密室トリックを用意する予定だったのではないだろうか。あまりにわたしが早く目を覚ましたものだから、とっさに逃げ出したのだ。

わたしは壁沿いにある書き物机を棺の近くまで運んだ。わたしの腕力でも運べる程度の重さだけれど、もしこれが棺の上にあったら、中から蓋を開けるのは困難になるだろう。
　わたしは机を持ち上げ、蓋の上に載せようとした。
　すると目の前の棺が小刻みに震えた。
　いる！
　間違いなくこの棺の中に誰かいる。
　しかし様子がおかしい。
「んー！　んーっ」
　必死に助けを求めるような声だ。
　あまりにも切迫した様子なので、わたしは思わず棺の蓋に手をかけていた。
　両手で蓋を押すと、簡単に外れた。
　棺の中が見えてくる。
　そこに仰向(あおむ)けになっていたのは——
　黒マントではなく、セーラー服を着た女の子だった。
　口にガムテープが貼られているため、声を出すことができないようだ。見たところ怪我(けが)はない。つやつやとした長い黒髪と白いカチューシャが印象的だ。高校生だろうか。その制服は、さっき別の部屋で見た被害者と同じ学校のもののようだった。
　目が合う。
　彼女はわたしのことを恐怖に怯(おび)えた目で見返した。
「んーっ！」
「ち、違う、わたしは——」
　彼女は襲われると勘違いしているようだ。
　よく見ると両手に手錠(てじょう)がはめられ、両足にも足枷(あしかせ)がはめられていた。どうやら自由を奪われた状態で棺に寝かされていたらしい。
「待って、今助けるから。テープを外すよ」
　わたしは彼女の口元を覆っているガムテープをゆっくりと外した。
「助けて！　殺さないで！」
「殺さないよ！　助けるって云ってるでしょ」
　手錠を調べる。簡単には外せそうにない。鍵穴があるので、鍵さえあれば外せそうだ。
　棺の中を見渡す。

何もない。でも――

もしかしたら黒マントはこの部屋に入ったあと、マントを急いで脱ぎ捨て、棺に入り、自分で枷をはめて、被害者のふりをすることで、追跡をかわそうとしたのではないだろうか。

当然の推理だ。なかなか冴(さ)えてる。

「ちょっとごめん」

「なっ、何するのよ！」

わたしはセーラー服の女の子の身体や、スカートの中まで調べた。相手は拘束されているのでやりたい放題だ。

しかし脱ぎ捨てられた黒マントは何処にもなかった。

身体全体をすっぽりと覆うほどのマントだ。それなりに大きいし、けっして見つけにくいものではないだろう。それに黒マントは凶器らしき鉄パイプを手に持っていた。棺の中に隠せば、すぐにわかるはずだ。

けれど少なくともこちらの棺の中にはなかった。

するともう一つの棺に黒マントが？

「もう逃げられないぞ！」

わたしは閉じている棺に向かって声をかける。

その声に反応して、棺がごとごとと音を立て始めた。

やはり中に誰かいるようだ。

しかしそちらの棺から聞こえてくるのも、助けを求めるようなくぐもった声だった。その声から察するに、やはりガムテープで口を塞(ふさ)がれているようだ。

どういうこと？

わたしは慎重に棺を開けた。

そこには隣の棺と同じように、口を塞がれ、両手と両足に枷をはめられたセーラー服の女の子が横たわっていた。こちらは赤毛の髪の短い女子高生だ。

わたしを見上げ、ひきつったように震えている。

どちらも黒マントではない？

そんなはずはない。

わたしは棺の中を調べた。

けれどやはり何処にも脱ぎ捨てられた黒マントや鉄パイプなどは見当たらなかった。

他の場所に隠したのか？

たとえば何処？

机の引き出しを開けて中を確かめる。
　便せんと鉛筆（えんぴつ）が一本あるだけで、他には何もない。
　まさか棺が二重底になっていたりして？
　それとも棺の下の床に隠された収納スペースが？
　――いずれも探し物は見つからなかった。
「んーっ、んー」
「今はがしてあげるから待って」
　わたしは赤毛の子のガムテープを外してあげた。
「……どういうことなんですか、これは。どうして私たちをこんな目に遭（あ）わせるんですか」
　彼女は棺の中で上半身を起こして、わたしを疑うような目で云う。
「わたしがやったんじゃない」
「ナズ！　ナズなのっ？」カチューシャの子が、もう一人の子を見て声を上げた。「どうしてこんなところに？」
「月夜（つきよ）さん！　あなたも何故そんなところに？」
　どうやら二人は知り合いのようだ。
「わからないわ。気づいたらこの女が私を襲おうとしていたの！」
「してない！」
　わたしは必死に首を振って否定する。
「じゃあ誰がやったって云うのよ！」カチューシャの子はヒステリックに声を上げる。「こんなことしてタダで済むと思ってるの？　必ず神の裁きにあうわ！」
「むしろこっちが訊きたいよ！　君たちのどちらかがやったんじゃないの？」
「この状態で何ができるって云うのよ」
　カチューシャの彼女は棺の中に座ったまま、両手の手錠を見せつける。じゃらじゃらと鎖（くさり）が音を立てた。
　わたしは彼女に近づき、胸元に手を伸ばす。
「な、何するのっ」
「ちょっと確認させて」
　彼女の胸ポケットから生徒手帳を抜き出す。

　聖アンヌ学園　女子高等学校

１年Ｄ組　灘(なだ)月夜
誕生日　７月30日

真っ黒なロングヘアをセンターで分けて、おでこを全開にさせた顔写真が貼ってある。写真ではカチューシャはつけていない。切れ長の目がきつそうな性格を表している。普段からそんなふうに人を睨むような目つきなのだろうか。
「そっちも調べさせてもらうよ」
わたしはもう一人の女の子から生徒手帳を抜き出す。

聖アンヌ学園　女子高等学校
１年Ｄ組　遠秋津菜砂(とおあきつなずな)
誕生日　８月21日

垂(た)れ目で赤毛で癖っ毛のボブヘアがチャーミングな女の子だ。こんな状況でなければ、きっとおっとりとして穏やかな優しい子だろう。
「二人はクラスメイト？」
「ええ……そうです」
菜砂が答える。
「二人とも、どうしてこうなったのか、心当たりはある？」
「あるわけないでしょ！」月夜が声を荒(あら)らげて云った。「というかさっきからあなたはなんなの？　どうしてあなたは手錠されてないの？　おかしいじゃない」
「わたしも君たちと同じ高校生なんだけど……今は探偵としてここに来てるんだ」
「探偵？」
「そう」
わたしは少し得意げに云って、かっこよく探偵図書館の登録カードを出そうとした。けれどカードを入れている財布(さいふ)がポケットからなくなっていた。それどころか携帯電話(けいたいでんわ)もないし、ふと気づけばリュックも背負っていない。
「あ、ああっ、何もかもなくなってる！」
「本当に探偵なの？」
「ほ、本当だよ、ＤＳＣナンバーは『８８７』で、専門は誘拐とか脅迫事件とか……」

「何よそのなんとかナンバーって。聞いたこともない。ねえ、ナズ、やっぱりこいつが私たちをこんな目に遭わせたんじゃないかしら。まったくもって怪しいわ。神が裁く前に、私たちで裁きましょう」
「いいえ、私は彼女のことを信じます」菜砂は落ち着いた様子で云う。「もし彼女が私たちに何かするつもりなら、もうとっくにしていると思うの」
「……そうね」月夜は急に大人しくなった。「ナズが云うなら私も信じる」
「信じてくれてありがとう」
　口ではそう云いながらも、わたしは二人をまだ信じるわけにはいかないと考えていた。
　黒マントは間違いなくこの部屋に入ったのだ。戸口から室内に入るところを、わたしは間違いなく目撃している。
　しかし部屋に入った時にはもう、黒マントの姿はなかった。
　やはり二人のうちどちらかが黒マントではないだろうか。
　いや、もしかしたら二人とも？
「探偵さん、この状況を説明してもらえますか？」
　菜砂が云う。
　わたしは肯き、説明するために記憶を整理しようとした。
　けれど目が覚める前のことはもやがかかったようにはっきりとしない。確かわたしは駅で霧切と別れ、自分に割り振られた事件現場『リブラ女子学院』へ向かったのだ。
　例によって『リブラ女子学院』は何年も前に廃校になっている。わたしは電車からバスを乗り継ぎ、問題の廃校を目指した。そう、バスに乗ったところまでは記憶している。でも降りた記憶がない。
　気づけば見知らぬ場所で倒れていた。
　わたしは犯人につけられていたのか？
　それともバスの乗客か運転手が犯人の協力者だったのか？
　金で雇われた協力者が、犯人の指示に従い、わたしをなんらかの方法で気絶させ、ここに運び込んだのかもしれない。『シリウス天文台』でも同じような手段が用いられた。
　うかつだった。
　事件は現場に足を運ぶ前から始まっていたのだ。
「『リブラ女子学院』で人を殺すという犯行予告状がわたしのところに送られてきたんだ。それで捜査のために、その場所へ向かう途中だったんだけど……いつの間にか気を失っていて、気づいたらこの建物の中にいた。たぶんここがその『リブラ女子学院』だと思う」
　かいつまんで説明する。

「何よ、そのなんとか学院って。聞いたこともないわ。でたらめ云ってるんじゃないでしょうね。『汝、嘘をつくなかれ』――嘘は神に背く行為よ」

　早速月夜が喚き出す。

「でたらめなんかじゃない。これが証拠だよ」

　わたしは別の部屋で殺されていた女の子の生徒手帳をポケットから取り出した。

　名前と顔写真を確認する。

　聖アンヌ学園　女子高等学校

　１年D組　竹崎花

　誕生日　３月３日

　くりくりとした目の女の子だ。

　わたしがさっき見た屍体の子だ。

「残念ながら殺人は実行されてしまった。別の部屋で、この子が殺されているのを見つけたんだ。この子を知っている？」

　わたしは棺の中に座っている二人に手帳を開いて見せる。

「クラスメイトだわ」月夜が答えた。「でもあんまり話したことのない相手ね」

「竹崎さんが……殺されていたのですか？」

　菜砂が尋ねる。

「うん、頭から血を流して倒れていた。犯人の姿も見たんだ。全身真っ黒なマントを羽織っていて……そいつがこの部屋に逃げ込んだから、わたしは追いかけてきた」

「この部屋？」

　月夜は室内を見回す。

　当然ながら黒マントの姿などない。

「わたしが部屋に入った時にはもう姿が消えていて、二つの棺だけがあった。そう、今君たちが入っている棺ね」

「――私たちのどちらかが黒マントの犯人だと云いたいのですね？」

　菜砂の直球の言葉に、わたしは思わず肯いていた。

「いい加減にしてよ、とんでもない誤解だわ」月夜は眉間に深い皺を刻んで、首を左右に振る。「私たちから見ればあなたこそ、こんな悪ふざけの犯人に違いないわ。真っ暗なこの棺の中で目が覚めて、最

初に聞いたのはあんたの物騒な声よ。悪夢かと思った。今でもそう思ってる。夢なら覚めてほしいわ。今すぐに！」
「ごめんなさい、脅(おど)かしたのは謝る。でも――」
「だいたいどうやって自分でこんなふうに手錠や足枷をして、棺に入るっていうのよ」
「そんなの順番次第でどうにでもなる。棺に入ってから、自分で口にテープを貼って、足枷をはめて、最後に手錠をかけて、中から蓋をする。できないことじゃない」
　わたしが反論すると、月夜は黙ってしまった。
　論理的に考えたら、棺の他に隠れ場所はないのだ。
　二人のうちどちらか――あるいは両方――が嘘をついている。
　彼女たちは何者なのか。
　何故、棺に入れられていたのか。
　そして犯人――黒マントは何処に消えた？
　わからないことだらけだ。
　それでも霧切なら、こんな謎すぐに解き明かしてしまうのだろう。不可解な事件に直面して、あらためて彼女のすごさに気づかされると同時に、やはりわたしには彼女が必要なのだと思い知る。
　彼女がここにいないことが、こんなに心細いなんて……
　おそらく彼女も事件に遭遇(そうぐう)している頃だろう。
　無事だろうか？
　心配する必要などないことくらいわかっているけれど、万が一ということもある。もし彼女が傷つけられるようなことがあれば、わたしが助けに行かなければならない。
　そうだ……いつまでもこんなところに留まっているわけにはいかないのだ。
　霧切ちゃん。
　必ずまた、一緒に部屋へ帰ろう――

双生児能力開発研究所　――霧切響子

　堤塔矢（つつみとうや）は肩を揺さぶられているのに気づいて、目を開けた。
　目の前に少女がしゃがみ込んでいる。
　誰だ――？
　堤は身体を起こして、意識をはっきりとさせるように首を振った。
「具合はどう？　怪我は？」
　目の前の少女が尋ねる。
「怪我……？」
　ふと後頭部に手をやると、湿（しめ）っている感触がした。手のひらに赤い液体が付着する。
　血だ。
「もし具合が悪いようなら動かない方がいいわ」少女は立ち上がり、背中を向けた。「事件のことならあとで聞くから」
　彼女は堤には興味をなくしたかのように、机の上に並ぶ液晶モニタを眺め始めた。大人びた振る舞いの少女だが、見た目は中学生くらい。三つ編みにしてリボンを結った髪が両肩に垂れている。何処かの学校の制服だろうか、鋼鉄（こうてつ）のように硬そうに見えるプリーツスカートから、傷つきやすそうな白い足が覗いている。
　彼女は一体何者だ……？
「堤さん、何があったんですか？」
　今度は背後から声をかけられる。
　白衣を着た若い女性が立っていた。
　彼女は星居垂日（ほしいたるひ）、この双生児能力開発研究所に集められた研究員の一人だ。研究員は堤を含めて四人いたが、彼女が一番若く、現在は大学院生だという。真っ赤な口紅が印象的で、一見すると遊び慣れたギャル風だが、最先端の遺伝子研究に携（たずさ）わる才女らしい。黒いセーターに白衣がよく似合っている。堤はこの時初めて気づいたが、彼女は両手の親指だけ、真っ赤なマニキュアを塗（ぬ）っていた。口紅と合わせているのかもしれない。
「こっちこそ訊きたいよ」堤はようやく床から立ち上がって云った。「なんで僕は床で寝ていて、しかも頭から血が出ているんだろう？」
「私も気づいたら喫煙所のベンチで三時間近く寝ていました。暖房のない部屋だったので凍え死ぬとこ

ろでしたよ」
　星居は自分の身体を抱くように両腕を組んで云う。確かに顔が青ざめている。
「ちょっとコーヒーもらいます」
　星居はコーヒーメーカーからカップにコーヒーを注(そそ)ぐ。
「それは飲まない方がいいわ」
　突然、少女が云った。
　彼女は振り返らずに、モニタを眺め続けている。
「睡眠薬が入れられている可能性がある」
「睡眠薬……？　っていうか、誰？」
　星居と堤は顔を見合わせる。
「君は一体なんなんだ？　なんで研究所に勝手に入ってきて、勝手にモニタをいじっている？　部外者の立ち入りは許可されていないぞ」
「もう研究ごっこは終わりよ」
　少女はモニタを指差す。
　その画面にはR室の様子が映し出されていた。天井の一角に設置された監視カメラからの映像だ。六畳ほどの小さな部屋で、室内にはパイプベッドや小さな液晶テレビの他に、パーティションで囲われたトイレや洗面台まで設置されている。まるで留置場のような造りだ。
　R室には研究対象である双子の片方がいるはずだが……
「蘇芳(すおう)君はベッドで寝ていますね」
　星居が指差す。ベッドが人の形に膨らんでおり、双子の弟、九連(きゅうれん)蘇芳が頭を画面の手前に向けて寝ていた。
　しかし様子がおかしい。
　白い掛け布団(ぶとん)の中央が赤く染まっている。
　そんな模様は今までなかったはずだ。
　赤い模様の中央に、銀色に光るナイフが突き立てられていた。
「大変だ！」堤はようやく異常事態に気づいたように声を上げげた。「蘇芳君が刺されている！」
「嘘……」
　星居は両手を口元に当て絶句する。
「一体……何が起こったんだ？　何がなんだかわからない……」
　堤は痛む頭を押さえながら、少女を押しのけるようにして、モニタの操作パネルの前まで移動した。液

晶モニタは全部で四台あり、そのうちの二台がR室を映し出している。堤はカメラを切り替えて、別の角度から蘇芳の様子を確認した。
モニタの一つに、目を見開いたままこちらを向く蘇芳の顔が大きく映し出される。
彼は瞬き(まばた)一つせず、呼吸をしている気配もなかった。
「どういうことなんだよこれは！」
四台のモニタのうち、二つはR室の惨状を映し出しているが、残り二つはブラックアウトしている。
本来ならL室にいる双子のもう片方の監視映像が映し出されているはずだ。しかしパネルを操作しても何も映らない。故障だろうか。
「一足遅かったみたいね」
少女が冷淡に呟く。
「お前、何か知っているのか？　説明しろ――」
堤は少女の肩を掴もうとした。
しかし少女はひらりと身体を逸(そ)らして、それをやり過ごす。
「それより先に、状況を確認しにいった方がいいんじゃないかしら？」
「そ、そうですね！　R室に行ってみましょう」
星居がモニタルームを飛び出していく。
堤はすぐに星居を追おうとしたが、廊下(ろうか)に出たところでふと思い返したように立ち止まり、振り返った。
少女に向けて指を差す。
「お前、そのへんの機械をいじるなよ！」
「心配しないで」少女は堤のあとに続いてモニタルームから出てきた。「私もついていくから」
「なんでだよ、いいからじっとしてろよ！」
「あの部屋にいたら、うっかり機械をいじると思うわ。それでもいいなら……」
「わかったわかった！」堤は諦めて云う。「これ以上余計なことをするなよ。いいな？」
「私は最初から何も余計なことなどしていないけど」
「うるさい、黙ってろっ」
堤は大人げなく声を荒らげて、廊下の先へ急ぐ。
廊下は真っ直ぐ延びて、突き当たりで左右に分かれている。この研究所はT字構造になっており、その廊下を右に曲がるとR室があり、左に曲がるとL室がある。文字通りRightのRとLeftのLだ。その他に部屋は存在せず、トイレや休憩室(きゅうけい)も別棟に設けられている。
堤たちより先にモニタルームを出た星居は、右の廊下の先にいた。

そこで大きな扉に行く手を阻（はば）まれる。

　両開きの扉の取っ手に、頑丈そうな鎖が何重にも巻かれ、大きな銀色の南京錠（なんきんじょう）がさげられていた。

　南京錠には油性ペンで大きく『C』と書かれている。

「『C』は誰だっけ？」

「私です」星居が云う。「ホシイの『C』」

　南京錠は底面に鍵穴がない代わりに、丸い大きな穴が空いている。星居がその穴に人差し指を入れると、たちまち掛け金のロックが外れた。

「指紋認証（しもんにんしょう）？」

　少女が尋ねる。

「そう。私の指でしか開かない」

　堤と星居は南京錠を外したあと、二人で鎖を解き、扉を開けた。

　そこから廊下は十メートルほど真っ直ぐ続いている。行き止まりの左手に引き戸があり、その先がR室だ。ここには鍵はかかっていない。

　扉を開けて中に入る。入ってすぐの場所は、手狭に区切られた小部屋になっており、奥に続く別の部屋の控え——たとえるなら病院の待合室のような構造——になっている。

　正面の壁に二つの扉があり、その先がR室のメインの部屋となっている。

　そのうち右側の扉の取っ手に、さっきと同じように鎖が巻かれていた。さっきと少し違って、扉が両開きではないため、鎖は壁のリング状の突起に通され、取っ手を巻き込むようにして、ぐるぐる巻きにされている。

　鎖には『D』と書かれた南京錠がぶら下げられている。

「僕の番だ」

　堤が震える指先を南京錠のセンサーに当てようとする。

「待って」うしろから少女の声が飛んできた。「鍵を開ける前に。もう一つのドアの方から中を確認してみましょう」

「ああ？」堤は苛立（いらだ）ちの混じった声で云う。「何云ってるんだよ、緊急事態なんだよ！」

「緊急事態だから云っているの」少女は冷ややかな目で返す。「監視映像の一つに、マジックミラー越しのものがあったわ。私の想像が間違っていなければ、この先に研究対象の人物がいて、隣の部屋からマジックミラー越しに観察できるようになっている。間違いないわね？」

「……ああ、間違いない。それが——」

　どうした？　と訊こうとしたところ、星居が隣の戸を開けてしまった。

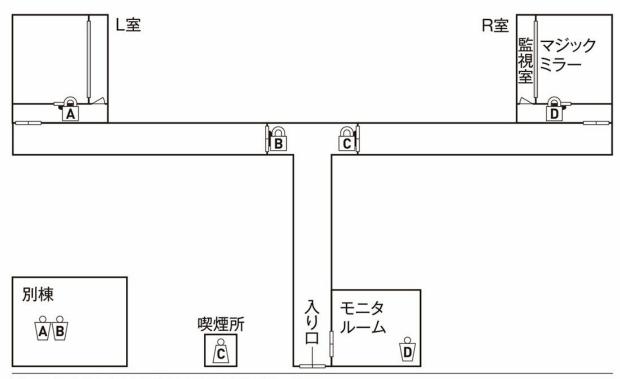
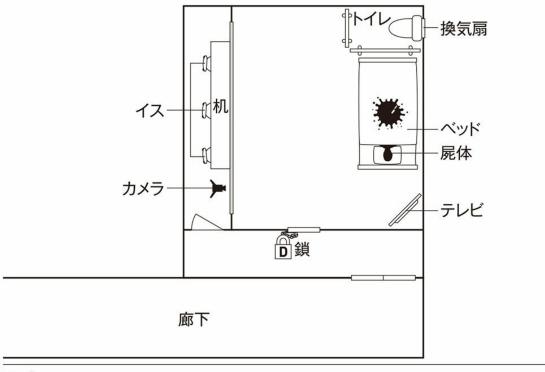
「つまり鍵を開けなくても、こちら側から中を確認できるってことを云いたいんでしょ」
「その通りよ」
　星居と少女は揃って部屋に入っていってしまった。
　一人取り残された堤は、釈然としない気持ちに駆(か)られながらも、二人のあとに続いて部屋に入った。
　その部屋は少女が云った通り、隣の部屋をマジックミラー越しに監視するためにある。細長い空間に、長机とパイプ椅子、三脚によって設置されたビデオカメラなどがある。右手の壁に巨大なマジックミラーがはめ込まれており、鎖で封印されている隣の部屋の内部を一望できた。
　三人はあらためて息を呑む。
　全体的に白い部屋だ。白を基調とした壁や床に、白んだ蛍光灯があてられている。何処か非現実めいた明るさだ。マジックミラー越しに見ているせいもあるだろう。まるでスクリーンの世界を覗いているような幻想性すら感じられる。
　その中で唯一、ベッドの中央を鮮やかに染めた真っ赤な色彩が、生々しく、堤たちに現実を突きつけていた。
　双子の弟、九連蘇芳は目を見開いたまま絶命している。
　ナイフは赤い染みの中央に突き立てられたままだ。
「モニタで見た通りだ。これで満足か？」
　堤は少女に問い質す。
　少女は小さく肯き、もう満足したのか部屋を出ていってしまった。そしてすぐに――
「早く鍵を開けて」
　外から彼女の声が聞こえてくる。
　なんなんだあのガキは。
　堤は内心で舌打ちしながら、部屋を出て鎖の前に立った。なんでこんな子供にタメロで命令されなきゃならないんだ。南京錠に指を差し込んで解錠する。くそっ。ロックが外れた。まさかこいつ……
　取っ手に巻かれた鎖を解き、戸を開ける。
　真っ先に少女が室内に入り、ベッドの蘇芳に近づいた。首筋に触れ、脈を確認している。少女はゆるゆると首を横に振って、目を伏せた。
　堤と星居は室内には入らず、戸口から首を伸ばすようにして中を覗いている。
「どういうことなんですか、これ」星居が両手を腰に当てながら云う。「ドッキリ撮影じゃないですよね？
本当に死んでいるんですよね？」
「ええ。死後一時間以上は経っているわね」

少女は云いながら、室内を観察している。

見たところ異変はベッドのみで、床にはごみ一つ落ちていない。カメラやトイレなど設置物にも異常はないようだ。

「換気口があるけど、ここから人が出入りするのは不可能ね」

少女は便座の真上にある換気口を見上げている。換気口にはメッシュ状の鉄のパネルがはめ込まれており、中で換気扇が回っていた。およそ十センチ四方。少女が云うように人が出入りするには狭すぎる。鉄のパネルにも細工されたような痕跡は見受けられない。

次に少女はマジックミラーを調べ始めた。こちらの部屋から見ると鏡にしか見えず、隣の部屋を覗くことはできない。またミラーの縁(ふち)はすべて完全に接着されており、隙間はなく、開閉することも取り外すこともできない。

双生児能力開発研究所全体図

R室

部屋に窓はない。入り口は引き戸のみ。しかしその戸にはさきほどまで鎖が巻かれ、南京錠がかけられていた。

さらにこのR室に来る途中にある両開きの扉も鎖で封印され、南京錠によって鍵がかけられていた。

R室は二重に封印されていたことになる。

「これって……密室殺人ってやつか？」

堤は誰にともなく、尋ねるように独り言を呟いていた。

「そうね」

少女が返事する。彼女は床に這(は)いつくばるようにして、ベッドの下を覗き込んでいた。しかし何も見つけられなかったようだ。やがて立ち上がり、コートの汚れを払うような仕種をしたあと、頬にかかった髪を払った。

「確かに密室殺人事件だけど、今のところ頭を悩ませるようなことは何一つないわね」

「はあ？　わからないことだらけじゃないか！」堤はやけ気味に声を上げる。「お前は事情を知らないだろうけど、このR室も、途中の扉も、僕たちが実験終了時に間違いなく施錠したんだ。がちがちに封印されていたんだよ。完全な密室じゃないか。蘇芳君を刺したやつはどうやってここに侵入したというんだ」

「扉が封印されていたというのなら、その封印を解いて入るしかないわね」

「どうやって？　鍵は指紋認証による電子ロック式だぞ。それぞれ登録された指紋でしかロックは外れない。『C』の鍵は星居しか開けられないし、『D』の鍵は僕しか開けられない。云っておくが粘土(ねんど)やゼラチンで指紋パターンをコピーするやり方はできないぜ。センサーが血管パターンや脈拍を感知して、生きている人間の指じゃなきゃ反応しないようになっている。つまり僕と星居が鍵の前まで行って、鍵穴に指を入れない限り——」

堤はそこまで喋って、何かに気づいたように声を上げた。

「あっ」

「やっとわかったかしら？」

「僕たちが気を失っている間に、何者かによって僕たちは身体ごと鍵の前まで運ばれたのか？」

「私と堤さんを運ぶ？　そんなことできますか？」

星居が首を傾げて云う。

「車椅子でもキャリーバッグでもなんでもいい、運搬に使える道具はいくらでもある」堤は云った。「とにかく僕たちを気絶させてしまえば、扉の前まで運ぶことは難しくなかっただろう。道のりは平坦(へいたん)で真っ直ぐな廊下だからな」

「あ、だから私、喫煙所で眠りこけていたんですね。たぶん、睡眠薬を盛られたんですよ！」

「コーヒーだ。あのコーヒーに睡眠薬が入っていたんだな。僕は飲まなかったから、頭を殴られて気絶させられた」
「今のところ密室は問題にもならないわ」少女は顔を逸らして考え込むように云う。「でも……何故わざわざ鎖と南京錠を元通りにしたのかしら……あくまで密室に見せるため？　これが究極の密室……？」
「何ぶつぶつ云ってるんだよ。つーかお前、何者なんだ？」堤は改めて少女に尋ねる。「よく考えてみたら、お前怪しいな。なんだか事情を知ってるみたいだし……」
「あとで説明するわ」
「待て、そういうわけにはいかない。目の前で殺人事件が起きているんだぞ。それなのに正体不明の人物を放ってはおけない。場合によっては──」
「私は霧切響子。探偵よ」
　彼女は短く云うと、堤の横をすり抜けるようにして、R室を出ていってしまった。
　堤は慌てて追いかける。
「探偵？　マジで云ってるのか、それ」
「別に信じなくてもいいし、私のことはすぐに忘れてもらっても構わない。それより電話を貸してもらえるかしら」
「……ケータイか？　貸してもいいが使えないぞ」
　堤はポケットから折り畳(たた)み式の携帯電話を取り出し、霧切に手渡した。彼女は液晶画面をちらっと見ただけで、すぐにそれを突き返してきた。
「圏外(けんがい)」
「だから云っただろ。施設全体がジャミング装置によって電波妨害されている。研究のために、携帯電話はもちろん無線機器が使えないようにしてあるんだ」
「研究？」
「部外者に詳しいことは話せない」
「ふうん、そう……」
　霧切は目を細めて、少し拗(す)ねたような顔をした。
　こんな子供が探偵？　本当に？
　堤は疑うような目で霧切を観察する。
「さっき確かめたけど、モニタルームの固定電話は使えなくなっていたわ。私たちは今、外部と連絡が取れない状態にある」

「施設から離れればジャミングの有効範囲外に出られるはずです」星居が云った。「町まで下りれば、コンビニもあったし……ちょっと私、遠くに出てみます。警察に連絡しなきゃ」
「待って」霧切が制止する。「単独行動は避けるべきよ。殺人犯がまだ近くにいるかもしれない」
「……あっ、そうですね。じゃあ、みんなで一緒に行きましょう」
「その前にL室を調べておくべきではないかしら。双子はもう一人いるんでしょう？　無事かどうか確認しておいた方がいいと思う」
　L室には双子の兄、九連紫紺（しこん）がいる。
　L室もR室と同様、監視カメラによってモニタリングされているはずだが、モニタはブラックアウトして何も映っていなかった。映像は有線で繋（つな）がっているので、ジャミングの影響を受けることはない。ということは、何処かで断線したか、カメラを壊されたか……
「まさか紫紺君も？」
　堤は怯えたような声を出す。
「モニタで確認できない以上、実際に行ってみるしかありませんね」
　星居が白衣を翻（ひるがえ）して廊下に飛び出す。
　霧切と堤は彼女を追うように廊下へ出た。
　真っ直ぐな廊下を進んで、さきほど解錠した両開きの扉を抜ける。
　T字の交差地点まで戻ってきた。
　そのまま正面に進むと、また両開きの扉にぶつかる。この先にL室がある。しかしこちらの両開きの扉にも鎖が巻かれ、『B』と書かれた南京錠がかけられていた。当然ながら、少し揺さぶった程度ではどうにもならない。
「ええと、『B』は蜂（はち）のBee、蜂須賀（はちすか）さんです」
「別棟で休憩中だな。ついでに『A』の永手（ながて）さんも呼んでこよう」
　堤を先頭に、三人は揃って建物の外に出た。雪まじりの冷たい風が、暗い闇から吹きつけてくる。

　双生児能力開発研究所は人里離れた山の中に建っている。もともとその建物は精神科の単科病院で、重度の患者を隔離治療するための施設だった。しかし二十年以上前に病院が廃業。しばらくの間は、幽霊の出る廃病院として一部の物好きに知られる程度の場所だった。
　その後、何者かに土地ごと買い取られ、周囲一帯が私有地として閉鎖された。廃墟（はいきょ）と化していた建物は改築され、怪しげな研究所となっているというのがもっぱらの噂だった。都市伝説めいた話によると、その研究所は倫理的に問題のある実験や、危険性の高い実験などを極秘に進めるための場所と

して利用されてきたという。
　現在は双生児能力開発研究所と名づけられているが、どういう組織がなんのために設けたものなのか謎であり、実務的な研究内容もまったく不明だ。
　堤たちが携わる今回の双生児実験では、T字形の建物が研究に利用されている。便宜的にそちらが研究所と呼ばれる。それとは別に敷地内にマンションのような別棟が建っており、こちらは研究員の休憩から宿泊、会議などの用途に使われている。
「僕たちがここに来たのは今日の昼頃で、一度目の実験終了したのが午後六時。施錠したのもこの時だ。蜂須賀さんと永手さんは、この時休憩に入った」
　別棟に移動するまでの間に、堤が霧切に事情を説明する。
「今は夜九時二十三分――つまり犯行は六時から九時までのおよそ三時間の間に行なわれたことになるな」
「私が煙草を吸いに喫煙室に行ったのは六時半でした」
「ああ、そうだな。覚えてる。でもそのあと僕はすぐに気を失った」
「私もです」
「この調子だと、蜂須賀さんたちも危ないかもしれないな……下手したら僕たちと同じように、なんらかの方法で気絶させられているかもしれない」
　別棟の自動ドアをくぐる。
　共用廊下の壁に扉が並んでいる。一番近い101号室が蜂須賀鎌人の部屋だ。研究員たちはそれぞれ一部屋ずつ借りて、数日間宿泊しながら、研究に当たるように指示されている。
　堤がインターホンで蜂須賀を呼び出す。
『誰かね？』
　反応があった。
　どうやら無事なようだ。
「蜂須賀さんですか。問題発生です。ちょっと出てきてもらえますか」
　蜂須賀はすぐに扉を開けた。
　白髪交じりの中年男性だ。いかにも身だしなみには無頓着といった様子で、セーターの裾はほつれ、毛玉だらけになっている。髪は使い古したモップのように広がり、無精ひげは手入れの行き届いていない庭のようなありさまだった。丸眼鏡がユニークだ。
「問題？　一体どうしたんだね」
「それが……蘇芳君が亡くなっていて……」

「亡くなった？」
　驚きの声を上げたのは蜂須賀ではなく、彼のすぐうしろに姿を見せたもう一人の研究員、永手薫（かおる）だった。彼もまた中年と呼ばれるような年齢だが、スーツにネクタイ姿で、見た目も若々しく、マニアックな研究員というよりは、やり手の営業マンといった風貌（ふうぼう）だった。冬なのに日焼けした肌が、独特な美意識の高さを感じさせる。
「あれ？　どうして永手さんが蜂須賀さんの部屋に？」
「いやー、まだ寝るには早い時間だから、蜂須賀さんと一緒に弁当食べながら酒を飲んでいたのさ」
「なるほど、そうでしたか。まとめてお二人に説明できるので助かります」
　堤は彼らが休憩に入ってからの出来事をかいつまんで説明した。
　蜂須賀と永手は神妙な顔で聞いていたが、最後まで半信半疑といった様子だった。実際に現場を見ていないので仕方ないだろう。
「警察には通報したのかい？」
「いいえ、どうやら犯人によって連絡手段が断たれてしまったらしくて……こちらの電話は使えますか？確認してみてください」
　永手は一度部屋に引き返して、すぐに戻ってきた。
「確かに部屋の電話が使えなくなっている。あーでも、もともと使えなかったのかもしれない。使える状態かどうかなんて、いちいち調べてなかったしねー」
　永手は軽い調子で云う。殺人事件が起こっているというのに、その軽さはあまり変わらないようだ。
「蘇芳君が亡くなっているのは間違いないんだね？」
「ええ。彼女が確認しました」
　堤は霧切を顎（あご）で示す。
　霧切は相変わらず愛想のない顔つきで立っていた。まるで彼女だけが、下手な合成技術でそこにはめ込まれているように、この場でただ一人浮いた存在となっている。あるいは彼女の謎めいた雰囲気がそう見せているのかもしれない。
「この子が？　誰だい、この子は」永手は霧切を眺め回す。「君たちの知り合いかい？」
「いえ……探偵だそうです」
「探偵？　ああ、探偵ね。今時は子供でも探偵をやるんだねー。本気か冗談かわからないけど、どっちにしても部外者だろう？　放っておいてもいいのかい？」
「いやあ、僕もどう対処したものかと……まあ少なくとも危険人物ではないと思います。もし彼女が蘇芳君を殺害した犯人だったとしたら、僕のことを起こさずに、そのまま逃げ出していればよかったわけです

し……」
「彼女についてはあとで詳しく聞くとして……それで？　紫紺君の方も殺されているかもしれないって？　さすがにそれはないと思うなー」
「えっ、どうして？」
「私と蜂須賀さんは六時に休憩に入ってから、今までずっと、二人でここにいたわけだけどさー、ほら」永手は人差し指を突き出す。「L室と、途中の扉に鍵かけてあるじゃん？」
「さっき見てきましたけど、確かに鍵がかかったままでした」星居が云う。「ということは、L室の方の鍵は開けようがないということですね」
「そうそう」永手は緊迫感のない笑顔で云う。「この世に唯一の鍵が、ずっとここにあったんだ。スペアキーなど存在しない。すなわち誰もL室を出入りしていないってことさ」
「指紋の登録は、鍵一つにつき指紋一つだけ？」
　霧切が尋ねる。
「そうだよ。南京錠は四つあって、私たち四人がそれぞれ一つずつ指紋を登録したんだ。わかりやすく『A』から『D』まで、目印をつけてね」
「名前の語呂合わせで、覚えやすいようにアルファベットを割り振りました」
　星居が云う。彼女の語呂合わせでいうと——
『A』は永手、永の音読みから。
『B』は蜂須賀、蜂の英語Beeから。
『C』は星居、ホシイの読みから。
『D』は堤、堤の音読みから。
　この場合、堤は『てい』なので、どちらかといえば『T』のような気もするが、堤はあえて『D』として受け入れた。他がわかりやすければ、残りものはなんでもいい。
「どうやって指紋を登録するの？　専用の機械があるの？」
「いや、南京錠自体が読み取り装置になっているから、他の機械は必要ないんだよ」永手が説明する。「まずロックが外れた状態で、掛け金を百八十度うしろに回して下に差し込むと、指紋を登録するモードになる。この時、南京錠の鍵穴に指を差し込んで、ピッと音が鳴れば登録完了だ。次からはその指でしかロックが外れないようになる。どの指でも可能らしいよ。認識失敗率は二百五十回に一回、かなり精度がいいね。それから不正ができないように、生きた人間の指じゃなきゃ認識しないようになっている」
「その南京錠は誰が用意したの？」

「元からここにあったんだ。説明書と一緒にね」
「不正に改造されている可能性は？　新しく登録して使う指紋とは別に、たとえばマスターキーとなるような指紋が最初から登録されているとか」
「それはないと思うなあ。根拠はないけど。まあでも仮にそうだったとしたら、犯人は自分の指紋をマスターとして登録しているということになるよね。そりゃあ重大な証拠だ。文字通り真実を暴く鍵となる。そんな足のつきやすいことをするかなあ」
「ねえ皆さん、とりあえずL室を確認しに行きませんか？　まずは状況を把握すべきだと思うんです」
　星居が焦(じ)れたように云い始めた。
「星居君の云う通りだ。開けてもいない箱の中身を議論してもどうにもならないからな」蜂須賀が重い腰を上げるようにして、のそのそと玄関をくぐる。「じゃあ行こうかね」
　蜂須賀と永手の二人を加え、今度は五人で研究所に戻る。

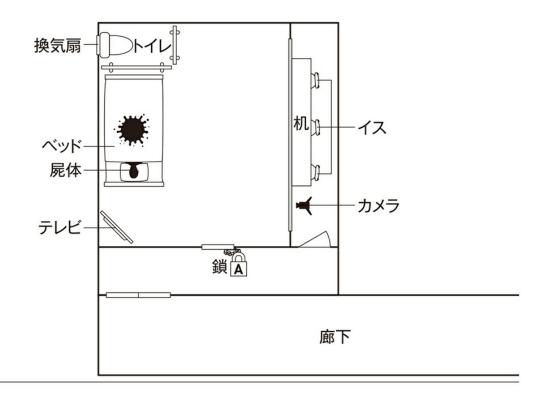
　研究所の入り口をくぐり、まずモニタルームに寄った。
　モニタにはR室の様子が映し出されたままになっている。そのうちの一つは、目を見開いて息絶えている蘇芳がアップになっていた。
　蜂須賀と永手はそれを見てようやく事態を把握したようだった。
「たちの悪いいたずらじゃないんだよねー？　バブルの頃にはこういうやんちゃは日常茶飯事(にちじょうさはんじ)だったけどなー」
　永手はひきつった笑みを浮かべながら云う。彼なりに冗談で気を紛(まぎ)らせようとしているのだろう。
「少なくとも夢や幻の類(たぐい)ではないようだな」蜂須賀は丸眼鏡を押し上げながら云う。「しかし、だからこそ我々は真実への方程式を持ち得るのだ。さて、君たち。録画映像はすでに確認したのかね？」
「あっ、そうか！」星居が早速、モニタの操作パネルの前に座った。「録画を見れば、蘇芳君を殺した犯人が映っているかもしれませんね！」
　星居の操作により、モニタに過去の映像が呼び出される。
「問題は六時半以降だ。いったんそこまで戻して」
　堤が指示する。
　画面右下の時間表示が、18:30を示す。
　映像は様々な角度から撮影されており、任意に切り替えることができる。この時、映像の中の蘇芳はベッドで布団の中に入っていた。特に異変はない。
　問題が起きたのは、19:02だった。

カメラの位置は部屋の入り口上部。そこから室内を見下ろすような映像の中に、白い影のようなものが画面下からフレームインした。
　真っ白なフードを被った人物の後頭部のようだ。その人物は画面手前から奥の室内へと進んでいく。後頭部から背中、やがて腰まで、うしろ姿が映り込む。全身真っ白だ。頭から身体まで、ひと繋ぎの布を被っているようだ。ベッドで寝ている蘇芳は、その存在に気づいていない。
　侵入者はカメラに背を向けているため、映像では顔を確認することができなかった。他のカメラに切り替えても、白い布の一部が見える程度だ。そもそも蘇芳を監視するために設置されているカメラなので、入り口から来る者を捉える映像がない。
「封印されている戸を開けて侵入者が蘇芳君の部屋に入ったのは間違いないようだねえ」
　永手は腕組みして云った。
「やっぱり僕と星居が気を失っている間に、封印を解いて部屋に侵入したんだな」
　堤が呟く。
　映像の中で、侵入者がゆっくりとベッドに近づく。
　ようやく全身が画面の中に収まった。
　しかし白い布によって足元まですっぽりと包まれているため、体型さえはっきりとしない。たとえるなら、頭からシーツを被って、おばけの真似をしているような格好だ。何処となく動きも幽霊っぽく見える。映像のフレーム処理速度の影響でそう見えるだけだろうか。
　おばけはとうとうベッドの脇に立った。
　蘇芳はまだ気づいていない。
　結末はすでにわかっている――
　それでもモニタの前で全員が固唾（かたず）を呑んだ。
　おばけがシーツの内側から右腕を出し、振り上げる。
　その手にはナイフが握られていた。
　ナイフが振り下ろされる。
　一撃だった。
　仰向けに寝ていた蘇芳は、少しだけ身体をくの字に曲げるような動作をしたが、すぐに力尽きたように動かなくなってしまった。
　おばけがナイフから手を離す。
　ナイフはまるで墓標（ぼひょう）のように、布団に垂直に突き刺さっていた。
　じわじわと血が広がり始める。

一仕事終えたおばけは、この時初めて振り返った。
顔がない。
仮面だ。
本来なら顔に当たる部分に、仮面を被っている。
その仮面は白くのっぺりとして、ただの楕円形の板に見えた。しかしよく見ると三つの黒い点が、逆三角形を描くように配置され、目と口を表している。たった三つの点しかないのに、その仮面は確かに顔のように見えた。あまりにシンプルで、不気味さを通り越して滑稽でもあった。
仮面のおばけは部屋を出ていこうとする。
一瞬、戸口で立ち止まり、カメラを見上げた。
不気味な仮面と目が合ったような気がして、その場にいる全員が思わず肩を震わせた。今まで気丈に振る舞っていた霧切でさえ、青ざめた表情で言葉を失っている。
仮面のおばけはそのあと、何事もなかったように画面から消えた。
時刻表示は19:04となっている。
「……映像に加工された痕跡は？」
沈黙を破るように、蜂須賀が尋ねる。
「データを解析しなければわかりませんが……でも録画装置をいじられた形跡はありませんね」
モニタを載せている机の下を覗くと、硝子戸のラックがあり、ここに横長の機械が詰め込まれている。監視映像を録画するためのハードディスクドライブだ。
「仮に録画映像に細工を加えるのなら、この機械を棚から引っ張り出して、背面の端子にコードを抜き差しする必要があります。しかし配線に余裕がないので、機械を引っ張り出そうとすれば、すでにささっているコードが抜けてしまい、録画映像がいったん途切れることになるでしょう。けれど今までの映像に途切れたような痕跡は見られなかったので、論理的には『映像に加工された痕跡はない』といえると思います」
堤が説明すると、蜂須賀と永手は納得したように同時に肯いた。
「あっ」ラックを確認していた星居が声を上げる。「四台あるドライブのうち、二台の電源が落ちてます。これってL室の方のドライブじゃないですか。コンセントに差し込むプラグのコードが、途中で切断されています」
「なるほど、だから何も映らないんだな」
監視カメラの映像はハードディスクドライブを中継しているので、ドライブの電源が落ちれば、当然映像も途切れてしまう。

「コードを修理するか、生きている方のコードを抜いて差し替えれば、電源は復旧できそうです。L室のモニタリングを復旧させますか？」
　星居が尋ねる。
「んー、それより実際にL室を見てきた方が早いんじゃない？　どっちにしろこの目で確かめる必要がありそうだし」永手が云う。「じゃあまあ、とにかくL室に行ってみようか」
　全員揃ってモニタルームを出た。
「犯人が変装してるってことは、監視カメラの存在を知ったうえで行動しているようだね。あの仮面は私の世代のセンスじゃないと思うなー」
　廊下を歩きながら、永手は両手を広げて、悠長に喋る。
「少なくとも犯人は蘇芳君を襲う前にモニタルームに寄って、そこにいた堤さんを殴って気絶させているわけですから、R室がモニタリングされていることにも気づいたはずです」
　星居は白衣の裾を翻しながら、足早に廊下を進む。
「そもそもコーヒーに睡眠薬を仕込んでいるのだとしたら、内部事情に詳しい人間の犯行に決まっておる」蜂須賀が不敵な笑みを浮かべながら云う。「犯人は我々の中の誰か、か――それともアシュヴィンか」
「アシュヴィン？」
　霧切が尋ねる。
「今回の研究チームのリーダーだよ。ここの研究所を用意したのも、研究内容を指示しているのも、全部アシュヴィンと名乗る人物だ。僕たちはその人物に招集されてここにいる」
　堤が説明した。
「あなたたち以外に、五人目の研究員がいるということ？」
「そういうこと……といっても、ここにはいないよ。たぶんね。本人は一度も姿を見せずじまいだ」永手はおおげさに肩を竦めながら云った。「やっぱり私たちは、そいつにはめられたってことなのかな。最初から怪しいと思ったんだよなー。なんか黒い封筒で今回の研究に関するファイルが送られてきてさ、興味があれば参加してほしいって。研究に参加するだけで三百万くれるって書いてあるから、ついつい来ちゃったわけだけど」
「どういう研究なの？」
「部外者に詳しいことは話せない――が、簡単に云えばよくある双子実験だよ」堤が説明する。「双子研究は社会学や心理学においては重要な分野の一つだ。特に遺伝子がまったく同じ一卵性双生児の研究は、発達過程にどれくらい社会的要素や遺伝的要素が関係しているのか知ることができる格

好の研究材料なんだよ」
「双子を小さな部屋に閉じ込めて、鎖で外から封印するような実験が、よくある研究なのかしら？」
　霧切は冷めたような目で堤を見る。
「そ、それは……僕たちはアシュヴィンの指示に従っただけで……」
　どう答えるべきか迷っていると、ちょうど目的地に着き、堤はそのまま言葉をうやむやにして呑み込んだ。
　目の前に『B』の南京錠と鎖で封印された扉がある。
「ふむ、確かに鍵がかかったままだな」蜂須賀が南京錠を指差して云う。「云っておくが、私も永手君も、六時の休憩以降、別棟の部屋を出ていない。それどころか研究所に立ち入ってすらいない。お互いが証人だ」
「多少酒が入っているけど、記憶が飛ぶほど飲んでもいないし、眠ってもいないからね」
　永手が補足するように云う。
「いいから早く開けてください」
「わかったわかった。せっかちだな、星居君は」
　蜂須賀はのんびりとした動作で、ようやく南京錠のロックを外した。
「のろのろしすぎですよ、蜂須賀さんも永手さんも。人命がかかっているんですよ。わかっているんですか？」
　星居が急いで鎖を外す。
　解けた鎖と南京錠をその場に放置して、一行はL室まで移動した。
　L室もまた前室が設けられ、ベッドのある部屋と、それを監視する部屋とに分けられている。封鎖されている扉の向こうには、双子の兄である九連紫紺がいるはずだ。
「おーい、紫紺君！　無事か？」
　堤が扉を叩いて呼びかける。
　反応はない。
「さあ、どいて。すぐに開けるよー」
　永手が南京錠を解錠しようとする。
　しかし霧切が今回もそれを制止した。
「待って。開けるのは中を確認してからにして」
「お前それ、さっきも同じことやってたけど、何か意味あるのか？」堤が尋ねる。「一刻を争うって時に……」

「密室殺人の形態の一つに『早業殺人(はやわざ)』と呼ばれるものがあるの。簡単に説明すると、密室を開放したあとで素早く行なう殺人のこと。被害者は完全な密室の中にいるけれど、その時はまだ死んでいない。犯人は密室が開いたあと、屍体を発見するふりをして、その時に殺すのよ。このトリックの特徴は、密室の強度を極限まで高められるということ。たとえば鎖で完全に封印された箱の中に、屍体を出現させることだってできる。ある意味、究極の密室とも云えるわ」
「なるほど……つまりその『早業殺人』が行なわれるのを避けるために、注意深く行動しているわけだな」
　蜂須賀が丸眼鏡の位置を直しながら云う。
　霧切は肯いた。
「じゃあまずは隣から中の様子を見てみましょう」
　星居が封鎖されていない方の扉を開けて、一人先に中に入っていく。
「ぎゃっ」
　悲鳴が聞こえた。
　彼女に続いて、霧切、永手、堤、そして蜂須賀という順番で部屋に入っていく。
　その部屋の造りは、R室で見た光景と変わりない。細長い空間に、長机とパイプ椅子、三脚によって設置されたビデオカメラなどがある。ただしR室とは対称的に、巨大なマジックミラーが左手側にはめ込まれていた。
　星居がマジックミラーの向こうを指差しながら、その場にへたり込んでいる。
　マジックミラー越しに白い部屋が一望できた。
　白い蛍光灯の明かりの中で、白を基調とした床や壁がますます白く照らし出されている。まるで部屋全体が白く発光しているかのようだ。やはり現実感のない奇妙な光景だ。
　その中で、ひと際異質な色彩が目を刺激する。
　ベッドの中心が赤く染まっていた。

L室

布団の中には双子の兄、九連紫紺が寝ていた。しかし彼が絶命していることは見た目にも明らかだった。目を見開いたまま、こちらを凝視するように硬直している。

　堤はマジックミラーを叩(たた)き始めた。もし生きているなら、音や振動に反応するはずだ。

　けれど紫紺が動くことはなかった。

「確認しに行こう」

　永手が出ていく。

　霧切と蜂須賀があとに続いた。

　堤と星居はその場から動けず、マジックミラーの向こう側の光景に釘(くぎ)づけになっていた。

「R室の蘇芳君と違って……ナイフがありませんね」

　星居が震える声で云う。

「本当だ。死に方はまったく一緒に見えるが……」

　布団の赤い染みの中央に、小さな穴が空いている。犯人がここに凶器を突き刺したことは間違いないだろう。しかし見たところ床に凶器らしきものは落ちていない。犯人が持ち去ったのだろうか。

　隣の部屋を覗いていると、ついに戸が開き、永手たちが室内に入るのが見えた。真っ先に部屋に入ったのは、やはり霧切だった。彼女は他の者に、戸口から動かないように命令したうえで、紫紺の脈と呼吸を調べ、死亡していることを確認した。

「R室の被害者とほぼ同じ時刻に殺害されたとみていい」霧切の声がミラー越しに聞こえてくる。「凶器は見当たらないけど……鋭利(えいり)なもので胸部を刺されたことで死亡したとみてよさそうね。他に外傷は見られないわ」

「おかしい、あり得ない」永手が初めてうろたえた様子で云う。「私たちが鍵をかける際には、確かに彼は生きていた。扉越しに軽口を叩いていたのを聞いているんだよ。生きていたんだ。それなのにどうして……」

「換気口があるが、ここから人が出入りすることは不可能だろう」蜂須賀が頭上を見上げながら云う。「この部屋を出入りするには、入り口の戸を開ける他なかろう。しかし鍵を開けられる者は我々以外におらん」

「で、でも、私が別棟を一歩も出ていないことは、あなたがよく知っていますよね？　蜂須賀さん」

「ああ……それは保証する。だから頭が混乱しているのだよ。誰がどうやって……」

　狼狽(ろうばい)する二人の男たちには構わず、霧切は室内をあちこち調べ回っている。彼女はマジックミラーの前で両手を広げて、幅を計っているようだった。おおよそ三メートルといったところだろうか。縦は一メートルくらい。マジックミラー越しに彼女の真剣な表情が窺えた。

「行きましょう。ここにはもう調べるものは何もないわ」
　霧切が部屋を出ていく。
　永手と蜂須賀の二人は、呆然（ぼうぜん）と彼女を見送ってから、はっと我に返ったように急いで部屋を出ていった。
「私たちも……行きましょうか」
　星居がようやく立ち上がり、堤と一緒に部屋を出た。
　前室で五人が合流する。
「これは一体どういうことなんだよ」堤は霧切に詰め寄った。「Ｒ室の方は僕たちを気絶させりゃあ、なんとかなるだろう。だがこっちは絶対にどうにもならない。永手さんと蜂須賀さんはずっと一緒にいてアリバイがあるし、当然気絶なんかさせられていない。どうやったって、犯人がL室に侵入することは不可能だ！」
「そうね」
　霧切はそっけなく答える。
「そうねって……」
　堤は勢いをそがれて、言葉を失ってしまった。
「やっぱりアシュヴィンとかいうやつが、南京錠にマスターキーとして自分の指紋をあらかじめ登録していたという説を、私も信じることにするよ」永手は降参を示すかのように、両手を上げる。「最初から全部仕組まれていたんだ。私たちをここに呼んだのは、罪をなすりつけるためだったのさ。コーヒーに睡眠薬を入れたのもやつだ。そう、犯人はアシュヴィンだ！」
「ちょっと待ちたまえ」蜂須賀が制止するように手を上げる。「マスターキーを登録しているなら、Ｒ室の方も造作（ぞうさ）なく開けられたはずだ。わざわざ堤君や星居君を気絶させる必要はなかったんじゃないかね？」
「うーん、それは……彼らを気絶させたのは鍵のためではなく、モニタの監視を一時的にやめさせるためだったのでは？　監視下で殺人を行なえば、すぐに取り押さえられてしまう可能性がある。双子の二人を殺害するのであれば、途中で取り押さえられないように万全を期すはずだよねー」
「仮にアシュヴィンが犯人だとして、僕たちをわざわざ集めたうえで双子を殺害したのは何故でしょうか……？」堤が唸るように言葉を繋げる。「まるで僕たちに殺人事件そのものを見せつけているみたいじゃないですか。そんなの変ですよ。こっそりと殺して山の中にでも埋めてしまった方が、合理的と云えると思いますが……」
「狂人の論理に、一般人の合理性など関係ないってことさ」

永手は断言する。

　彼はすでに謎の人物アシュヴィンこそ犯人だと考えているようだ。

「そのアシュヴィンについてだけど」霧切が云う。「直接その人物と会った人はいる？　もしかしたら、その人とのやり取りはすべて文書かメールだったのではないかしら」

「あ、ああ……確かに誰もアシュヴィンには会っていない。声も知らないんだ」

　堤が答える。

「届いた手紙が黒かったと、さっき永手さんが云っていたわね。他の人もそうかしら？」

「真っ黒でした！」星居が云った。「変な手紙だなあと思いましたけど、私お金に困ってたので……双子研究なら勉強にもなるし、ちょうどいいかと思って、わざわざこんなところまで来たんですけど……」

「それが彼らの手口よ」

　霧切は腕を組んで云う。

「彼ら？」

「犯罪被害者救済委員会。莫大（ばくだい）な資金力と組織力をもった犯罪組織。復讐（ふくしゅう）願望を抱く人間をそそのかして殺人を実行させ、それをゲーム仕立てにしてエンターテインメントとして提供する者たち」

「ははっ、なんだい、そのナントカ委員会って……都市伝説とか陰謀（いんぼう）論の類か」

　永手は鼻で笑いながら云った。

「信じられないのも無理はないわ。だから最初はその程度の認識で構わない」霧切は表情一つ変えずに切り返す。「けれどすでに二人も人が殺されているという事実を忘れないで」

「ではアシュヴィンを名乗る人物が犯罪組織の一員で、ゲームじみた殺人事件にするために密室を作ったというのかね？」

　蜂須賀が顎の無精ひげを撫でながら云う。

「少し違うわ。アシュヴィンは組織の人間ではなく、ゲームの挑戦者よ。組織によってゲームの中に放り込まれた人間であるという点では、私たちと一緒。違うのは、与えられた役割が『犯人』だということ。組織が用意したのは、この舞台と、殺人トリック。挑戦者はそれらを駆使（くし）して、殺人を完遂させ、一週間探偵から逃げ切れば勝ちというルールなの」

「ふむ、なるほど……つまりこの密室は犯人からの『出題』というわけだ」

「ちょ、ちょっと蜂須賀さん、彼女の云うことを信じるんですか？」

　堤は驚いた様子で尋ねた。

「信じるとか信じないとか、そういうレベルで物事を考えたことはないな。彼女はこの馬鹿げた状況を充分に説明してみせた。だから私は乗るのだよ」

「わ、私も賛成です」星居が手を上げて云う。「こんな荒唐無稽な話、口から出まかせで出てくるとは思えません。たぶんこのお嬢ちゃんはゲームの経験者で、今までに何度も同様の事件を扱ってきている。そうでしょう？」
　霧切は小さく肯く。
「甘いなー、みんな。こう考えたらどうだい？　この少女こそアシュヴィンである、と」永手が霧切を片手で示しながら云う。「犯罪組織の話が本当かどうかはわからないけど、どっちにしても彼女がアシュヴィンだと考えれば、いろいろと辻褄（つじつま）が合うよね。ここで双子研究が行なわれることは、手紙が届けられた私たち四人しか知らないはずなのに、何故か部外者である彼女が、訳知り顔で紛れ込んでいる。そんなことって、招待主であるアシュヴィン以外にあり得るかい？」
「うーん……確かに……」
　堤は霧切の表情を盗み見る。
　しかし彼女はまったく動じる様子もなかった。
　本当に彼女は探偵なのか？
　探偵でなければ、何者だ？
「でも……彼女は見るからに子供ですよ？」堤が控えめに反論する。「少なくともアシュヴィンからの手紙には、双子の研究に関して専門的な知識が窺えました。中学生や高校生の知識ではあり得ません。それに……彼女一人で施設の準備をしたと考えるのは、やはり無理があるように思えます」
「そうだねー、なんらかのうしろ盾（だて）はありそうだ。それこそナントカ委員会かもしれない。要するに犯罪組織の話は本当だけど、彼女自身が挑戦者というわけだ。どうです、蜂須賀さん。私の論理にも不足はないと思いますが」
「では密室殺人についてはどう説明するのかね？」
「さっきも云いましたけど、マスターキーとなる彼女の指紋が登録されているんですよ」
「マスターキーのアイディアについては、そもそも彼女が云い出したことだぞ。犯罪組織についても彼女からの情報だ。彼女が犯人だとしたら、そんな自爆めいたことをするかね」
「確かめてみたらわかることです。もし彼女の指紋が登録されているのなら、いずれかの指で鍵を解錠できるはずだ」
　永手は近くに落ちていた南京錠を拾った。
『A』と書かれた南京錠だ。
　掛け金をロックして、霧切に突き出す。
「さあ、鍵穴に指を差し込んでもらおうか。十本の指を順番に、すべてね。これは『真実の口』だよ。食

いつきはしないけど、もし君が犯人なら、ロックが外れるはずさ」
　無表情だった霧切は、この時初めて、かすかに不服そうな表情を浮かべた。
「さあ、早く」
「嫌よ」
「は？　なんだって？」
「嫌と云ったの」
　霧切は眉間に小さな皺を寄せて顔を背ける。
「おい、お前、自分の立場がわかっているのか？」堤が声を上げた。「犯人じゃないというのなら、指を差し込んで証明してみせたらいいじゃないか。それができないっていうのか？」
「できないのではなくて、嫌だと云っているのよ」
「……どうしてだい？」永手はにやにや笑いを浮かべる。「それは自白と捉えてもいいのかな？」
「私は犯人ではないわ」
「だからそれを証明したまえ」蜂須賀が霧切に詰め寄った。「ここで君が犯人ではないということを証明しておけば、これ以上余計な議論をせずに済む。違うかね？」
「嫌だというのなら、無理やりやるだけだよ？」
　永手がにじり寄る。
　霧切は諦めたようにため息を零した。
「……わかったわ」
　身体の前に細い指を広げる。
　探偵活動はおろか、楽器の演奏にも耐えられなさそうな華奢な指だ。こんな箱入りのお嬢さまみたいな女の子が、本当に探偵などやっているのだろうか……
　永手が突き出した南京錠の鍵穴に、霧切は右手の人差し指から順番に差し込んでいく。
　堤たちは無言のまま、その奇妙な儀式を眺めていた。
　親指まで含め、右手の指では南京錠は反応しなかった。
　霧切は次に左手の指を順番に差し込み始めた。
　儀式が終わるまで三分もかからなかった。
　南京錠のロックはそのままだ。
「これで満足？」
　霧切は目を細めて永手を見返す。
「納得するしかないでしょう、ねえ永手さん」堤が横から口を出す。「やっぱりアシュヴィンを名乗る人物

は他にいるんですよ」
「いや、まだ不充分だね」
「え？　何が……」
「まだ調べていない指が残されている」
　永手は霧切の足元を指差した。
「足の指？　そんな馬鹿な……」
「いやあ、こういう状況になることを予見していたとしたら、あえて手の指ではなく、足の指を指紋登録に使っていたと考えるべきだろう」
「だから嫌だったのよ」
　霧切が小声で呟く。
「え？」
「嫌よ」
「今さら君に拒否権なんてないよ。さあ、靴を脱いで」
　永手の要求に対し、霧切はあとずさるようにして拒絶の態度を示した。
「あ、こら、逃げるな」
　堤が霧切の腕を掴んだ。
　次の瞬間、視界が反転する。
　堤はいつの間にか床の上に仰向けになっていて、霧切を見上げていた。
　何が起きた？
　妙な技をかけられて、一瞬身体が宙を舞ったような……
「はは、大したものだ」蜂須賀が手を叩いて囃(はや)し立てる。「今のは合気道か？　いいものを見せてもらった。彼女が探偵だという主張を私は信じるよ」
「いやいや、だからといってアシュヴィンではないというロジックは成り立ちません。探偵であり、アシュヴィンであるという可能性だってある。足の指まで調べて、それでも南京錠のロックが外れないということを証明するまではね」
　永手は食い下がる。
　しかし霧切に近づけば何をされるかわからないので、一定の距離を保っているようだ。
「ねえお嬢ちゃん、なんで嫌がるの？」星居が霧切に目線を合わせるように屈(かが)み込んで尋ねた。「さっきみたいにすればすぐ終わるでしょ？」
「……恥ずかしいから」

霧切は怒ったような、悔（くや）しそうな表情を浮かべて、目を伏せた。あるいはそれこそ恥ずかしがっている表情なのかもしれない。

「恥ずかしい？」

堤は痛めた腰をさすりながら立ち上がる。

堤をはじめとして、男たちは一様に首を傾げていた。

「そっか……」星居は妙に納得した様子で云った。「じゃあ私が立ち会うから、向こうの部屋で二人だけで確かめるっていうのはどう？　お嬢ちゃん」

「それならいい」

「私がちゃんと確かめてきますから」

星居は永手から南京錠を受け取り、霧切と連れ立って監視部屋の方へ入っていった。

残された堤たちは釈然（しゃくぜん）としない表情で、互いに顔を見合った。

「乙女（おとめ）ごころってやつですか？」

「さあ……？」

五分ほどして、星居と霧切は部屋から出てきた。霧切の足元を見ると、靴も靴下もしっかりと履いた状態になっている。こころなしか、霧切は困難を乗り越え、やりきったような顔つきをしていた。

「ロックは外れませんでした。彼女はアシュヴィンではありません」

星居が云う。彼女の云う通り、南京錠は掛け金がロックされたままだ。

「間違いないのか？　ちゃんと調べたかい？」

「私まで疑うんですか？　永手さん」星居は気分を害したように云う。「ちゃんとすべての指を確かめました」

「わかったよ、私が悪かった」永手はおおげさに両手を上げて、首を横に振る。「彼女は無実だ」

「じゃあ今度はあなたたちの番ね」

霧切は南京錠を受け取ると、口元にかすかな笑みを零して、堤たちの前に立ちはだかった。まるで銃でも突きつけるように、南京錠を向ける。

「ここにいる全員に、すべての指を試してもらうわ」

「アシュヴィンがこの中にいるっていうのか？」

堤が尋ねる。

「さあ、どうかしら？」

霧切はそれ以上何も云わなかった。

「わかったよ、じゃあ僕から……」

堤が鍵穴に指を差し込んでいく。
　両手の指をすべて試したがロックは外れなかった。
「……足も？」
「ええ。南京錠を渡すから自分でやって」
　霧切は放り投げるようにして、堤に南京錠を手渡す。
　そのあと両足の指を試したが、いずれもロックは外れなかった。なお足の親指だけは、どうがんばっても鍵穴に入らなかったので除外した。そもそも鍵穴に入らないのであれば、登録することもできない。
　続けて蜂須賀、星居もすべての指を試した。やはりロックは外れなかった。
　最後に永手が南京錠を受け取った。
「待って、あなたは試す必要がないわ」
　霧切が制する。
「え？　どうして」
「『A』の南京錠にはもともとあなたの指紋が登録されているから」
「ああ、そうだね」
　永手は登録してある右手の人差し指を鍵穴に差し込んだ。するとロックが外れた。
「鍵は壊れてはいないようだね」
「あなたには、廊下の『B』の南京錠で試してもらうわ。異存ないわね？」
「ありませんよー、お嬢さま」
　永手はおどけた調子で云って、肩を竦めた。
　全員で部屋を出て、廊下を移動し、途中の両開きの扉を開ける。鎖と南京錠が足元に落ちていた。その鍵を拾って、永手が他のメンバーと同じように手と足の指を確認した。他の男性陣と同様に、足の親指は鍵穴に入らなかったが、それ以外の指ではロックは外れなかった。
　最後に蜂須賀が鍵となる指を差し込むと、ロックが正常に外れた。
「つまりこれで、僕たちの中にアシュヴィンはいないということが判明したわけだ」
　堤が云う。
「それはどうかしら。この実験では、あくまで『あなたたちの中にマスターキーを登録している者はいない』ということが証明されたに過ぎないわ。けれどもし、密室を作るのにマスターキーが不要だったとしたら、南京錠が開くかどうかは関係ない」
「マスターキーを使わずに密室を作る？　それは無理だよー」永手が大きく両手を広げて云う。「L室が鎖と南京錠でガッチガチに封印されていたのは、君も見ただろう？　南京錠のロックを外さずに封印を

解くことはできない。どう考えてもマスターキーが設定されているとしか考えられないね」
「そう？」
　霧切は曖昧（あいまい）に応じるだけだった。
　一行はひとまずモニタルームを目指して歩き出した。
「そういえば紫紺君の部屋には、凶器らしきものが見当たらなかったな。犯人が持ち去ったとみていいのだろうか」
　蜂須賀が誰にともなく云う。
「まあおそらくそういうことでしょうね」軽い調子で永手が応じた。「これだけ強固な密室だと自殺を疑いたくなりますが、少なくともその線はなくなりましたね。自殺であれば、凶器が必ず現場に残っているはずですから」
「自殺……？　そうだ！」堤は思いついたように声を上げた。「自殺ですよ。それなら論理的に説明できます」
「だからさー、今その話をしてたでしょー？　自殺だとしたら凶器は何処行ったのさ。本人が絶命したあとじゃ、凶器を片づけることなんてできないんだよー？」
「たとえばこういうのはどうでしょう。氷で作ったナイフで自分を刺した――」
「却下！」永手は一秒で切り捨てる。「まさか君、今の発言に傍点がつくなんて思っちゃったりなんかしてないよね？　氷の凶器なんて、ポータブルオーディオにたとえるとウォークマンどころか蓄音器レベルの発想だよ？」
「は、発想のレベルなんて、実際の事件には関係ないじゃないですか。蓄音器だって壊れてなければちゃんと音が鳴りますよ！」堤は動揺を隠しきれずに、声が震えていた。「紫紺君が自殺だと考えれば、蘇芳君の殺人も説明できると思うんです」
「どういうことだね？　話を聞こうではないか」
　蜂須賀が云った。
「あ、ありがとうございます。ええと、つまり僕が何を云いたいかというと……R室に現れた白い怪人はL室の紫紺君だったのではないか、ということです。双子の兄が弟を殺害し、そのあと自殺した。心中（しんじゅう）ですよ。それがこの研究所で起きた殺人事件の構図です。L室のモニタが映らないように細工されていたのは、部屋に戻った紫紺君が自殺するところを見られないようにするためでしょう」
「なんのためにそんな狂言じみた心中を実行したというのかね？」
「それは……わかりませんけど……僕たちを貶（おとし）めようという意志があったのではないかと思います。彼らにとって僕たちは、双子を研究材料としてもてあそぼうとする、卑劣な科学者に見えていたのではないで

しょうか。僕たちをここに呼び集めたのも彼らです。そう、彼らこそアシュヴィンだったのでしょう。ご存じかもしれませんが、アシュヴィンとはインド神話に登場する双子の神の名です。犯人にふさわしい名前でしょう？」
「ふうむ、ここまでは筋(すじ)が通っている——と云えなくもない」蜂須賀は丸眼鏡を押し上げて云う。「だが密室の件がまったく処理されていないな。仮に白い怪人が紫紺君だったとして、彼はどうやってL室を出入りしたというんだね？　そもそも彼をL室に閉じ込めたのは我々だ。たとえ彼がアシュヴィンで、マスターキーとなる指紋を南京錠に登録していたとしても、彼が室内に閉じ込められている以上、扉の外側にある南京錠には指一つ触れられないのだよ」
「ああ、そっか……確かにおっしゃる通りです。じゃあやはりL室には秘密の抜け道があって……」
「氷の凶器の次は、秘密の抜け道かい？　私はこう見えても秘密の抜け道肯定派なんだけど、さすがに今回はなさそうだなー。そうだろう？　探偵のお嬢さん」
　永手の問いに対して、霧切は遠くを見つめるだけで返事をしなかった。
「結局のところ、密室の謎が解けなければ、犯人もわからないってことでしょうか」
　星居が憔悴(しょうすい)した様子で呟く。
「密室の謎か——確かに鉄壁の密室だな」蜂須賀が顎ひげを撫でながら云った。「しかし私には一つだけ、この密室の謎を解くアイディアがある……」
「アイディア？」
「そうだ。双子だからできる、究極の密室トリックだ」
「究極の密室トリックだなんて、随分(ずいぶん)とまた大きく出ましたねえ」
　永手は冷やかし混じりに云う。
「いや、断言してもいい。もし成功すれば、間違いなく究極の密室トリックといえる。君たちは思い至らんかね？　仮にも双子の研究をしてきた人間であるのなら、考えつきそうなものだが」
「ああ！　そういうことか！」永手は何か思い当たったように声を上げた。「いや、でもまさかあれを密室トリックに利用するなんて……」
「えっ？　なんです？　私にはさっぱり……」
　星居は取り残されて慌てている。
「『コルシカの兄弟』だよ。誰でも噂程度には聞いたことがあるだろう。一卵性の双子だけが有する、不思議な感応能力のことを。双子は言葉に出さなくてもお互いが考えていることがわかったり、遠く離れていても感情を共有したりすることがあるという。しかもそれだけではない。時には痛みさえも共有するというのだ。双子の兄が右手を骨折すると、同じ時間、別の場所にいた双子の弟も右手の痛みを訴え

る。珍しいケースでは、片方が切り傷などを作ると、もう片方も同じところにミミズ腫れが生じるという」
「あれ？　それって私たちがまさにここで実験しようとしていたことじゃないですか？」
「おいっ、星居」堤はとっさに彼女の口を塞ごうとした。「研究内容は部外秘だぞ」
「あ、すみません」
「いや、もう探偵のお嬢さんに隠し事はせんでよかろう。そうだ、星居君が云ったように、我々はここで『コルシカの兄弟』実験を試みる予定だった。『コルシカの兄弟』というのは、さっき云ったように病気や身体的外傷を共有する特異な双子のことだ。その名は十九世紀に書かれた小説に由来する。つまり百年以上も前から、この現象は認知されていたということだな」
「アシュヴィンから届いた黒い手紙の中には、九連兄弟のプロフィールも入っていたんだ」堤はまるで罪を告白するような面持ちで、霧切に向けて説明する。「彼らは特に外傷において感応能力を発揮すると書かれていた。僕たちは彼らを使って『コルシカの兄弟』実験をする予定だったんだ。もちろん実験はアシュヴィンからの指示によるものだが……個人的な興味がなかったといえば嘘になる」
　霧切はその告白を聞いている間も、ずっと冷めたような顔つきのまま変わらなかった。実験の内容を知って怒っているのか、それとも興味がないので聞き流しているだけなのか。彼女の表情から感情を窺い知ることはできない。
「実験内容を簡単に説明すると、九連兄弟をそれぞれL室とR室に隔離して、兄か弟、いずれかの腕を針で刺激する。もう片方がその刺激を感知すれば成功だ。そんな実験がなんの役に立つかって？そりゃあ、もしこの現象を実用化することができたら、『完璧な暗号通信』として利用できる。しかも電波も衛星も使わずに、何処からでも送受信可能だ」
　堤は興奮気味に語る。ふと自分でも熱を帯びていることに気づいたのか、一度落ち着かせるように大きく息を吸い込んで、ゆっくりと吐き出した。
「ただし今日はそこまでの実験はしていない。よくある双子の感応実験をしたまでだ。ESPカードを一致させるとか、スケッチブックに絵を描かせるとか、初歩的なね」
「彼らを鎖で閉じ込めたのも、実験の一環というわけね」
「そう、不正がないようにするためだったんだ。僕は今まで何度か、感応力を持つという双子の実験に立ち会ったことがあるけど、いずれもインチキだったよ。事前にカードを引く順番を相談し合っていたり、何を描くか決めていたり。もっとひどいのは、小型の無線機で通話しながら実験に当たっていた双子もいた。そういう不正が行なわれないように、必要以上に鎖と南京錠で二つの部屋を行き来できないようにしてある。ジャミング装置もその一環だ」
「鍵を四つに分けて、それぞれ違う人の指紋を登録したのも、研究員の中に双子と通じる者がいない

ようにするためだよ」永手が続けて説明する。「たとえば私がインチキをして、双子に近づこうとしても、蜂須賀さんの鍵に阻まれる。あの鎖と南京錠にはそういう役割があるんだ」
「けれどそれが究極の密室を作るのに一役買ってしまったというわけだな。なんとも皮肉なことだ」蜂須賀がもったいぶるように、低い声で云った。「もうおわかりだろう。究極の密室とは、『コルシカの双子』を使った密室のことだ。犯人はまずR室に行くために、堤君と星居君を気絶させ、南京錠を突破した。そして録画映像にあったように、白い布と仮面を被って、直接蘇芳君を殺害した。こちらの殺人は密室とはいえない。だが、この時同時に、L室の方で究極の密室が完成したのだ。犯人が蘇芳君を刺した瞬間、L室の紫紺君の胸に致命傷となる刺し傷が生じた。これが密室の答えだ」
　蜂須賀はそう断言すると、口を閉ざしてしまった。
　これこそが結論であり、他に何も語るべきことはないと云うかのように——
　堤たちはモニタルームに着いた。パイプ椅子が並べてあるが、誰も座ろうとはしない。モニタに映っている蘇芳の屍体は、何かを訴えるように、ずっとこちらを向いたままだった。
「あの……皆さん、ここで落ち着くのもいいですけど、早く警察に通報した方がよくないですか？」
　星居が云った。今までの議論の中で、もっともまともで建設的な意見だった。
「それもそうだな……面倒なことになりそうだけど、ここでの実験のことは正直に話すしかないだろうね。そのあとは警察に任せよう」
　堤はポケットから携帯電話を取り出して、画面を確認した。圏外の表示が出たままだ。
「敷地を出れば、ケータイも使えるようになるはずです」星居が云う。「一応安全のためにも、全員で行きましょうか」
　その提案に、霧切が真っ先に反対した。
「警察への連絡は私がするわ。あなたたちはここで待っていて」
「えっ、それはだめよ、外に犯人がいるかもしれないから危険だって云ったのはお嬢ちゃん自身じゃない。密室の謎は解けても、犯人はまだ捕まってないんだし……」
「問題ないわ」
「さすがにそういうわけにもいかないよ。聞きわけなさいって」永手が云った。「未成年の女の子がこんな夜に一人で出歩くようなことをさせてはならないのさ。まっとうな大人としてはね」
「じゃあこうしましょう。僕が彼女と一緒に行きます」堤が提案する。「僕の車に乗っていけば、比較的安全にジャミングの範囲外まで行けると思うし」
「んーそうだね……では二手に分かれよう。堤君と探偵ちゃんは外へ通報に。私たちは殺人現場に誰も近づかせないようにここで見張っている」

「オーケーです。おい、探偵。それでいいか？　そもそもお前はケータイも持ってないんだろう？」

　堤が尋ねると、霧切は大人しく肯いた。

「えっと、私は……？」

「星居もここに残れ」堤が云う。「電話するだけなら大勢もいらないし」

「わかりました」

「私もここに残らせてもらうよ」蜂須賀が手を振る。「最近腰が痛くて仕方ない。私が行けば余計時間がかかりそうだからな。ははは」

「くれぐれも気をつけてください！」

　星居の声に送り出されるようにして、堤と霧切はモニタルームを出た。

　研究室から砂利道を抜けて、駐車場へ移動する。ろくに常夜灯もない場所なので、携帯電話のバックライトを明かりの代わりにするしかなかった。敷地内ではジャミングの効果のためか、リモコンキーも作動せず、暗闇の中から車を見つけ出す必要があった。

「あったあった」堤はようやく自分の車を見つけ、ドアを開けた。「ジャミングはけっこう広範囲に及ぶみたいだな……さあ、乗って」

　堤は運転席に乗り込んだ。

　霧切は後部座席に座る。

「ケータイはお前に預けておく。電波状況をみて、繋がりそうだったら警察に通報してくれ」

　堤は背後の霧切に携帯電話を手渡すと、シートベルトをしてエンジンキーを回した。

　真っ暗な森にヘッドライトの明かりが灯る。

「少し尋ねてもいいかしら」

「どうした？」

　堤は前を向いたまま返す。

「事件が起きるまでの流れを知りたいの。最初にこの研究所にやってきたのは誰？」

「星居だよ。本人がそう云っていた。タクシーで来たらしい。そのあと永手さん、蜂須賀さんの順番で、僕が最後だった。車、出すぞ」

　堤はアクセルを踏む。

　すべての生き物が死に絶えたような静けさの中、車のエンジン音と、タイヤが砂利（じゃり）を踏みしめて走る音が夜空まで響き渡る。空は重く曇（くも）っており、星一つ見えない。

「それが何か事件と関係しているのか？」

「さあ」
「おいおい、いい加減なやつだな……ずっと気になってたんだが、お前、本当に探偵なのか？」
「それこそどうでもいいことよ」
「やれやれ」堤は後部座席に見えるようにわざとらしく肩を竦めた。「子供だから見逃してやってるけど、その小生意気な態度、改めた方がいいぞ。誤解を招くだけならまだしも、犯人と間違われたって文句云えないからな。そもそも探偵ってのは、依頼人との信頼関係を大切にするもんじゃないのかよ」
「あなたは依頼人ではないわ」
「あーそうですか」
「双子の実験はどのようにして行なわれたの？」
「さっきも云ったけど、全部アシュヴィンを名乗る人物の指示をなぞっただけだよ。目的は『コルシカの兄弟』実験をすること。ご存じの通り、この実験は倫理的に問題がないとは云えない。だから——研究リーダーが匿名（とくめい）なのも、研究所が山の中なのも、報酬が大金なのも、他の様々な不審点も、『表には出せない実験だから』という理由で納得していた。まあ、よく考えりゃ、こんなうまい話ないよなあ」
「どうしてあなたが研究員の一人に選ばれたのかしら」
「さあね。それっぽい研究に携わっている人間で、金に困ってそうな者をピックアップしただけかもしれない。まあ、僕はしがない研究職だけど、蜂須賀さんなんかは双子研究に関して、わりと名のある人だ。ぶっちゃけると、アシュヴィンという名は、蜂須賀さんが表に出せない実験をする際に使っている偽名かと思っていたくらいだ」
　ヘッドライトは下り道のカーブを照らし出している。街路灯も対向車もない寂（さび）しい夜道だ。
「それで今日、一月十一日の昼頃に全員が集まり、実験を開始したのね？」
「そうだ」
「九連兄弟は、実験の主旨を理解していたの？」
「もちろん。僕たちがアシュヴィンから受け取ったファイルをすべて、彼らも共有していた。つまり彼らも実験の内容を理解し、納得ずくで参加していたというわけだ。おそらく彼らにもそれなりの報酬が支払われることになっていたのだろうね」
「それで、痛みや外傷を共有するという実験は成功したの？」
「まだその実験にまでは至っていない。少しずつ慣らしていって、三日後くらいから本番を始める予定だった。今日はカード当てとかテレパシー実験とか、よくある双子実験をやっただけだ」
「専門家の意見として訊きたいのだけれど、『コルシカの兄弟』を使った密室は成立すると思う？」
「専門家だなんて……まあ多少なりとも双子研究に携わったことのある人間から云わせてもらうと、あの

双子が本物だったら、あり得るだろうね。つまり本当に痛みや外傷を共有するような能力があったのだとしたら……ちなみに彼らはＥＳＰカードなどを用いた実験で、かなりの高得点を叩き出した。あとで結果を精査する必要があるが、表面的にはきわめて高い感応力を持つ双子といえる」
「そう、参考になったわ」
「ところでケータイはどうだ？」
「まだ圏外ね」
「本当か？　もうけっこう山を下りたぞ」
「そもそも電波の入らない地域ではないの？」
「ああ、なるほど。結局町まで下りないとだめそうだな」
「今日の実験は午後六時に終わって、その際に戸の外側に鎖と南京錠をかけたのね？」
「ああ」
「最初に封印したのは何処？」
「Ｌ室のドアだね。アルファベットでいうと、『Ａ』のやつだ。そうそう、永手さんも云っていたけど、鍵をかけた際には、間違いなく紫紺君は生きていたよ。部屋の中から彼の声が聞こえてきたし、そのあとモニタにも動いている姿が映っていたしね。それから『Ａ』の次は『Ｂ』の鍵をかけた」
「誰が鎖をかけて、誰が南京錠をかけたのか、覚えている？」
「……ええと、永手さんだったかな……いや、星居だ。『私がやります！』って、一生懸命鎖をぐるぐる巻きにしていたよ。彼女、せっかちだからなあ。なんでもすぐに行動に移さないと気が済まないたちのようだ」
「『Ａ』と『Ｂ』、両方とも星居さんが？」
「そうだ」
　長いトンネルのような闇（やみ）が続く。人工的な明かりが一つも見えてこない。このまま闇の底へと下りていってしまいそうな錯覚を覚える……
「次に鍵をかけたのは当然Ｒ室の『Ｄ』ね？」
「ああ。そのあと『Ｃ』だ」
「鎖と鍵をかけたのは誰？」
「どっちも星居だよ。そういえばモニタのパネルをずっと操作していたのも星居だったな……」
「後頭部を殴られた時、何か見なかった？」
「いや……残念ながら何も。気づいたら床に倒れていたからな。ひどいことしやがる。しかし殺されずに済んでよかったよ。俺は復讐の対象じゃないから助かったってことか？」

「どうかしら」
　霧切はそっけなく答える。
　バックミラーを覗くと、窓の外を無表情で見つめている彼女の横顔が映った。
「ケータイは？」
「まだ繋がらない」
「これだから田舎は嫌になるな……」
「ところでお願いがあるのだけど」
「お願い？　ほお、探偵からのお願いとは？」
「このまま近くの駅まで乗せていってくれないかしら。それが無理なら、適当なところで下ろしてくれればいいわ」
「はあ？」堤は思わず訊き返していた。「ちょっと待てよ、研究所はどうするんだよ？　まさか知らんぷりで、そのまま帰るって云うんじゃないだろうな」
「そうよ」
「そうよじゃねえっつうの」
「部外者は去るわ。お望み通りでしょう？」
「だったらお前は一体何しに来たんだよ！」堤は苛立ちから声を上げた。「さんざん引っかき回しといて、用が済んだらさよならか？　ほんと自分勝手なやつだな……」
「できることなら誰にも会わずに現場を見て立ち去るつもりだった。でもあなたが怪我をして倒れていたから、声をかけないわけにはいかなかった。さすがに見捨てるわけにはいかないものね。引っかき回したと云われる筋合いはないわ。私がいてもいなくても、結果は同じだったでしょう？」
「まあ確かに……発見が何時間か遅れていたかもしれないが……」
「私の目的は、事件の内容を詳細に知ること。その目的は果たした。だから帰るの」
「それで済むはずないだろ。星居たちや、警察になんて説明すりゃいいんだよ」
「警察には私から説明するから問題ないわ」
「ああ、そうかい」
　気づけばカーブの連続は終わり、ちらほらと畑や人家が目につくようになっていた。
「で？　犯人の見当はついているのか？」
「さあ」
　霧切は短く答えて、黙り込んでしまった。
　道の左右に白く雪化粧した段々畑が連なっている。コンビニどころか駅も見当たらない。

このまま彼女を下ろしていいものだろうか。

　彼女が事件と無関係だということは明白だろう。疑う余地はない。しかしわざわざ研究所を調べにきたいきさつが不明だ。

　そもそも本当に探偵なのか？　いや、探偵でなかったらなんだというのだ？　こんな子供が探偵を名乗り、たった一人で事件現場に現れるという状況が理解できない。

　この問題を放置していいのか？

　それとも処理すべきなのか？

「なあ、研究所で事件が起きていることをどうやって知ったんだ？」

「教えられない」

「一人で来たのか？」

「一人よ。タクシーを使った」

「仲間は一緒じゃないのか？　研究所で起きたことを報告する仲間がいるんだろ？」

「別の場所で待ってる」

「そうか……」

　堤は燃料メーターを見た。ガソリンはあまり残っていない。長く走り続けることはできないだろう。

「仲間にはなんて報告するんだ？　密室は『コルシカの兄弟』を利用した殺人事件だったと伝えるのか？」

「まさか」霧切はため息交じりに云った。「そんなこと、あり得るはずないでしょう」

「だが……どう考えてもそれ以外に、L室の紫紺君を殺害する方法がないだろ？　L室に行くまでには二重の封印を突破しなければならない。だがどちらの鍵も指紋認証で、当の指紋の持ち主は二人とも別棟で一緒に酒を飲んでいた。二人が嘘をついているのでもなければ——あっ、そうか！　彼らが共犯で、嘘をついていたんじゃないか？」

「行き当たりばったりの犯行なら、その可能性も考慮する必要があるけれど、今回は充分に練(ね)られた計画犯罪よ。もし蜂須賀さんと永手さんの二人が犯人なら、それぞれもっと別の方法でアリバイを確保するように計画を立てたでしょう」

「それはお前の印象論だろ？　彼らが犯人ではないという証拠は？」

「残念だけど、証拠はないわ」

「ほら見ろ、やっぱり彼らが——」

「警察はそう判断するかもしれないわね。双子にだけ起きる超常現象によって密室が作られたなんて、警察が信じるはずがない。真っ先に共犯説に飛びつくでしょう」

「そりゃそうだ」

「けれど――真犯人によって、密室が作られたことを証明できれば、彼らの共犯を否定することもできる」

「なんだって？」

「真犯人を告発する。それが私たちの役目」

「あの密室の謎が解けるっていうのか」

「ええ。何も問題ない。今まで出会った事件の方がよほど難しかったわ」

　霧切は得意げに云う。

　この時、堤は確信した。

　ここで彼女を殺しておかなければ後々厄介なことになりそうだ。

　堤は車のスピードを上げた。

枯尾花学園　――サルバドール・宿木・梟

　真っ暗な山道の途中で、宿木は急ブレーキをかけて車を止めた。
　ヘッドライトの明かりの中に、巨大な影が突如（とつじょ）として浮かび上がる。
　それは道いっぱいに立ち塞がる巨人だった。
　ブレーキを踏むのがもう少し遅れていたら、ぶつかっていたかもしれない。
　巨人は黒々とした両腕を大きく広げ、背中を丸めるようにして、道の真ん中に屈み込んでいた。森に迷い込んだ不幸な人間を探し出そうとしているのだろうか。それとも森の番に疲れて居眠りしているのか。
　宿木は車をバックさせて道の脇に止め、上着とバッグを手に車を降りる。バッグからマグライトを取り出し、明かりを巨人へ向けた。
　闇と光のいたずらだろうか。巨人に見えたそれは、当然ながら巨人などではなく――ある意味ではもっと厄介な――土砂崩れだった。
　左手の斜面から雪崩（なだれ）のように地面が崩れ、岩や木を含んだ土砂が道を塞いでいる。巨人の腕に見えたのは倒れた杉の木で、身体に見えたのは大岩だった。幽霊の正体見たり枯れ尾花。宿木はそんなことわざを思い出して、独り苦笑した。
　さて、どうしたものか。
　問題の枯尾花学園に行くためには、この道を進むしかないが、これ以上車は使えない。道の両脇はきつい斜面になっているため、徒歩で迂回（うかい）するのも難しい。
　時間を確認すると、すでに日付は変わって、一月十二日の午前二時。可能な限り最速でここまで来たが、それでもかなり時間がかかってしまった。『黒の挑戦』のスタートから、三十八時間経過していることになる。残り１３０時間。
　枯尾花学園の事件に関係している者たちは、すでにこの先にある校舎に集結しているとみていいだろう。土砂崩れは彼らを枯尾花学園に閉じ込めるための工作かもしれない。外界に繋がる唯一の道を断つことで発生するクローズド・サークル。『黒の挑戦』の舞台として、申し分ない状況だ。
　とはいえ、意図的にこの規模の土砂崩れを発生させることができるのだろうか。爆薬でも使えば可能かもしれないが、個人の犯行としては規模が大きすぎる。
　もちろん組織的な援助があれば話は別だが。
　やはり『黒の挑戦』か。

この先で凄惨な殺人事件が進行中であるという推測は、ますます確かなものとなっていく。

霧切響子は『深入りは厳禁』だと云っていた。ゲームの性質上、邪魔者は容赦なく排除されていく危険性があるからだ。しかし宿木は素直に彼女の言葉に従うつもりもなかった。目の前で事件が起きているかもしれないのに、見過ごすことなどできない。ましてそれが、犯罪被害者救済委員会の関係する事件なら、なおさらだ。

もはや宿木にとって、この件は他人事ではない。

組織に相棒の命を奪われたのだ。

相棒の名は魚住絶姫。

彼女は去年から、ある詐欺師を追っていたが、年末に連絡が途絶えた。事件解決に熱心で、云い出したら聞かない彼女が、何処かへ飛び出していったきりなかなか帰って来ないということはよくあることだったが、今回ばかりは様子が違った。音信不通どころか、完全に行方不明になってしまったのだ。

彼女の足取りをたどろうにも、何一つ痕跡は残されていなかった。まるで何者かが彼女の足跡を丁寧にかき消してしまったかのようだった。

これは詐欺師のやり口ではない。宿木は直感した。組織的な犯行の気配がする。魚住の存在を疎ましく思うなんらかの組織が強行的な手段に出たのではないか。宿木はそう考え、幾つかの組織を洗った。その過程で、探偵を標的にする謎の犯罪組織の噂を耳にしたが、情報があまりに少なく、手がかりを掴むまでには至らなかった。

しかし先日、宿木自身が『黒の挑戦』に巻き込まれたことで、犯罪被害者救済委員会の存在を知った。

もし魚住が『黒の挑戦』に巻き込まれた結果、連絡が途絶えているのだとしたら、もはや生きてはいないだろう……

武田幽霊屋敷の事件後、わざわざ犯人に接見しに行ったのは、犯罪被害者救済委員会について何か聞き出せるかもしれないと思ったからだ。もしかしたら魚住の行方を知っている可能性もある。そんな希望的観測もあった。結果的に犯人から魚住のことを聞き出すことはできなかったが、事件を通じて知り合った霧切響子と五月雨結から、一部始終を聞くことができた。

この巡り合わせは運命に違いない。

霧切響子から協力を依頼されなくとも、自ら戦場へ出向いていただろう。

これは弔いだ——

おそらく魚住は弔いなどというセンチメンタルな言葉を嫌うだろう。事件に向き合う姿勢はあくまでクールに。それが彼女のやり方だった。けれど彼女が探偵として常にひたむきだったことを、宿木は誰よりもよ

く知っている。

　この戦いには、命を懸(か)けるだけの理由がある。

　だから先へ進まなければならない。

　宿木は携帯電話を確認する。電波は届いていない。この先、外界との連絡手段はすべて断たれているとみていい。本来なら車で町まで戻って、然(しか)るべき機関に土砂崩れの情報を伝えるべきところだが、土砂が取り除かれるまで足止めを食うことになるのは避けられないだろう。少なくとも夜明けまでかかってしまう。

　それでは手遅れだ。

　迷っている時間はない。

　歩いて向こうに行けないのなら、跳(と)んで行くしかない。

　宿木は崩れた岩の一つに跳び乗った。

　すぐに次の岩へと足場を変える。

　そうして次々に岩や倒木の上を飛び跳ねて移動していく。細長く、それでいて力強い二本の足が、危険な土砂崩れの中を軽やかに舞う。

　彼はあっという間に障害物を乗り越えていた。

　まるで舞台の上を舞うバレエダンサーだ。事実、その驚くべき身体能力は、幼少の頃から続けているバレエによるものだった。彼でなければ、このクローズド・サークルに乗り込むことはできなかっただろう。

　宿木は振り返ることなく、土砂崩れを背に歩き出し、マグライトと雪明かりだけを頼りに、山道を上っていく。

　アスファルトの道はやがて途切れ、未舗装の砂利道に変わった。左右の木の間にチェーンが張り渡され、その先の道は封鎖されている。チェーンには『私道につき立ち入り禁止』の札がぶら下がっていた。

　マグライトで足元を照らす。雪の上に、複数の足跡が残されている。

　間違いない。この闇の向こうで何かが起きている。

　宿木はチェーンをまたいで、先へ進む。

　道はますます暗くなっていく。左右に迫る木々によって次第に道幅が狭(せば)まる。やがて頭上まで木の枝に覆われるようになった。不気味なトンネルの中を歩いているかのようだ。

　暗闇の先に、ぽつんと一つだけ、明かりが灯っているのが見えてきた。

　それが地獄の入り口に違いないとわかっていても――宿木はその明かりに温もりを求めるように、駆け出した。

　突然視界が開け、目の前に錆(さ)びた鉄柵(てっさく)の門が現れる。

門柱の上で、白くぼやけた外灯が光っていた。遠くから見えていたのはその明かりだ。左右の門柱のうち、左の外灯は割れてなくなっていた。

門の向こうは一面、雪で真っ白になっている。校庭だろうか。校庭を挟んで向こう側の闇の中に、かろうじて古びた木造校舎が見えた。

あれが『枯尾花学園』か――

その建物は学校というよりも、忌(い)まわしい呪いの洋館といった印象だった。晴天の下で見ればまた印象も変わるかもしれないが、少なくとも今は『黒の挑戦』にふさわしい舞台といえる。

門から校舎へと複数の足跡が向かっている。よく見ると向こうから引き返してくる足跡も重なっていた。

このおぞましい場所で、彼らは一体何をしているのだろうか。もしかしたら霧切響子たちが体験したという、命を懸けたギャンブルのようなことをやらされているのかもしれない。

宿木はマグライトをオフにして、暗闇に紛れるように校舎へ近づく。できることなら誰にも見つからずに行動したいところだ。このクローズド・サークルにおいて、自分は招かれざる客であり、殺人犯にとっては殺してでも排除したい存在であることは間違いないのだから。

昇降口に向かう。

建物は廃墟同然で、近づいただけで黴(かび)の臭いがした。入り口の硝子戸が割れており、妙な臭気はそこから漏れ出しているようだ。足跡はそこに続いている。

息をひそめ、入り口をくぐる。

完全な暗闇だ。

足元で、じゃりじゃりと硝子の破片を踏む音が鳴る。等間隔で並ぶ下駄箱(げたばこ)の間を抜け、軋(きし)む廊下に出た。

宿木はこの時、初めてサングラスを外した。

青い瞳が闇に馴染(なじ)む。

彼の眼球は生まれつき光を過敏に感じやすく、日中の光は毒に等しい。そのためサングラスが手放せない。一方で、彼は他人よりも光を見分ける能力――すなわち色彩感覚――に優れ、これが主に絵画を専門とする探偵としての武器となっている。また同時に、夜目(よめ)が利くため、夜間行動も得意としていた。

暗闇こそが彼の唯一の味方だ。

宿木は床板をなるべく軋ませないように、ゆっくりと廊下を移動する。左手に教室が並んでいるが、中は机と椅子がぽつんぽつんと放置されているだけで、ほとんど空っぽだった。人の気配はない。

ここで一体何が起きているのか……

急にひんやりとする廊下に出た。渡り廊下だ。先に見えるのは、体育館のドアだろうか。アルミサッシの引き戸が半開きになっている。

その隙間から、濃密な闇とともに冷気が溢れ出ていた。

宿木は息を殺し、戸の隙間から中を覗く。

バスケットのゴールや幕の開いたステージが見えた。やはり体育館のようだ。

床には色とりどりのラインが引かれている。それとは別に、何か白い物体が床の上に無数に立てて並べられていた。

ろうそくだ。

ろうそくが体育館の床に立てられている。

しかもでたらめに立てられているのではなく、幾何学（きかがく）的な図形を描いているようだ。

宿木はマグライトをつけて確認する。青白い光が、床の幾何学模様を闇に浮かび上がらせた。

──円だ。

ろうそくの円は二つ、隣り合うように並べられていた。しかし片方は未完成で、半円に留まっている。ちょうど数字の『８』の上側の円が、半分なくなっているような図形だ。

ろうそくの長さや太さはそれぞれ異なり、使用されたために溶けて短くなったと思（おぼ）しきものも少なくない。黒ずんだ床のあちこちに、溶け落ちた蠟（ろう）が白い斑点（はんてん）を作っている。

そして円の中央に横たわるもの。

人間だ。

誰かが仰向けに倒れている。

女性だろうか。身体つきは細く、小柄だ。真っ黒なワンピースというか、黒装束（しょうぞく）のような服を身にまとっている。

彼女の身体の中央──ちょうどへそのあたりに、白くて太い杭（くい）のようなものが垂直に突き立てられている。杭の周囲が濡れているように見えるのは、黒い服に血がにじんでいるせいだろう。

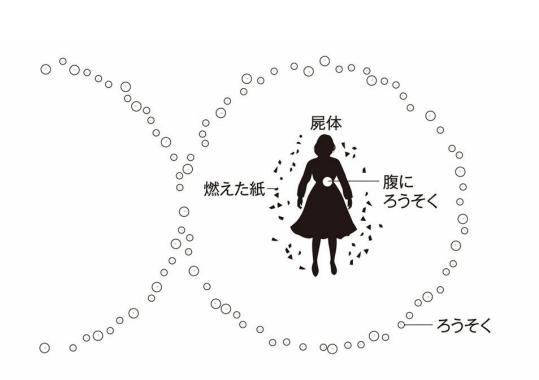
彼女が死んでいるのは明らかだった。

宿木は体育館の中に一歩踏み出し、女性のもとへ近づいた。

見たところ女性はまだ若々しく、眠っているような穏やかな表情をしていた。黒い服のあちこちに、点々と白い蠟の跡がついている。

よく見ると、腹部に突き立てられた杭もまた、ろうそくであるようだった。

つまり彼女はろうそくで作られた円の中で、ろうそくに貫かれて死んでいるのだ。

確かに挑戦状には、凶器としてろうそくが予告されていたが、まさかこういう形で使われるとは考えもしなかった。

枯尾花学園 事件現場

宿木はろうそくの円をまたいで、その内側に侵入した。この円にどんな魔術的効果があるのか知らないが、どんな魔法であれ、それを打ち砕くのが探偵だろう。これはまずその第一歩だ。

女性の脈と呼吸を確認する。やはりすでに死んでいる。体温はほとんど感じられない。

この子にも家族や恋人がいただろうに……

宿木はやりきれない気持ちをため息とともに吐き出しながら、凶器を観察した。

腹部に刺さっているろうそくは蠟がかなり溶けており、火がつけられていた可能性が高い。何か儀式的な意味があるのだろうか。

屍体の周囲には燃やされた紙のようなものが散らばっていた。ほとんど灰になっている。燃え残った紙を拾ってみると、見慣れない言語で書かれた書物の切れ端のようだった。宿木は仕事柄、主要な言語をある程度学んではいるが、彼にとっても初めて見る言語だった。

宿木はいったん屍体から離れて、あらためて体育館の全体を見渡した。建物自体に特別おかしなところはない。奥にステージがあり、深緑色の幕が開いた状態で垂れ下がっている。出入り口は二箇所あり、一つは宿木が入ってきたアルミの引き戸、もう一つは奥の壁に見える小さなドアだ。そちらには大きく『非常口』と書かれたパネルが掲げられている。

その『非常口』のドアに近づいて確認する。ノブの中央にツマミがあり、これをひねることで施錠したり解錠したりするようだ。今は鍵がかかっている。

開けて外を窺う。暗い森がすぐ目の前に広がっていた。雪に足跡などは見受けられない。

挑戦状によると、この殺人事件には密室トリックが用いられているらしい。

しかし入り口の引き戸には鍵がかけられていなかった。

これが密室といえるだろうか。それとも校舎を含めて雪密室ということだろうか。

宿木はサングラスをかけて、考え込むようにしばらくその場に立ち尽くした。

もう少し捜査したいところだが、誰かに見つかると厄介だ。いったん外に出て様子をみることにしよう。

宿木は戸口へ身体を向ける。

するとそこには、いつの間にか四人の男女が並んで立ち、不思議そうな顔をして宿木を眺めていた。

「おっさん……誰？」

一人が懐中電灯の明かりを宿木に向けて尋ねる。

――どうやら見つかってしまったようだ。

「お邪魔しています」宿木は場の雰囲気にそぐわない穏やかな声で云った。「すぐ出ていきますから、お気になさらず」

宿木は彼らの横を抜けて外へ出ようとした。

「いやいやいや、気になるっての。簡単に帰すわけにはいかねーよ」

　頭にドクロのバンダナを巻いたパンクスタイルの青年が宿木を押し留める。服のあちこちからチェーンがぶら下がっていて、何処へともなく繋がっていた。

「もしかしてお前……犯人か？」

「まさか」宿木は両手を上げて応じた。「私は今ここに来たばかりです。信じられないでしょうけれど、まったくの部外者なので、見なかったことにして帰してください。それではごきげんよう」

　宿木は再び帰ろうとする。

　しかしパンク青年が宿木の腕を掴んだ。

「『ごきげんよう』じゃねーっつうの。ふざけてんのか。まずは正体を明かしてもらおう」

　宿木はたっぷり三分間、逡巡（しゅんじゅん）している素振りをみせたが、目の前の彼らは黙秘を許してくれそうにはなかった。

　仕方なくポケットから探偵図書館のカードを取り出して、パンク青年に渡す。パンク青年は怪訝そうな顔をしながら、カードを仲間たちに回して見せた。

「わあっ、すごい、これ本物ですか？」

「うおおっ、探偵だ！　みんなよく見ろ、この状況で本物の探偵が現れたぞ！　おい、見るのはいいけど触るなよ、お触り厳禁だぞ。俺だって触りたいのを我慢してるんだからな！　だから触るなって！　ああ、いかん、鎮（しず）まれ俺の手……」

「ちょっと部長、はしゃぎすぎですよ」

　探偵図書館のカードに反応を示したのは、四人のうち二人だけだった。一人はセーターの上にネルシャツを着たごく普通の学生っぽい青年だ。

　もう一人は小柄な身体に、丈の合っていないぶかぶかのトレンチコートと安そうなスーツを着た青年。彼はコートの余った袖（そで）を振り回し、一人で興奮している。部長と呼ばれたのも彼だ。見たところ彼が一番背が低くて、中学生くらいの子供が精一杯大人っぽい格好をしているみたいに見える。

　メンバーにはもう一人、紅（こう）一点女性がいるが、他の者たちの背後に隠れるようにして、少し距離を置いている。しかも屋内なのに黒い日傘（ひがさ）をさして、盾みたいに前面に構え、その横から警戒するように宿木を覗いて見ていた。警戒心の塊（かたまり）といった印象だ。傘で顔も身体もほとんど隠れて見えないが、彼女が女性だとわかるのは、白いワンピースに深々と切り込まれたスリットから、なまめかしい太ももが覗いて見えるためだ。いわゆるチャイナドレスだろう。

　一方、パンク青年は宿木のカードを眺めながら首を傾げている。

「なんだよこれ。すごいのか？」

「知らないんですか？　何万人もの探偵が登録されているという施設の認証カードです」
　ネルシャツの青年が目を輝かせながら云う。とりあえず見た目と言動から判断するに、彼が四人の中で一番まともなようだ。
「つまりどういうことだよ？」
「この方は探偵なんです。しかもランクが『２』なので、かなりの切れ者です」
「まさかお前……そんなことも知らないでここにいるのか。オーケー、知らんでよろしい！　その代わり触るなよ！」
　トレンチコートの部長が騒ぎ出す。
「触んねえっつうの。なんでおめーは感極まるとべたべた触りたがんだよ。気持ちわりーな」
「本物の探偵を目の前にしたら、誰もが俺と同じ気持ちのはずだ」
「オカマとお前だけだっつうの」パンク青年はなんの感慨もなさそうに云った。「俺はそんなカード信用しないぜ。探偵だろうが総理大臣だろうが、今ここに怪しい男が一人、紛れ込んでるっつう事実に変わりはねえ。お前、どっから来た？　ここで何してる？」
「何処から来たのか具体的に教えることはできませんが、私の事務所はパリにありますので、ウェブで所属を確認してください。それから、私はここで事件が起きるという情報を得て、調査に来ました。情報源は明かせません」
「なんだって？　事件が起きることが予見されていたのか？」
　パンク青年は取り乱したように声を上げる。
「パリだって？」同時に部長が声を上げていた。「パ、パリに事務所？　おい、みんな聞こえたか？　探偵さん、もう一度その部分、繰り返していただけないだろうか」
「パリの事務所がどうかしましたか？」
「ひーっ」
　部長は興奮した様子でのけぞっている。
「犯行予告のようなものがあったんですか？」
　部長を脇に押しのけるようにして、ネルシャツの青年が尋ねた。
「そういうふうに考えてください」
「くそっ、あいつらやっぱり最初から俺たちをはめるつもりで……」パンク青年は独り言を云ったあと続けた。「お前、一人で来たのか？　警察は？　つーか、途中土砂崩れで道が塞がっていただろ？　開通したってことか？」
「質問が多いですね。いいでしょう、順番に答えます。私は一人で来ました。警察はまだこの事態を把

握してはいません。土砂崩れはそのままで、道はまだ開通していません」
「じゃあどうやってここまで来たんだよ」
「普通に歩いてきましたよ」
「はあ？　あの状況でどうやって……」
「いい足場があったのでわりと楽に乗り越えられました。でも向こう側に戻るのは難しいかもしれませんね」
「『しれませんね』じゃねえよ。これじゃあ、へんなおっさんが一人増えただけじゃねえか！　なんで警察呼んでくれなかったんだよ！」
「本当に事件が起きているかどうか、確信が持てませんでしたので」宿木は云いながら、殺人現場の方を振り返る。「本来なら捜査に影響がないように、黙ってここを立ち去るつもりでしたが、見つかってしまった以上仕方ありません。殺人事件は専門外ですが、ここは私に任せてください。早急に解決してみせます」
　特に言葉に力を込めることもなく、宿木は天気の話題でもするかのように、さりげなく事件の解決を宣言した。あまりにも唐突な宣言に、その場にいた全員が聞き流しそうになったほどだ。
「すげえ……すげえよ探偵さん……」
　部長はとうとう床に膝をつき、がくがくと太ももを震わせ始めた。
「お前に解決できんのか？」
　パンク青年が半信半疑で訊く。
「しなければならないんです。いろいろと複雑な立場でしてね」宿木は肩を竦める。「事件解決のためには皆さんに協力してもらうことが重要になります。ここで何が起きたのか説明してください」
「それは構いませんけど……ここは冷えるので場所を変えませんか」ネルシャツの青年が云う。「ストーブのある部屋があります。そちらで話しましょう」

　廊下の奥まった場所にある教室が、彼らの駐留所となっていた。机や椅子が取り払われた教室の中央に、円筒形の灯油ストーブが置かれ、室内を暖かくしている。
　事件関係者の四人と、そこに宿木を含めた五人が、輪になってストーブを囲む。
「いやはや、さきほどはお恥ずかしいところをお見せしました」部長が云った。「いつも服用しているなんらかの薬を三錠ほど飲みましたので、落ち着きました。フーッ……えっと……そうそう、我々は奥羽大統一大学のミステリ研究会のメンバーです」
「ミステリ研究会というのは、オカルト関係の？」

「ディテクティブ・ストーリーの方です」
「ああ、なるほど」
「俺が部長の安保五郎（あんぼごろう）、三年です。ミス研では部長とか、コロンボとか呼ばれています。どうしてコロンボなのかって？　別にカミさんの尻に敷かれているからではありませんよ。俺の名前を英語読みすると、なんとなくそう聞こえるからです。十回くらい繰り返して口に出せば、わかるでしょう。ちなみに『研究会』なのに『部長』なのは気にしないでください。言葉の綾（あや）ってやつです」
　彼はにこにこと笑いながら云った。
「コロンボさん、ね」
　癖っ毛でもじゃもじゃになった頭や、トレンチコートなどは、コロンボ刑事を意識した格好だろうか。本家の方は中肉中背の中年だが、彼は身長の低い子供のような体型だ。そのせいか、サイズの大きなお下（さ）がりを無理やり着せられているようで気の毒に見えてくる。
　それから自然と自己紹介の流れになり、研究会のメンバーが順番に口を開いた。
「えーと……僕は打田 透（うちだ とおる）、二年生です。トオルと呼ばれています」
　ネルシャツの青年が云う。見た目は普通の大学生だ。キャンパスを歩けば、二、三人は彼と同じような格好をした人間をすぐに見つけられるだろう。特徴がないのが、彼らの中では逆に特徴になっているようだ。
「私の名前は王（ワン）エリー……です」
　チャイナ服の女性が名乗る。彼女は傘に隠れて今まで何も喋らず、うしろに控えていたが、ストーブを前にしてようやく傘を閉じ、座った。腰まで届きそうな黒髪が滑（なめ）らかで美しい。無防備に太ももをさらけ出している。
「みっ、見ないでください……」
　とっさに傘を広げて顔を隠す。隠すべき場所が隠れていない。傘の横から顔をそっと覗かせながら続ける。
「あの……私は二年生です……皆さんからはエラリーと呼ばれています……女なのにエラリーって、変ですよね……恥ずかしいです……男の名前、嫌です……アリスに改名したらだめですか？」
　言葉遣いに多少、外国語訛りが窺える。
「彼女は中国系アメリカ人の留学生です」コロンボが補足する。「有栖川有栖（ありすがわありす）のファンらしいが、名前の音がエラリーに近いから命名しました。その名前がもらえるってことは、すごいことなんだぞ、エラリー。だからそう恥ずかしがるなよ。ちなみに云っておくが、アリスは男だからな」
「……ええっ！」

エラリーは目を丸くしている。

残りは一人、パンク青年だけだ。しかし彼は顔を逸らして、会話には興味がなさそうにしている。

「あなたの名前は？」

宿木が促す。

「んなもん云わなくてもいいだろ」

「別に構いませんが、余計な疑いを招くかもしれませんよ。私がここで得た情報は、そのまま仲間に報告することになっています」

「俺は犯人じゃねえって」

「どうして名乗ることを拒否するのですか？」

「うるせえな、いいだろ別に！」

「コースケさん、探偵さんの心証を悪くするだけですよ」

トオルが横から小声で云う。

「コースケ？」

宿木は訊き返した。

「っんだよ、云うんじゃねーよ、トオル」パンク青年は舌打ちする。「……そうだよ、コースケだ」

「それはあだ名でしょう？」

「情報としては充分だろ！」

「一応本名も教えてください」

「これ以上他人がプライベートなことに突っ込んでくるんじゃねえ」

「彼の名前は鈿 一耕助（かんざしいちこうすけ）。ハイセンスな親を持ったものですね。俺は彼の名前にピンと来たんですよ！　大学の掲示板に、学生課から彼の呼び出し状が出ていて、それを見た俺は宇宙人にアブダクションされかけた時以上に衝撃を受け、急いで先回りして学生課の前に待ち伏せし、彼が来たところを捕まえてミス研に入会してもらったというわけです。なー？　コースケ」

「触んなよ気持ち悪い！　つうか、さらっと人の本名暴露してんじゃねえよ」コースケはコロンボを押し留めて云う。「俺は自分の名前が嫌いなんだ。だから云いたくなかった。それだけだ」

「いい名前じゃないですか」宿木は笑顔で返した。「おかげさまで皆さんの名前を把握することができました。では話を先に進めましょうか」

「さっさと進めろ」

コースケが投げやりに云う。

「まずお尋ねします。ミステリ研究会のあなたたちが、どうしてこんな廃墟に来ることになったのですか？」

四人はそれぞれ顔を見合わせる。

　代表してコロンボが口を開いた。

「一昨日（おととい）――一月十日の夜九時頃、我々のもとにある手紙が届けられました」

　彼は懐から黒い封筒を取り出した。

　見覚えのある封筒だ。

「黒魔術研究会からの手紙です。封筒の中には黒い便せんが一枚入っていて、我々ミステリ研究会に対する宣戦布告が記されていました」

「黒魔術研究会？」

「そうです。我がミス研発足当時から、大学内において対立してきた因縁の相手です。我々の歴史は黒魔術研究会との戦いの歴史でもあります」

　ふざけているのかと思いきや、彼の目は真剣だった。他のメンバーも深刻そうな顔で肯いている。

「対立というのは？」

「我々が使用している研究会室が、もともとは黒魔研の研究会室だったというのが、対立の発端（ほったん）です。大学から部屋を借りられるかどうかは、メンバーの人数や活動の質を考慮（こうりょ）したうえで決められるのですが、黒魔研がその認定から外れた年、たまたまミス研が昇格し、黒魔研の使っていた部屋を借りられるようになったのです。それからというもの、やつらはミス研に活動の場を奪われたと考えるようになり、敵対視するようになったというわけです」

　コロンボは芝居（しばい）がかった調子で説明する。

「単なる逆恨（さかうら）みですよ」トオルが重いため息を吐き出しながら続けた。「黒魔研は普段から実験と称（しょう）して、ミス研の人間を標的にした黒魔術を行なってきました。たとえば僕たちに呪いをかけて事故に遭わせようとしたり、テストで赤点取るように仕向けたり……」

「まるで子供のいたずらですね」

「まあ、所詮（しょせん）は学生サークルのノリです。僕たちがミステリに関係したあだ名で呼び合ったり、孤島や雪山のペンションでキャンプしたりするのと同じように、彼らも黒魔術をやっているという雰囲気がなんとなく楽しめればよかったのでしょう」

「だが、ここ数年の間に黒魔研の性質が変わってきたのです」コロンボが云う。「具体的には、咲伏絵（さきふしえ）という女が会長に就（つ）いてからです。あいつがメンバーに女子しか入れないようになってから、活動内容もどんどんカルト化していったんです。今じゃ、知る人ぞ知る魔女集団です。土曜日の夜なんか何をやってるか知れたもんじゃないですよ。サバトと称してカラオケを朝までやってるという噂です。いつかあいつらが一線を越えるんじゃないかとひやひやしていましたが、とうとう越えてしまったというわけです。フーッ、

フーッ」
「美人揃いなので、一部の学生にはひそかに人気もあったんですけどね」
　トオルが苦笑いを浮かべつつ云う。
「これがその宣戦布告です」
　コロンボが黒い便せんを宿木に差し出した。
　読みづらい文面を苦心しながら目で追う。

『ミステリ研究会諸君ニ告グ。諸君ガ利用シテイル部屋ハ、本来黒魔術研究会ニ帰スルモノデアル。ヨッテ黒魔術研究会ガココニ部屋ノ奪還ヲ宣言スル。コノ宣告ハ即時実行ニ移ス用意ガアルガ、我々トシテハ無血開城ヲ第一ノ希求トスル。ソコデ諸君ニハ最大ノ慈悲ヲモッテ猶予ヲ与エタイ。コノ書状ヲ確認シテカラ六時間ト六分ト六秒以内ニ、下記ニ指定スル場所ニ集合サレタシ。最後ノ会談ヲ望ム』

「最初に手紙を見つけたのは？」
「僕です」トオルが手を上げる。「研究会室に本を取りに行ったら、それが机の上に置いてあったんです。集合しろって書いてあったので、まず部長に連絡を取りました」
「それが九時頃」コロンボが続けて云う。「そのあと俺が、可能な限り、あらゆる手を尽くして、すべての英知を結集させ、ミス研のメンバーに連絡を入れました。結局集まったのは四人だけでした。そもそもメンバーは全部で五人しかいませんがね」
「私……大学の寮に住んでいます……呼び出されて、すぐ駆けつけました」
　エラリーが傘に隠れながら云う。
「大学のすぐ隣に学生寮があるんです」トオルが説明する。「女子寮と男子寮があって、エラリーは女子寮に、僕は男子寮に住んでいます。僕は読む本がなくなると、大学まで行って研究会室を覗いて、誰かの置いていった本を借りてくるんですが、手紙はその時に見つけました」
「夜九時でも大学は開いているものなんですか？」
「朝六時から夜十一時くらいまではだいたい誰でも出入りできる状況です。それ以外の時間でも、守衛に学生証を提示すれば入れますね」
「学生以外が出入りすることは可能でしょうか」
「ええ。よっぽどおかしな格好でもなければ止められることはないはずです」
　手紙を置いたのは外部の人間の可能性もある。ただしその人物は、ミステリ研究会の部屋が何処に

あるか把握していたと思われる。
「トオルから連絡が入った時、俺とコロンボは大学の近くの雀荘（ジャンそう）で麻雀（マージャン）やってるところだったんだ」コースケが云う。「せっかくツキが回ってきたところだったのによ。仕方ねえから切りあげて、研究会室に集合したってわけ」
「そのあとは？」
「タクシーを借りて、四人一緒にここまで来た。とんでもない運賃になったけど、エラリーの財力に助けられた」
「私、おこづかいたくさんあります……でもしばらくエステは週三にしておくです……」
　エラリーはしょんぼりと肩を落として云った。
「到着したのは確か夜中の一時頃だったな？」
　コースケが云う。
「ええ、間違いありません」トオルが応じた。「手紙を見つけてから、みんなを集めてここに来るまでにかかった時間は四時間程度なので、制限時間は守れたはずです。それなのにこんなことになって……」
「屍体発見までの経緯は？」
「僕たちが到着した時にはすでに、体育館はあのようになっていて、彼女は亡くなっていました。見たところまだ殺されたばかりのようでした」
「到着した時点で？」
「ええ、おそらく」コロンボが云った。「我々は最初、廃校に到着してからしばらく校庭で黒魔研の連中が現れるのを待っていたのですが、彼女らはまったく姿を見せませんでした。それで、もしかしたらすでに来ているのかもしれないと考え、学校内を探索することにしたのです。その過程で、体育館にはすぐにたどり着きましたが、最初は戸が開かなかったのでスルーしました。しかし校内を探索しても他には何もなくて……結局、鍵がかかっていて入れないのは体育館だけだったので、戻ってきて無理やりこじ開けてみたというわけです」
「体育館には鍵がかかっていたのですね？」
「そう！　ずばり密室でした」コロンボの声が急に高くなる。「我々は現場に踏み込んですぐに、戸締りを確認しましたが、すべての窓と戸は内側から施錠されていました」
「つーか、密室って云えんのか？」コースケが口を挟んだ。「犯人が体育館の鍵を持っていて、普通に施錠して出ていっただけかもしれねえじゃん。鍵は見つかってねーんだし」
「ああ、その通りだ。こんな廃校の体育館が施錠されていたからといって、確固たる密室とは呼べない。そもそも鍵の存在があやふやだからな。誰が管理していて、普段何処にあって、スペアはいくつ存在する

のか……それらの条件を限定できない以上、入り口の戸が施錠されていても、なんら不思議ではない」

　コロンボは大仰（おおぎょう）な身振り手振りで説明する。

「問題は体育館の戸が施錠されていたことより、学校の周囲にまったく足跡がなかった、という点かもしれませんね」トオルが云う。「この付近で何時から何時まで雪が降っていたのか調べれば、より厳密に密室殺人と断定できるかもしれませんね」

　彼らは密室の厳密さについて議論しているが、おそらく『黒の挑戦』は予告通りに実行されたと考えていいだろう。

「皆さんが屍体を発見した時、ろうそくはどうでしたか？　火がつけられていましたか？」

「ええ。火がついているものもあれば、ついていないものもありましたね」トオルが答える。「現場保存という観点からいえば、火をつけたままにしておくべきだったんでしょうけど、さすがにそのままにしておくと火事になる危険性もあると思ったので、立ち去る際にみんなで吹き消しました」

「そのあとは？」

「急いで町まで引き返そうと思ったのですが、道が土砂崩れで崩壊していて戻れなくなってしまいました。ケータイも繋がらないし……結局丸一日、ここに閉じ込められている状態です」トオルはうなだれながら云う。「それにしても使えるストーブがあってよかったですよ。ストーブがなかったら今頃みんな凍え死んでいたかも……」

「ははは、トオルはおおげさだなあ」

「おおげさなんかじゃないですよ、部長。別の教室に古い温度計がかけてありましたけど、昼間の時点でマイナス一度でした。この辺りは標高が高いからでしょうね」

「はは……どうりで寒いわけだ……」

　コロンボの笑顔も凍りついている。

「じっとしててもらちがあかないので、もう一度事件現場を調べてみようと体育館に向かったところ、探偵さんと遭遇した、というわけです」

「経緯についてはおおよそ把握できました」宿木は云った。「次に被害者についてお訊きします。亡くなっていた女性には心当たりがありますか？」

「心当たりなんてもんじゃねえよ」

　コースケが吐き出すように云う。

「彼女は我々ミス研の五人目のメンバーです」コロンボがいかにも憔悴しきったような顔つきで云った。

「名前は鳴子麗（なるこれい）。トオルやエラリーと同じ二年生です。我々はグレイ嬢と呼んでいました。彼女は俺が

公園でハトに餌をやっていると、ばーっと駆けてきてハトを残らずその場から飛び立たせようとするおちゃめなところのある子でした」
「黒魔研の連中がやったに決まってんだろ！　見ただろ、あの異様な現場を。黒魔研の人間以外に、誰があんなことするっつうんだよ」
「コースケ！　印象だけで云うもんじゃない。仮にもミス研の人間なら、論理的に犯人を導き出さなければならない。それが死んでいったグレイ嬢に対する弔いでもあるんだ！　そうですよね？　探偵さん」
　弔い――
　その言葉に、宿木は一瞬、今は亡き相棒のことを思い出した。
「そうですね」宿木は動揺を見せずに穏やかに応じる。「もちろんミス研の人間ではなくても、論理的に犯人を導き出さなければなりませんが」
「論理的も何も、俺たちをこんなところに呼び出したのはあいつらだぜ？　はっきりと手紙に書かれてるじゃねーか。呪いか黒魔術か知らねーが、あいつらがグレイを得体の知れない儀式のイケニエにしたんだろうがよ！　主犯格は咲伏絵だ」
「私たち……制限時間守ったのに……黒魔研は守っていません……嘘つきです……」エラリーが傘を閉じて、涙を拭い始めた。「あいつらは最初からグレイちゃんを殺すつもりだったんです……」
「しかしわざわざ猶予を与えるようなことを書いておいて、すぐに反故にしているというのは理解しがたい」コロンボは腕組みして云った。「魔女たちの間で、何か予定外のことが起きたんじゃないか？　たとえば組織の内部分裂によって、タカ派がクーデターを起こしたとか……そもそも我々に対する脅迫自体、統一された意思のもとで行なわれたものではなかったとか……」
「さっきからハトだのタカだの云ってるけどよ、そもそも黒魔研の連中は一体何が目的でこんなことしたんだよ」
「それは手紙にも書いてあったじゃないか。研究会室の奪還だよ」
「グレイを殺すことが、どうして研究会室の奪還になる？」
「俺たちミス研が全員いなくなれば、研究会室は彼女たちのものになるだろ」
「はあっ？　それじゃあ何か？　グレイを殺すだけでは飽き足らず、このまま俺たちを土砂崩れでここに孤立させて、衰弱死させようっていうのか。冗談じゃねえぜ」
「でももう二十四時間以上、この寒さのなか、僕たちは何も食べてないんですよ……完全に術中にはまってるじゃないですか」トオルが呻くように云う。「お腹空きましたね……探偵さん、何か食べるもの持ってませんか」
「残念ながら」宿木は両手を広げる。「でも皆さんは健康そうなので、何も食べなくても一週間は生きら

れますよ。水なら外に雪がたくさん積もっていますし、煮沸（しゃふつ）すれば飲めるでしょう」
　宿木がのんびりとした笑顔で云う。
　しかし彼の言葉はなんの救いにもならず、ミス研のメンバーたちは一様に疲れた顔で肩を落とした。
「それよりストーブの方が問題かもしれません」宿木が云う。「燃料計がほぼ空を示しています。もって夜明けまでといったところでしょうか。そのあとは氷点下の中で救助を待つことになります」
「お、おいっ、ほんとにこのままだと全滅しちまうぞ！　なんとかしろよ、探偵！」
「ふふっ、探偵がなんでもできると思ったら大間違いですよ」
「何がおかしいんだよ、くそっ！　お前が警察に通報してりゃあ、今頃土砂崩れを取り除く作業が始まってて、少なくとも明日には帰れたのに！」
「いや、失礼しました。でも大丈夫ですよ。皆さんが凍死する前に解決しますから」
　宿木は笑顔で返した。
「なんなんだよこいつ……アホなんだか頼もしいんだかよくわかんねえ探偵だな……」
　コースケはやれやれというように首を振る。
「あまり時間もないことですし、話を先に進めましょう。学校内の探索は充分に行なったようですが、黒魔術研究会のメンバーを見かけたり、存在を示すような証拠を見つけたりすることはできましたか？」
「いいえ、我々以外の存在は未確認です」
「ふむ、まあそうでしょうね」
「何が云いたい？」
　コースケが突っかかってくる。
「今回の事件に黒魔術研究会は無関係です。黒魔術研究会はあくまであなたたちを誘（おび）き出すために名前を使われただけ。どのような文面にすればあなたたちを呼び出せるのか、犯人はよく研究していますね」
「はあ？　それじゃあ手紙の内容はでたらめだっつうのかよ」
「そうですね。事実、制限時間を守っているにもかかわらず殺人が実行されました。犯人の行動には矛盾が窺えます。おそらく犯人にとっては、研究会室の奪還や、ミステリ研究会との因縁はどうでもいいのでしょう。犯人の目的はただ一つ、鳴子麗さんを殺害すること」
「ちょ、ちょっと待ってください」トオルが慌てた様子で云う。「黒魔研が関係ないというのなら、体育館のあの儀式の跡はなんなんですか？　あれはどう見ても黒魔術の痕跡ですよね？」
「そう見せかけているだけです。犯人の作ったストーリーにおいては、犯人は黒魔術研究会の誰かということになっているのでしょう。それこそリーダーの咲伏絵さんを、スケープゴートにする予定だったのではな

いでしょうか」
「そうか……確かに最近の黒魔研には怪しいところもありましたが、いくらなんでも人殺しをするような集団ではないと、俺も感じていました」コロンボがもじゃもじゃの頭を掻(か)きながら云う。「しかしそうなると犯人は一体……少なくとも我々の事情に詳しい人間ということになりますね」
「俺たちの事情に詳しいって……」
　彼らは急に疑心暗鬼の顔つきで仲間の顔を窺い始めた。
「ま、まさかこの中に犯人がいるというんじゃないでしょうね」
　トオルがひきつったような半笑いの表情で云った。
「そんなはずありません……私たち仲間です！」
　エラリーが珍しく声を大きくして云う。
　しかし彼女の言葉に呼応する者はいなかった。
「あっ、そうか……」コースケが何かに気づいたように声を上げる。「あの事実がある限り、俺たちの中に犯人はいない。そうだろ、なあエラリー。お前はそのことを云いたかったんだな？」
「コースケセンパイ、気づくの遅いです……」
「あの事実とは？」
　宿木が尋ねる。
「死亡推定時刻だ。俺の所見では、グレイの屍体は発見時の段階で死後四時間から五時間といった感じだった。コロンボ、これがどういうことかわかるな？　お前から説明してやれ」
「わからん」
「おいっ……じゃあいい、トオル！」
「はい。僕たちの大学から、この枯尾花学園まで車で片道四時間かかります。僕たちが屍体を発見した時点で、グレイの死後四時間経過していたとすると……その四時間前、僕たちはまさに大学の近くでタクシーを停めて、出発しようとしている頃です。つまり僕たち四人には、彼女を殺害することはできないということです！」
「そういうことだ。どうだ、探偵。俺たちの中に犯人はいないって証明できたぜ」
「その死亡推定時刻は正しいのですか？」
「コースケとエラリーは医学部生なんですよ」コロンボが云う。「つまり法医学にも詳しいのです」
「ああ、といってもミステリマニアのコロンボやトオルと比べても、そんなに知識に大差ねえぜ」
「コースケセンパイの見立ては間違ってないです……気温の低さを想定したうえで……死斑(しはん)の状況や死後硬直の進行状況をみて……死亡推定時刻は正しいと思います……」

エラリーが云う。
「コースケさんの意見はともかく、エラリーがそう云うのなら、間違いないでしょうね」
「おいトオル、てめえ……」
「まあまあ」コロンボが仲裁に入る。「とにかくこれで我々のアリバイは確定しました。いかがでしょうか？探偵さん。我々は今まで黒魔研が犯人と考えていたので、身内のアリバイなど顧(かえり)みなかったのですが、改めて考察してみると全員に確かなアリバイがあるようです」
「どうやらそのようですね」
宿木は肯いて云う。
被害者の死亡推定時刻については、少なくとも法医学に心得のある二人の人間が算出しているので信用に値する。医学部以外の二人も、ミステリマニアとしてそれなりに知識を持っているようなので、仮に嘘の死亡推定時刻を伝えたとしても、ばれる可能性がある。おそらく見立ては正しい。
だとすれば彼らの中に犯人はいないということになる。
たとえば大学近くで鳴子麗を殺害し、屍体をトランクに詰めて、四人と一緒にタクシーでここまで移動する——といったトリックは難しいだろう。見たところ彼らはほとんど手ぶらで来ている。仮にこの中に犯人がいて、一人だけ大荷物で移動していたら、すぐに犯行が露見してしまうはずだ。四人全員が犯人なら可能なトリックだが、単独犯ではやはり不可能だ。
『黒の挑戦』の犯人が必ず単独犯かどうかはわからないが、今回のゲームが龍造寺月下によるものだということを考えれば、安易な複数犯説を採用すべきではないだろう。
では犯人はここにいる四人以外の人間か。
もちろんその可能性は充分に考えられる。
犯人はすでに枯尾花学園から逃げ出しているかもしれない。土砂崩れは容疑者を閉じ込めるためのものではなく、探偵を現場に踏み込ませないためのものだった、とも解釈できる。
あるいは犯人はまだこちら側に残っていて、今もなお何処かに身をひそめ、次の標的を殺す瞬間を待っているのかもしれない。
——やはり殺人事件は専門の9ナンバーに任せておくべきだろうか。
時刻は午前四時に迫ろうとしている。
宿木はふと魚住のことを思い出す。
今ここで引いたら、なんのために来たのかわからない。
宿木にとって、今回の事件に立ち向かうことは、魚住への弔いであると同時に、組織への復讐でもあった。

しかし敵対する相手もまた、動機として復讐心が根底にあるということを、宿木は理解している。
　宿木が今回の事件に対して感じている恐れは、犯人や組織に対してではなく、自分の中に存在している『彼らと同じ部分』であった。
　それはきっと誰にでもある。
　ほんの少しでもボタンがかけ違っていたら、自分はあちら側に立っていたかもしれない。
　だからこそ戦わなければならないのだ。
　今はただ、目の前の事件を解決することだけを考えよう。
　魚住ならきっとそうしていたはずだ。
　宿木は立ち上がる。
　そのまま一人で教室を出ようとした。
「おーい、待てよ」コースケが呼び止める。「突然立ち上がって、どうしたんだよ。一人で何処行くんだ？」
「改めて現場を捜査してみます。何か発見があるかもしれません」
「ほんとに自分勝手なやつだな……」
「それなら我々も同行します」コロンボが跳ねるように立って云った。「もともと捜査するつもりでしたからね！　よし、野郎ども、ミス研の力を結集させて、探偵さんに協力するんだ！」
「このテンションが続くと思うとうぜえ……」
　コースケは呟くように云ったが、結局宿木のあとにミス研のメンバーが全員ついていくことになった。

　体育館の捜査を始めて十分ほど過ぎた。
　さほど新しい発見はなかったが、コロンボが気になるものを見つけた。
「探偵さん、探偵さん！　これ見てくださいよ！　もう灰になっちゃって触れたら崩れちゃいそうですけど、ここに糸みたいなものが落ちてるんです！　これ、ほら、こんなに小さい！　これって重要な証拠になりませんか？　なりますよね？」
　宿木は犬のようにまとわりつくコロンボをいなしながら、問題の糸を観察した。彼の云う通り、燃え尽きて灰になった細い糸のようだ。屍体から少し離れた場所に落ちている。
　屍体の周囲には他にも、奇妙な文字の書かれた紙切れが燃やされて散らばっている。一見すると儀式的な理由で燃やされたかのようだが、何か別の理由があるかもしれない。
　燃やされた紙と糸。
　これらは一体何を意味するのだろうか。

宿木は思考を巡らせながら体育館を歩き回る。

吐く息が白い。外と同じくらい空気が冷え込んでいる。広いせいもあるだろう。およそバスケットコート二面分。奥にはステージもあり、天井は十メートル以上の高さがある。

屍体発見時、この体育館は密室だった。人が出入りに使えるのは、渡り廊下に出る正面の入り口と、裏口だけだ。しかし裏口も当然のように施錠されており、外の雪には人が出入りした痕跡は見受けられなかった。

やはり犯人は正面入り口から出入りしたとみていい。

戸の鍵は見つかっていないので、これについてはさほど問題にする必要もないだろう。問題は雪だ。雪がやんだ時刻は死亡推定時刻より前だったと、のちに気象台への問い合わせで判明するはずだ。学校全体が雪密室だったという趣向だろう。しかし今は携帯電話が使えないので確認することはできない。

密室の厳密性については、ひとまず置いておくことにしよう。目下のところ検討すべき問題は、ミステリ研究会のメンバーの中に犯人がいるのか、ということだ。

彼らには全員、アリバイがある。しかしだからといって『犯人ではない』とは云えない。密室殺人に使われたトリックを暴けば、アリバイを崩せるかもしれない。

「腹部の他に、外傷はありませんね」

エラリーが屍体に寄り添うようにして仔細に調べている。人間に対しては及び腰な彼女も、屍体に対してはやけに積極的だ。こころなしか片言だった口調もましになっている。

「腹部のろうそくは、杭のように先端を尖らせてグレイちゃんに打ち込んだか、あるいは先端にのみ鋭利な刃物が組み込まれていて、刺さりやすくしてあるのではないかと思われます」

「そのろうそくには、火がつけられた形跡がありますね」

宿木は凶器を覗き込んで云った。

「はい。蠟が溶けているので、火がつけられたのは間違いないでしょう。グレイちゃんに刺す前か、刺したあとかわかりませんが」

「それなら、刺したあとに火をつけたのだと思いますね」

遠巻きに見ていたトオルが云った。

「へー、どうしてそんなことが云える？」

コースケが尋ねる。

「仮にあれを杭に見立ててグレイに打ち込んだのだとしたら、ハンマーか何かでろうそくの頭を叩いたってことになりますよね。その場合、ろうそくの頭は水平でなきゃ叩きづらいでしょう。でも見てください、てっぺ

んの部分が溶けて窪んでいます。もしこの状態でハンマーを使ったら、窪みの縁が欠けたり、最悪の場合ろうそく自体が割れたりしてしまうと思うんです。しかし見たところそういった痕跡はありません。つまりろうそくの頭が水平の時に打ち込まれ、そのあとで火がつけられた、という順番で間違いないと思いますね」
「ほほー、なるほど。お前、頭いいな」
　問題のろうそくは、てっぺん部分の直径が七、八センチほどもあり、中心が溶けて大きく窪んでいる。確かに杭として打ち込むなら、溶けていない時にやらなければ壊してしまう可能性が高い。
「しかし杭を刺したあとで、火をつける意味なんてあるのかよ？」
「うーん……やっぱり儀式的な理由があるんでしょうか……」
　トオルとコースケは屍体から少し離れた場所に立ち、二人で議論し合っている。
　これだけ太いろうそくならば、一度火をつけたら数時間は燃え続けるだろう。ろうそくは蠟に特別なオイルを混ぜたり、芯の材質を変えたりすることで、燃焼時間を延ばすことも縮めることもできるという。このろうそくははたして……
　宿木はろうそくを覗き込んで、ある奇妙な事実に気づいた。
　本来、ろうそくの中心にあるはずの芯がない。
「屍体を発見した際、このろうそくは燃えていましたか？」
　宿木は振り返って尋ねる。
「いいえ」トオルが答えた。「火はついていませんでしたね」
　見たところ芯はないが、燃えた痕跡は見られる。
　ということは、芯はあったが、燃え尽きたのか。
　何か意図的なものを感じる。
　仮に芯が特定の長さしかなかったら——それが燃え尽きた段階で火が消える。
　それは自動消火システムといってもいい。
　任意の時間に火が消えるように仕組まれたろうそく……
　なんとも不思議な凶器だ。
　これはトリックと無関係ではないだろう。
　宿木は立ち上がると、サングラスの位置を直しながら、周囲の床を見回した。
　床の上には、まるで血痕のように、白い液体が王冠状のひだを描いて、点々とあちこちに落ちている。溶けて落ちた蠟が固まったものだ。見たところ円の中心近く、特に屍体の周辺に白い点がたくさんある。

よく見ると、一部の蠟は床に落ちて弾けずに、小さな球体——あるいは粒になって転がっていた。まるで形が不揃いな真珠（しんじゅ）のネックレスを散らかしたみたいだ。
「犯人は懐中電灯やペンライトなど、明かりになるようなものを持っていなかったんじゃないでしょうか」
トオルが云った。
「はあ？　なんでだよ」
再びコースケが尋ね返す。
「これだけあちこちに蠟が落ちているってことは、犯人は火のついたろうそくを持って動き回ったということでしょう。何故そんなことをしたのか？　それは犯人が懐中電灯を持っていなくて、ろうそくを明かりとして使っていたからです。死亡推定時刻から判断するに、殺人が行なわれたのは午後五時くらいですから、この季節だともう暗くなり始める頃です。それで急遽（きゅうきょ）、ろうそくを明かり代わりに使ったのではないでしょうか」
「おお、なるほど！　やっぱりお前、頭いいな！」
違う——
宿木は二人の会話を聞きながら、心の中で呟いていた。
犯人がろうそくを手に持って移動していたのなら、溶けた蠟はせいぜい床から一メートル程度の高さから零れ落ちたことになる。この時、蠟は床に落ちた瞬間弾（はじ）けて、王冠状の模様を作る。さらに高いところから落ちれば、その王冠のひだはもっと広範囲に及ぶだろう。
たとえば殺人現場に残された血痕を調べることで、その血がどの程度の高さから落ちたものなのか、移動している最中か静止しているか、どの方向から飛び散ったのか、もろもろ判断することができる。それは溶けた蠟でも同じことが云えるだろう。
では——屍体の周囲に落ちている蠟の粒は何を意味するのか。
宿木は周囲を見渡す。
この体育館には観覧用のバルコニーはない。
ということは……
宿木は天井を見上げ、呟いた。
「わかりました」
「え？」コロンボが宿木に飛びつく。「今、わかったって云いませんでした？　普通にさりげなく、わかったって。な、何がわかったんですか？」
「トリックです」宿木はコロンボを押し留めるようにしながら云う。「この発想には自分でも驚いています。到底あり得ない……と思う一方で、その突拍子のなさこそ真実めいているようにも思えます」

「うはーっ、マジですか！」
　コロンボは過呼吸でその場にひっくり返りながら、悶(もだ)え転がり始めた。
「いよいよ解決編か？」コースケは挑発するように云う。「お手並み拝見といこうじゃねーか。名探偵さんよ」
「エラリー、いつまでも屍体と会話してないでこっちに集まれ」
　コロンボがエラリーを呼びつける。
　エラリーは屍体の傍に屈み込んで、幸せそうな顔で何か呟いていたが、名残惜(なごりお)しそうにミス研メンバーのもとに集まった。
　四人はそれぞれ期待や不安の入り混じった顔を並べて、探偵の発言を待つ。
「さて――」
　宿木は云った。
「うぉあ！　ほんとに『さて』って云った！　名探偵が『さて』って云ったぞ！」
「うるせーぞ、バカ」
　コースケは本気でコロンボの頭を殴りつけた。
　さすがのコロンボもかなり痛かったらしく、袖に隠れた手で頭をさすりながら黙って宿木の次の言葉を待った。
　すると宿木は唐突に、彼らに背を向けて手を振った。
「私はそろそろ帰ります」
　渡り廊下へ出ていこうとする。
「おーい、待て待てーっ！」コースケが宿木の肩を掴む。「何処行くんだよ！　帰るって何？　みんなの前で謎解きするところだろうが」
「え？　私の話が聞きたいんですか？」
「当たり前だろ！　つうか、自分だけ解決して、それで満足して帰る探偵が何処の世界にいますかっつうの！　あれだけ『任せてくれ』なんてすかしといて、自分の用事が終わったらさっさと帰るのかよ」
「……あ、見送りじゃないんですね。なんでわざわざ集まったのかと思いました。うーん、時間がないのですけど……わかりました。説明します」
「なんで不服そうなんだよ」
「これでも急いでいるんです。そうは見えないかもしれませんが」
「あー、イラつく！　ほんとに自分勝手な野郎だな……」
「おい、コースケ」コロンボが割って入る。「探偵さんを責めるな。探偵というものは神出鬼没(しんしゅつきぼつ)を宿命づ

けられているものなのさ。明智小五郎(あけちこごろう)なんか、捜査中に仮病でいなくなるなんて普通のことだったぞ。この探偵さんは仮病を使ってないだけましだ！」
「擁護(ようご)になってねーよ」
「ともかく！」トオルが云った。「いったん教室に戻りませんか？　このままだと凍えてしまいます」
　宿木はできることならすぐに学校から立ち去りたかったが、仕方なく彼らに付き合うことにした。
　次へ進むためにも、ここは手早く片づけるしかないだろう。
　そしてこの弔いに決着をつけるのだ。
　いや――弔いという言葉がどうもしっくりこない。
　その理由が今ではなんとなくわかる気がする。
　そう、これは弔いではなく復讐なのだ。

　ストーブのある教室に入ると、全員がすぐに異変を察知し、思わず足を止めた。
　――空気が冷たい。
「ああっ！」コロンボが大声を上げて、ストーブの前に駆け寄る。「火が！　火が消えてる！　灯油が切れたんだ！」
「マジかよ……これじゃ山で遭難(そうなん)してるのと変わんねーよ！」コースケは身体を震わせた。「この極寒(ごっかん)の中、誰かが俺たちの存在に気づくまでずっとこのまま……」
「ああ……私たちここで……死ぬんですね……」
　エラリーはその場にしゃがみ込むと、亀が甲羅(こうら)の中に隠れるみたいに、傘を広げてその中に身を隠してしまった。
「冗談じゃなく、本当に凍死の危険性が出てきましたね……」トオルが顔を真っ白にして云う。「せめてろうそくの火を残しておけば、何かしら燃やして暖(だん)を取ることができたかも……」
「なんでそれを早く云わねーんだよ！」
「まさかこんなことになるなんて思ってなかったからですよ！」
「てめー、何先輩に向かってキレてんだよ！」
「キレてませんよ！」
「お、お、おいっ、う、うろたえるな、お前らっ！」
「ヘンタイは黙っててください！」
「え、ええっ？　トオル君？」
「皆さん、そんなに慌てなくても大丈夫ですよ」宿木はいつもと変わらない穏やかさで仲裁に入った。

「火を起こすことくらいボーイスカウトで習ったでしょう？　私は得意ですよ」
「そもそもおめーがとっとと警察に電話してりゃ、こんなことになってねーんだよ！」
　コースケが宿木の胸倉を摑む。
　その拍子に、宿木のサングラスが外れて床に落ちた。深い海の色をした瞳が露わになる。コースケは妙な気まずさを感じて、手を離した。
　宿木は小さくため息をつきながら、サングラスを拾い、かけ直す。
「まずは体育館に戻って、太めのろうそくを集めてきましょう。ストーブとは比較にもなりませんが、何も火がないよりはましだと思います」宿木は何事もなかったかのように続ける。「それからここよりもっと狭くて小さい部屋に移った方がいいですね」
「よし、それじゃあ早速みんなでろうそくを集めるぞ！」コロンボが急にリーダーシップを取り始める。「俺たちは生きて帰るんだ！　いいな？　これ以上、誰も死なせない！」
「こういう時だけかっこつけようとするんだよな。調子がいいやつ」
　コースケは呆れたように云った。
「ところで謎解きはどうなったんですか？」
　トオルが尋ねる。
「ああ、そうですね。ついでですから、体育館で話をしましょうか」

　宿木とミステリ研究会のメンバーたちは体育館に戻り、床に立てられているろうそくを拾い集めた。ろうそくも種類によっては数十時間燃え続ける。暖房として使うにはこころもとないが、何もないよりはましだろう。
「もう現場保存どころじゃありませんね」
　トオルが云う。
「もしかしたら、こうして我々に現場を荒らさせることも、犯人の計画のうちなのかもしれません。なかなか賢いですね。もっとも、もう事件の謎は解けているので問題ありませんが」
　宿木が云う。
「そうそう、そのことですけど」コロンボがぶかぶかのトレンチコートのポケットにろうそくをいっぱい詰め込みながら云った。「事件の真相をそろそろ聞かせてもらえませんか」
「いいでしょう。この魔術的な殺害現場で一体何が行なわれたのか——手短に説明しましょう」
　宿木は優雅に両手を広げながら、屍体の近くまで歩み出た。ミス研メンバーたちは、全員が思わず作業する手を止めて、彼に見とれたほどだ。

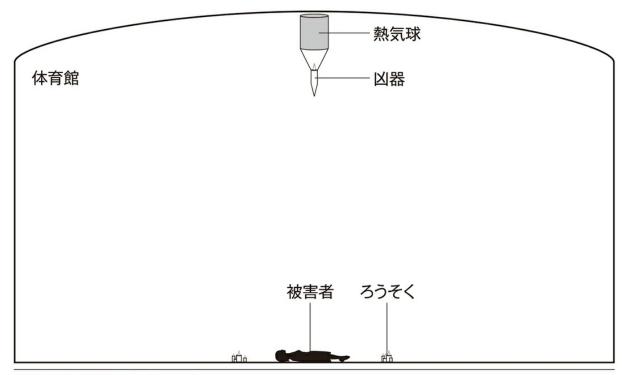
「謎を解く鍵はすべて、この殺害現場に残されています。その鍵となるものとは——」
「俺が発見した燃えた糸くず！」
　コロンボが袖の余った手を上げる。
「そうです」宿木は彼を指差して云った。「コロンボさんの見つけた糸。燃え残ったのはわずかでしたが、実際にはもっと長い糸が用意されていたと思われます。これは犯人によって燃やされ、証拠隠滅が図られたのでしょう。そのことから考えて、重要な証拠品であることは間違いありません」
「密室で糸といえば、鍵のツマミに取りつけたりして、外から施錠するっていうあれか？」
　コースケが首を傾げながら尋ねる。
「今回そのような使われ方はしていないようです。皆さんが前に検討していましたが、鍵の存在があやふやな密室ですので、施錠する方法にそのようなトリックを用いる意味はありません。おそらく糸は別の目的で用いられたのでしょう」
「別の目的？」
「それを知るには、他の証拠品と組み合わせて考える必要があります。ただし——その前に、燃え残った糸から推察できることをもう少しつきつめていきましょう」
「他にもまだ何か？」
「糸が燃え残って現場に落ちているということは、犯人はそれを回収できなかったと考えられます」
「えー、そうか？」コースケが眉間に皺を寄せて云う。「落っことしたことに気づかなかっただけじゃねーの？」
「燃やして証拠隠滅を図ろうとしている時点で、落としたことに気づかなかったということはあり得ません」
「ああ、そっか」
「ただし厳密に云えば、『証拠隠滅を試みたけれど燃え残ってしまったこと』には犯人は『気づかなかった』のは事実でしょう。では犯人がこのような状況に陥るのはどのような場合でしょうか」
「別の誰かに指示してやらせた……？」
　コロンボが答える。
「なるほど、共犯者がいたということでしょうか。確かにその共犯者がよほどおっちょこちょいで、『証拠隠滅を試みたけれど燃え残ってしまったこと』に『気づかなかった』としたら、確かにあり得ますね。さらに犯人が共犯者に確認を取らなかったとしたら、回収し損ねることもあったでしょう。しかしここまで綿密に計画を立てていながら、共犯者に足をすくわれるというのは、犯人にとって本意ではないはずです」
「共犯者はいないということですか？」
「いいえ、いないと断言はできません。いた可能性も充分に考えられます。けれどまずは、共犯者はい

ないという前提で推理を進めます。すべての推理を考察した結果、やはり共犯者がいたとしか考えられない場合にのみ、論理の道筋をここまで戻ることにしましょう」
「でも燃やそうとした証拠品を、うっかりその場に置き去りにしてしまうのは、犯人自身ではあり得ない気がしますが……」
「いえ、一つだけ考えられる可能性があります。簡単なことですよ。犯人は現場にいなかった。糸が燃えた時、犯人は別の場所にいたため、それを確認することも回収することもできなかったのです」
「どういうことですか？」トオルが腕組みしながら云う。「現にここでグレイが死んでいるんですよ。犯人がここにいなかったのだとしたら、どうやって彼女を殺害するんですか」
「トリックを使えば可能です。今回の事件のテーマは、密室における『遠隔殺人』といったところでしょう。犯人は別の場所でアリバイを確保しながら、閉ざされた部屋の中にいるグレイさんを殺害しました」
「本当にそんなことが可能なんですか？　そのトリックとは？」
「では改めて、現場に散らばる証拠品の数々を確認してみましょう」

え残った糸
え残った紙
育館に立てられたろうそく
器となったろうそく
体の周囲に落ちている球体となった蠟

「私がトリックの核心に近づいたのは、屍体の周囲に落ちている蠟に注目した時です。見てください」
　宿木は実際に足元に落ちている球体状の蠟を拾った。
　ほんの数ミリの蠟の玉だ。
「これは……溶けた蠟が固まったものですね……」
　エラリーが屍体の傍に屈み込んで云った。
「その通りです。しかし通常、一メートルほどの高さから蠟が垂れ落ちた場合、床で弾けて、そこに王冠状の模様を作るはずです。もっと高いところから落ちれば、床に描かれる模様はより大きく広がるでしょう。では、溶けた蠟が床で弾けずに、玉になって固まるケースというのは？」
「そんなことあり得るか……？」
　コースケは疑うように宿木を見る。

「ろうそくならあり得るんですよ。たとえば一メートルよりも高く……もっと高く、たとえば五メートル、十メートルの高さから溶けた蠟の滴が落ちた場合、床に落ちる前に空中で冷やされて固まる可能性があります」
「十メートルの高さからって……」
　コロンボをはじめ、全員が体育館の天井を見上げた。少なくとも十メートルはあるだろうか。
「この真珠のような証拠品は、ろうそくが天井近くで燃やされていたということを示すものでしょう」
「いやいやいや、無理でしょ！　犯人は何処からどうやって天井に行くわけ？　壁をよじ登って、そこから梁（はり）を伝って屍体の上まで移動したっていうの？　ろうそくを片手に？　なんつー間抜けな図だよ」
「いえ、犯人がろうそくを手に持って移動する必要はありません。ろうそくだけ、天井近くに上げればいいのですから」
「はあ？　ますます意味わかんねー。ろうそくを天井近くに上げてどうすんだよ」
「グレイさんを殺すんですよ」
　宿木は天井に向けた指先を、そのまま被害者に向かって下ろした。そして全員の視線を集めるように、芝居がかった仕種で、屍体の腹部に突き刺さっているろうそくを指し示す。
「さきほどエラリーさんが説明していましたが、凶器となったろうそくの先端は極端に尖らせてあるか、刃物が仕込んであって刺さりやすくなっていると考えられます。これはけっして杭のように打ち込むためではありません。床に仰向けで横たわるグレイさんに目がけて、落として突き刺すためです」
「はあっ？」
「では端的（たんてき）に、今回のトリックに使われた仕組みを説明しましょう。それを一言で云うならば——熱気球です」
「にゃ、にゃんですと？　ねちゅききゅう？」
　コロンボは動揺のあまりろれつが回っていなかった。
「もうおわかりでしょう。ここに残されている証拠品のすべてがトリックを物語っています。まず燃え残った紙。これはバルーンの素材として紙が使われたことを示唆（しさ）しています。ええ、紙の熱気球ですよ。そんなの浮き上がるわけがないとお考えだとしたら、大きな間違いです。たとえばタイでは年に一度、陰暦の十二月の満月の日に、紙でできた熱気球を灯籠（とうろう）に見立てて、集まった人々がいっせいに空に放つ祭りが行なわれています。むしろ軽くて断熱性のある紙は熱気球の素材として向いていると云えるでしょう」
「まさか、あの呪文書みたいな紙を使って気球を作ったのか？」
「そうですね……実際にはもっと薄くて軽い紙が使われていたのではないかと思います。屍体の周囲に散らばっていた紙は、むしろ目くらましとしてばらまかれたものでしょう。熱気球を使用したあと、バルーン

に使った紙をその中に紛れさせてしまえば、気づかれにくくなりますからね」
「じゃあ糸は何に使ったんだ？」
「バルーンと燃料を繋ぐ糸です。すでにお気づきだと思いますが、燃料というのは凶器としても使われたろうそくのことです。ろうそくの火によって温められた空気が、紙のバルーンに溜まり、外気との気圧差が生じると浮かんでいきます」
「つまりグレイに刺さっている凶器は、熱気球を浮かせるための燃料でもあったということか」
「ええ、コースケさんの云う通りです。その凶器は、自らを燃料とした熱気球によって、天井近くまで浮上します。はたして本当に浮かぶのでしょうか？　おおまかに計算してみましょう。たとえばろうそくがサバイバルナイフと同じくらいの重量だったとして、およそ五百グラム。外気温を零度とした場合、これを浮かばせるためには、四立方メートルのバルーン内の空気を三十度まで上げる必要があります。四立方メートルというのはかなりの大きさなので、これを現実的な大きさで考えると、凶器をもう少し軽くするか、空気をより熱すればいいでしょう。単純計算ではありますが、不可能とは云い切れないと思います。実際の気温はもっと低かったかもしれませんし、標高や天候による気圧も計算に含めると、もう少し違った答えが出るかもしれません。いずれにしろ、山奥の体育館が殺害現場に選ばれたのは、トリックの条件に適していたからでしょう」

枯尾花学園 トリック

「わかったわかった、要するに浮かんだんだろ？　それで次は？　天井高くまで上がった凶器を今度は撃ち落とすのか？」
「わざわざ撃ち落とす必要はありませんよ。ろうそくの芯は一定の長さまでしか用意されておらず、ある程度時間が経過すれば火が消えるように細工されていました。火が消えればどうなるかわかりますね？　熱気球は浮力を失い、ろうそくが凶器として真下にいるグレイさん目がけて落下します」
「そうか……一度気球を上げてしまえば、その場を離れても、あとで自動的に凶器が落ちて被害者が死ぬってことか」
　コースケはようやく納得した顔つきで云った。
「ええ。そのためには被害者にじっとしておいてもらわなければならないので、睡眠薬などを使って眠らせていた可能性が高いですね」
「いや、待てよ。落下したあとの熱気球はどうなったんだよ。俺たちがここに踏み込んだ時には、そんなものなかったぞ」
「おそらくろうそくの芯の最後には、火花が飛び散るような細工を施していたのではないかと思います。またバルーンや糸には、燃えやすいようにアルコールなどの液体を塗っておきます。こうすることで、ろうそくが燃え尽きると同時に、バルーンや糸が焼失するというわけです。床に並べられていたろうそくは保険でしょう。燃え残った紙などが、火のついたろうそくの上に落ちてくれれば、証拠を燃やし尽くしてくれると考えていたのではないでしょうか。それでも結局、糸が少し燃え残ってしまったみたいですけれどね」
「この儀式みたいな演出は、すべてトリックのためだったというわけですね」コロンボが感慨深そうに云った。「し、しかしそうなると犯人は――」
「ご想像の通りです。このトリックは、その場にいなくても発動する自動型です。それによって密室を作成できるのと同時に、アリバイも確保できます。たとえばろうそくが燃える時間を四時間と設定した場合、トリックを設置してから四時間後のアリバイを確保しておけばいいというわけです。逆に云えば、このトリックによってアリバイを確保している人物こそ犯人だと云えると思います」
「それじゃあ……」コロンボはうろたえた様子でミステリ研究会のメンバーたちを見つめる。「犯人は諸君たちの中にいるのか？」
「おめーもその中の一人だっつうの」
　コースケが云う。
「馬鹿なことを云うな！　俺たちは仲間だろ？　一緒に犬神家ごっことか八つ墓村ごっこやってきた仲間じゃないか！　どうしてこんなことに……」
「……探偵さんの云っていることが……間違っている可能性もあるのでは……？」

エラリーが小刻みに震えながら云った。
「そうですね。厳密に実験してみなければ、トリックが再現可能かどうかはわかりません。ですから、これより先の答えは保留しておきましょう」宿木はそう云って、サングラスの位置を直した。「さて、私の話はここまでです。ろうそくは集まりましたね？　では移動しましょうか」
「あっ、おいっ」
　宿木はコースケの制止を無視して、体育館を一人で出ていく。ミステリ研究会のメンバーたちはうなだれたまま、彼に従うようにあとに続いた。
　それぞれ口元を固く結んで、一言も喋らない。無駄口が叩ける状況ではないだろう。隣にいる人間が犯人かもしれないのだ。そしてこの状況のまま、寒さと飢えをしのがなければならない。
　廊下を歩いていると、先頭の宿木が突然、足を止めた。ぼんやりしていたコロンボは、彼の背中にぶつかって、その場にひっくり返った。
「ああ、失礼。大丈夫ですか？」
　宿木が手を差し伸べると、コロンボは感激したような表情でその手を取り、立ち上がってもしばらく離そうとしなかった。
「おい、ヘンタイ警部、何やってんだよ」うしろからコースケが声を上げる。「渋滞してんだろうが」
「そういう名前の警部はいない」コロンボはようやく手を離して云った。「探偵さん、何かあったんですか？　突然立ち止まって……」
「聞こえませんか？」
「え？」
「耳を澄ましてみてください」
　云われた通り耳を澄ますと、風の音に交じって、何かの重低音が遠くから聞こえた。
　その音は少しずつ大きくなっていく。
「これって……まさか……」
　宿木をはじめ、全員が窓の外を眺めた。
　黒いシルエットと化した山々の上空に、赤や白の光が瞬いていた。
「UFOだ！」
「やべえ、こいつ本気で云ってる……しっかりしろよ、コロンボ。ヘリだよ、ヘリ！」
　コースケが走り出した。昇降口へ向かう。宿木たちもあとに続いた。
　昇降口を抜け、雪の積もった白い校庭に出る。
　冷たい風が強く吹いている。いまやヘリコプターのローター音は、空耳や幻聴などではなく、はっきりと

聞こえていた。
「探偵さんが呼んだんですか？」
　トオルが尋ねる。
「いいえ……心当たりがありません」
　ヘリは真っ直ぐこちらに向かって飛んでくる。近づくにつれ高度が下がってきているようだ。ここを目指しているのは間違いない。
「誰かが土砂崩れに気づいて、通報してくれたんだ！　やった、助かるぞ！」コースケが空に向かって懐中電灯を振り回した。「おーい、こっちだ！」
　やがてヘリコプターは校庭の上空で静止し、ゆっくりと下りてきた。白い塗装の機体で、闇の中でもはっきりとその姿を見ることができた。しかしそのヘリの所属を示すようなロゴは何処にも書かれていない。
　ヘリの風圧で校庭の雪が吹雪（ふぶき）みたいに舞い上がる。エラリーの日傘が風で裏返った。それでも彼女は構わず、嬉しそうにヘリに手を振っている。
　――本当に喜んでいいのだろうか？
　宿木はあまり楽観できずにいた。
　あの土砂崩れに気づく住民が近所にいるとは思えない。しかも真夜中だ。ヘリを飛ばすにしても、夜明けを待つのが普通ではないだろうか。
　嫌な予感がする。
　宿木の心配をよそに、ついにヘリは校庭の真ん中に着陸した。
　一体誰が出てくるのか……
　宿木たちは息を呑んで、後部の搭乗ドアを見守る。
　ヘリは羽根を回転させたまま、しばらく何も変化がなかった。
　やがて搭乗ドアではなく――操縦席（そうじゅうせき）のドアが開いた。
　操縦席から顔を覗かせたのは、何処からどう見ても子供だった。外国人風の少年が、ベストにショートパンツという格好でヘリの操縦席に座っている。癖のある髪が、羽根の風圧で柔らかく乱れ、舞っていた。
「サルバドールさんですね？」
　少年は校庭に集まっているメンバーに向かって大声で云った。風の中でもよく通る声だった。
「いや、俺はコロンボだ！」
「お前じゃねーよ」コースケが横からツッコミを入れる。「探偵のおっさんのことだろ？」

宿木は片手を目の前にかざして、ヘリからの風を受けながら、一歩前に進み出た。
「君は？」
「五月雨結さんの使いの者です」
「名前は？」
「名前？　名前が必要ですか？」
「教えてください」
「今はリコルヌと呼ばれています」
「君のような使いがいることは聞いていません」
「残り六つの密室のうち、一つは他の仲間が受け持っているという説明がありませんでしたか？　その仲間というのが僕です。お困りの頃だろうと思って、文字通り飛んできました。よかったら乗っていきませんか？」
「五月雨さんから指示があったのですか？」
「いいえ。僕の独断です」
　どういう魂胆（こんたん）だろうか。
　宿木は判断に迷っていた。
「一つ、どうしても気になることがあるので尋ねてもいいですか？」
「どうぞ」
　少年は笑顔で肯く。
「五月雨さんが普段使っているショルダーバッグにぶら下がっているマスコットキャラクターはなんという名前ですか？　五月雨さんの仲間ならわかるでしょう？」
「ああ、それなら答えは簡単です。結さんは普段、リュックサックを使っているので、ショルダーバッグは持っていません」
　――そう簡単に引っかかるはずもないか。
　問いかけにはクリアしたが、少年に対する疑念が余計に増しただけだった。
「さすがに用心深いですね、サルバドールさん。でも大丈夫ですよ。僕はただ、仲間のために行動しているだけですから。さあ、乗ってください。そちらの皆さんもどうぞ。氷漬けの屍体になってしまう前に」
　宿木は迷った末に、彼のヘリコプターに乗ることにした。
　自分一人なら帰る方法はいくらでもあっただろう。山を下りてから救助を呼べばいい。当初はそう考えていた。しかしストーブが使えなくなったことで、彼らを残していくことにうしろめたさを感じ始めていたのも事実だ。

ヘリの登場はまさに助け舟だった。全員でこのクローズド・サークルから脱出することができる。映画のようなできすぎた話だ。
だからこそ警戒すべきかもしれない。
しかし宿木にとって、疑念を振り払うだけのメリットはあった。
少しでも早く、確実に、犯罪被害者救済委員会の黒幕に近づくことができる。

ヘリは宿木とミステリ研究会のメンバーを乗せると、暗闇の中、上昇を始めた。
黴くさい学校とはこれでお別れだ。ヘリが真っ黒な山の影を越える。すると東の空に、うっすらと明かりがさしているのが見えた。
夜明けだ。
ミステリ研究会のメンバーは向かい合ったシートに座り、複雑な表情で押し黙っている。全員が防音用のヘッドセットを装着しているが、それで会話する者はいない。事件のことを思い出して暗い気持ちになっているのだろう。疲労(ひろう)もたまっているはずだ。
『ご搭乗の皆さん、おつかれさまです。機長のリコルヌです』
突然、ヘッドホンからリコルヌの声が聞こえてきた。
「なんだ？」
コロンボがきょろきょろと周囲を見回す。
『これから皆さんを空の旅へとお連れします。ただし着陸後に当機を降りられるのは五人のうち四人だけです』
「はあっ？」
コースケが操縦席を覗き込む。リコルヌは何食わぬ顔でヘリを操縦していた。まるで他人事のような顔つきだ。
『降りられない一名は、「枯尾花学園」で起きた殺人事件の犯人です』
「なんだと？」
『その方の氏名は――打田透さん、あなたです』
「機長！　おかしなこと云わないでください！」
コロンボがとうとう立ち上がって云った。
「機長コントに付き合ってんじゃねーよ、コロンボ」コースケが彼を押し留めて云う。「犯人がどうとかいうたわごとよりな、俺には気になってしょうがないことがある。なんで子供がヘリを操縦してんだ？　無免許だろうがよ！」

『以上、機長からのごあいさつでした。それではよいフライトを――』
　リコルヌはこちらに背を向けたまま、片手を振ってみせた。
「一体なんなんですか……あの子……」エラリーが下唇（したくちびる）を噛（か）みながら云う。「かわいい……」
「どいつもこいつもよー」コースケは拳でヘリのシートを殴りつけた。「おい、トオル。なんとか云ってやれよ。お前がいないと、ツッコミ役が足りなくて困るんだよ」
「コースケさん、すみません……」トオルは座ったまま、深々と頭を下げた。「いつ云おうかと迷ってましたけど……おかげで決心がつきました。あの子供が云っていることは本当です。僕が犯人です」
「ええっ」
　コロンボたちは一様に驚きの声を上げる。
「廃校を出ることになったら云おうって考えてたんですけど、思いのほか予定が早まっちゃって、まだ自分の中でも整理がついていないんですけど……」
「おい、嘘だろ？　なあトオル？」
「いいえ。本当です。探偵さんにはもうわかっちゃっているんでしょうね。あえて名指ししなかったのは、探偵さんの優しさでしょう」
「とんでもない」宿木はため息を零しながら首を横に振った。「私には、君が犯人だと断定することはできませんでした。ただ、他のメンバーよりも犯人である可能性は高いと考えていただけです」
「そうですか……」
「なんだよそれ、根拠があって云ってんのかよ？」
　コースケが食ってかかる。
「ええ」宿木は両手を広げる。「使われたトリックから推察することができます。犯人はトリックによってアリバイを確保しようと試みています。だから意図的にアリバイを作った者が犯人です。ごく単純なロジックです」
「待てよ、アリバイ作りって云うんなら、俺とコロンボだって怪しいだろうがよ。一緒に麻雀やってたんだぜ？　誘ったのは俺だ。ってことは、俺だって容疑者じゃねーか」
「いいえ、問題にすべきポイントが違います。問題になるのは、屍体発見までの時制をコントロールした者は誰だったのか、よりわかりやすく云えば、事件を知らせる黒い手紙を見つけたのは誰だったか。手紙の発見が遅れれば遅れるほど、屍体の発見は遅れます。そうすると死亡推定時刻を割り出すことがだんだんと難しくなっていきます。まして専門医でもない学生が、正確な時刻を推定することは不可能になっていくでしょう。ですから屍体の発見はできるだけ早くなければならない。そのためには、まず事件を知らせる手紙を見つけてもらわなければならない。けれども当日、都合よく手紙を見つけてくれる人が

いなかったので、犯人は自らそれを見つけたことにした……といったところです」
「うぐ……」
　コースケは反論の言葉を失い、力なくシートにもたれかかった。
「鳴子麗は犯罪者でした」トオルが独白する。「実は彼女、黒魔術研究会の人間なんです。そう、スパイだったんですよ。彼女たちは黒魔術と称して様々な犯罪を人知れず実行し、周囲に黒魔術研究会の名を広めてきました。そのブレインが彼女なんです。去年、僕の妹が交通事故で死んだのを覚えていますか？　あれも彼女たちの仕業（しわざ）ですよ。もっとも、彼女たちが行なったのはブレーキのワイヤーを切断しただけで、直接殺したわけじゃありません。でも彼女たちが殺したのと同じことでしょう？　しかも鳴子はミス研が黒魔研と敵対していると知って、自らスパイとして乗り込んできたんですよ。このまま彼女を野放しにしておいたら、何が起きるかわからない。妹と同じように、先輩たちも殺されてしまうかもしれない……そう考えたら、やるしかなかったんです」
　トオルこと打田透の供述によると、彼は被害者の死亡推定時刻とされる午後九時頃より四時間前、犯行現場である体育館でトリックの準備を終え、ろうそくに火を灯した。そのあと体育館を出て鍵を閉め、雪が降っている中を、バイクで急いで大学まで戻ったという。
　そして四時間後、大学に着いた彼は手紙を発見したふりをしてコロンボに連絡を入れた。ちょうどその頃、トリックが発動し、体育館に横たわるグレイめがけて、刃物のように尖ったろうそくが落ちていく――
「トオル、お前……なんで妹さんのこと相談してくれなかったんだよ」
「僕だって知らなかったんですよ！　妹の死が黒魔術研究会によるものだったなんて。ある人が真実を教えてくれるまでは……」
「犯罪被害者救済委員会ですね？」
　宿木が尋ねる。
「知っていたんですか？　……さすが探偵さんですね。僕のところに来る探偵は、もっとランクが低い人だったはずなんですけど、あなたが来て正直びびりました。ランクが『２』の探偵なんて、そうそういませんからね。この結果も当然です」
「トオル！　お前っ――」コロンボは突然立ち上がると、袖の余った手でトオルを平手打ちした。「何処の誰にそそのかされたのか知らないが、なんでそいつらより、俺たちを頼らなかったんだよ！　俺たちは仲間だろ？　犬神家ごっこや八つ墓村ごっこをしたことを忘れたのかよ！」
「先輩……そういうわけのわからないウザさ……嫌いでした」
「えっ？　えっ？　トオル君？」
「トオル……同期として……仲間として……あなたに言っておくことがあるよ……」

エラリーが云った。
「なんだい？」
「……貸したお金はちゃんと返してね」
「……はい」
　空は次第に明るくなり始めていた。

　重々しい空気のなか、ヘリは鮮やかな空を軽々と渡っていく。
　二十四時間以上にわたって廃校にいたミステリ研究会のメンバーは、事件から解放された安心感からか、いつの間にか全員がうとうとしていた。トオルまでいびきをかいて寝ている。
「リコルヌさん、聞こえますか？」
　宿木は窓を眺めながら云った。
『なんですか？　こちら機長、聞こえていますよ』
「君は一体、何者なんですか？　何処かで我々の様子を監視していたんですか？」
『僕にはそんな趣味（しゅみ）はありません』
「よく犯人がわかりましたね」
『サルバドールさん、一連の事件はあなたが思っている以上に、シンプルに構成されています。たとえば打田透さんのポケットを探ってみてください』
「突然、何を？」
　宿木は抗議しながらも、云われた通りトオルのジーンズのうしろポケットを探った。財布がある。
『財布に学生証があるでしょう。誕生日は五月五日。牡牛（おうし）座です』
「ええ、そのようですね……」
　宿木はトオルの学生証を見た。
　少年の云っていることに間違いない。
　確か霧切響子も関係者の誕生日にこだわっていた。
　事件と誕生日にどんな関係が……
「ああ！」宿木は『枯尾花学園』の殺害現場を思い出して、ある事実に気づいた。「なるほど。そういうことですか」
　すべてが一つに繋がる。
　十二の密室に共通する秘密――
『わかることはとても退屈で、わからないことがとても魅力的だということを、改めて思い知りました。世界

はそういうふうにできているんですね』

「おや……意外とロマンチストですね。気が合いそうですね。今度一緒に、食事でも——」

『そうやって子供でも口説（くど）くんですか？』

「まさか」宿木は苦笑して云った。「誤解ですよ。こう見えて私は——いや、やめておきましょう」

　地平線に日が昇る。

　たとえ誰かが死のうとも、新しい日はやってくる。

「ところでリコルヌさん。このヘリの行き先ですが……これから私の云うところに向かってもらえますか？」

双生児能力開発研究所　――霧切響子

「そろそろ降ろして」
　後部座席で霧切響子が云った。
　その感情のこもっていない冷たい口調に、堤は苛立ちを感じた。まったく忌々しい。探偵であろうがなかろうが、生意気なガキには腹が立つ。一体、どんな教育を受けてきたらこんなガキに育つのやら――
　堤は怒りをぶつけるように、アクセルを踏み込んだ。車窓の風景がうしろへ吹っ飛んでいく。たちまち夜の田舎道がエキサイティングな景色へと変貌した。
「海と山、どっちがいい？」
　堤はバックミラー越しに尋ねた。
　霧切は眉間に幼い皺を寄せて、無言で堤を見返す。
「降ろしてほしいんだろ？　海と山、どっちがいい？」
「ここでいい」
「そういうわけにはいかないんだよ、探偵のお嬢ちゃん」堤はますます車のスピードを上げていく。「お前……五月雨結って知ってるか？」
　その名前に、霧切は明らかに反応を示した。
　敵意をにじませるような目つき。
　今までに見せたことのない表情だ。
「やっぱりそうか。ひどいよなあ、五月雨結ってやつは。自分じゃ解決できないから、お前みたいなガキを噛ませ犬にして俺のところに寄越したのか？」
「もしかして、あなた……」霧切は急に納得したような顔つきで云った。「諦めたのね？　罪を隠し通すことを――」
「切り替えたんだよ。お前を殺す方針に」
「そう」
「探偵役と繋がっているお前を、このまま帰すわけにはいかない。事件の情報をみすみす渡すことになるからな。とりあえずお前を殺してリセットだ。それでだいぶ時間稼ぎになる」
「その前に通報するわ」
「云っておくがケータイは使えない。ジャミング装置はうしろのトランクの中だ」
　霧切は携帯電話を確認し、すぐにシートの上に投げ出す。この車に乗っている限り、圏外の表示が

消えることはないだろう。
「計画にないアドリブなんかして平気？」
「自分の心配してろ。もしかしてお前、余裕ぶってるつもりか？　本当はびびって膝が震えてるんだろ？」
「いいえ、むしろ気が楽になったわ」
「なんだと？」
「あなたが犯人だって気づかないふりしたまま、ずっと車内で二人きりなんて、気が重いと考えていたところよ」
「はんっ、嘘をつけ。俺が犯人だなんて考えてもみなかっただろ。もし知ってたら、二人きりになるような状況は避けようとしたはずだ」
「私にその程度の覚悟しかないと思っているのなら、考え直した方がいいわ。真実を手に入れるためなら、命を懸けることにためらいなどない」
　彼女は震えるどころか、はっきりとそう告げた。
　堤は思わず彼女の表情を窺う。
　彼女は射貫くような目で、鏡越しにこちらを見つめていた。
「ガ、ガキが強がるなよ」
　堤は吐き捨てるように云って、視線を逸らす。
「強がっているのはあなたじゃない？　この状況、どうするつもり？　あなたは運転中で他に何もできない。一方で私はあなたのすぐ背後にいて、いつでも手が出せる」
「お前こそよく考えろよ。俺が運転を誤れば、お前だってただじゃ済まないぜ。それにこのスピードじゃ、外に逃げ出すこともできないだろ？」
「そうね。けれどいつまでこの速度を維持できるかしら」
　霧切は微笑しながら云って、後部座席にもたれかかった。まるで余裕を見せるかのように。
　堤は奥歯を嚙みしめ、挑発をやり過ごす。
　彼女の云っていることは事実だ。運転をしている間、堤は彼女に手出しできない。しかしある程度スピードを維持できている間は、彼女もまた堤に手出しできないのだ。
　この小さな閉鎖空間で、図らずも二人は運命を共有することになった。
　だがそれは微妙なバランスのうえに成り立っている。少しでもスピードが緩めば、たちまち共有関係は破綻し、霧切は行動に出るだろう。たとえその結果、車がガードレールにぶつかったとしても、スピードがなければ損傷も浅い。あるいはドアを開けて、彼女だけ一人外に飛び出すという手もある。

とにかくスピードを維持することだ。
　スピードさえ出していれば彼女は何もできない。
　信号や曲がり角が少ない田舎道でよかった。雪の名残で道路が滑りやすくなっているが、真っ直ぐ走り続けているぶんには問題ない。
「これでも学生時代は走り屋で名が通ってたんだ。これ以上スピードを落とすことはない」
「私を何処に連れていくつもり？」
「天国だよ」
「そう」
　堤はとっさに気の利いた言葉を返したつもりだったが、冷たくあしらわれた。
　――よく考えると、自分でも何処に向かっているのかわからない。
　ゴールは何処だ？
　このまま走り続けて、そのあとは？
　運転する手を止めたら霧切に逃げられてしまうが、運転し続けている限り何もできない。
　これって……詰んでないか？
　この膠着（こうちゃく）状態を打破し、霧切に勝つためには、何をしたらいい？
　ハンドルを握る手が汗ばむ。
　どうしてこんなことになった？
　堤は心の中で毒づく。調子に乗って「殺す」なんて云わなければよかった。霧切の態度が気に食わなかったから……つい口から出てしまった。正直なところ、かなりなめていた。どうせガキだから、ちょっと脅せばびびって声も出せなくなるだろうと思っていたが、全然そんなこともなかった。
　何も告げずに山奥で彼女を降ろし、不意をついて殴り殺せばよかったのか？
　いや、成功するイメージが思い浮かばない。
　堤は研究所で彼女に投げ飛ばされたことを思い出した。そうだ、うかつに近づけない。拳銃でも持っていれば別だが、もちろんそんなものはない。素手で彼女に太刀打（たちう）ちできるのか？　相手は何処からどうみてもか弱い少女だ。できないはずもないのだが……
　いずれにしろ、今となっては彼女に直接攻撃することもできない。
　何かいい方法はないだろうか。
　当の相手は後部座席で無表情のまま窓の外を眺めている。まるでタクシーで目的地に着くのを待っているかのような、平然とした態度だ。
　憎たらしい……

堤は急ハンドルを切って霧切をびびらせてやろうかと考えたが、寸前で思い留まった。
感情で先走るとろくなことにならない。
落ちつけ。
落ちつけば答えが見えてくるはずだ。
堤は運転に集中し、目を凝（こ）らして道路の先を見た。
標識に何か書いてある。
――高速道路入り口！
「やった！」
つい声に出していた。
おそるおそるバックミラーを覗くと、霧切はさっきと変わらない表情で外を見ていた。人形のようだ。いつの間にか本当に人形とすり替わってしまったのではないかと不安になったが、長いまつげが上下するのが見えた。人形ではない。
堤は車線変更して、高速道路に乗ることにした。
高速道路に入ってしまえば、スピードが安定する。信号で止まるおそれもない。霧切もうかつに車から出ることもできなくなる。
「高速に入るのね」
霧切が云った。
「ああ、喜べ。もっとスピードが出せるぞ」
「燃料がもつのかしら？」
「あっ」
思わず声に出た。
そうだった。
燃料計の針はEを指しつつある。
高速道路上でガス欠なんかシャレにならない。
だが今さら引き返すこともできない。堤はそのまま高速道路へと車を進めた。もしかしてETCがなくて料金所で足止めされるのでは……という不安がよぎったが、問題なく高速レーンに入ることができた。
「よかったわね、料金所がなくて」
霧切が堤の心を見透（みす）かしたように云った。
「俺はここぞという時に勝つ人間なんだよ」
さらにスピードを上げる。

重力加速度が心地よく身体を圧迫した。

堤はその感覚が好きだった。死を予感させるような、不吉（ふきつ）なスリルだ。家族を失った頃はよく、死ぬつもりでスピードの限界を試した。ある程度の速度を超えると、自分が生きているのか死んでいるのかわからない一瞬が訪れる。その一瞬を味わいたくて、何度も走った。

きっと破滅願望というやつだろう。

堤は自己分析する。

あの日、家族を失って、この世のすべてに絶望した。自分も死のうと思ったが死ねなかった。

未練（みれん）があった。

家族の命を奪った者への復讐だ。

九連兄弟――

あの双子は悪魔（あくま）だ。

彼らは双子の特徴を利用して、様々な犯罪に手を染めている。これは犯罪被害者救済委員会の調査でわかったことだが、彼らは戸籍上双子ではない。社会的には、彼らは『九連紫紺』という一人の人間であり、双子としては認識されていないのだ。

正常な思考であれば、彼らの境遇は不便ばかりで大変そうに思えるだろう。しかし犯罪者の視点からみれば、こんなに羨ましい境遇はない。

彼らはどんな犯罪を行なっても捕まらない。何故なら、双子の片方が犯罪を実行している間、もう片方がアリバイを作っておくことで、絶対的なアリバイ証明が可能なのだ。

要するにコピーロボットを持つ犯罪者だ。

彼らがそのような境遇を手に入れたのは、彼らの父のおかげらしい。父親は詐欺や強盗を繰り返す犯罪者で、自分に双子が生まれた時に『使える』と考えたようだ。そして親の望み通り、彼らは犯罪の申し子となった。父は間もなく強盗仲間の内輪もめで殺されてしまうのだが、この世に悪魔の双子が残された。

今から七年前、堤の妻が勤める郵便局に双子が押し入った。双子の片方が妻を含め数名を射殺。目撃者情報により『九連紫紺』に容疑が向けられたが、彼にはれっきとしたアリバイが存在した。またしても警察は彼らを逮捕することができなかった。

彼らはおおっぴらに強盗を繰り返すだけではない。双子であることを利用した詐欺もよく働いていたようだ。たとえば自分たちには双子特有の感応力があると研究機関に売り込み、自分たちを研究材料とする代わりに多額の報酬を要求する。当然ながら彼らに感応力などない。インチキだ。実験が終われば彼らは姿を消す。そのようにして主に海外で報酬を巻きあげてきたようだ。

いずれにしろ彼らはもうこの世にいない。
　ついにこの手で葬ってやった。
　――それなのに。
　何故だろう、全然救われた気分じゃない。
　むしろ追いつめられている。
　堤はバックミラーを覗く。
　あいつのせいだ。
　やはりゲームクリアするまでは、本当に救われたとは云えない。
「月並みなことを云うようだけど」霧切が鏡越しにこちらを見て云った。「あなたはまだ人生をやり直せると思う。けれどこの道を進む限り、先に救いはないわ」
「お前に何がわかる！」
「あなたの過去はわからない。でも未来ならわかる。間違いなく、ろくな結果にならないわ。だから今すぐゲームを降りるの。自分で運命を変えて」
「ここまで来たらもう引き返せないんだよ」堤は自嘲気味に笑いながら云う。「その運命にお前も相乗りしてるってこと、忘れるな。わかったら黙ってろ」
　霧切は云われた通り黙り込んだ。
　車の走行音が心臓を締めつける。
　堤はすぐにその無音状態に耐えられなくなった。
「お前、探偵のランクは？」
　尋ねる。
　しかし霧切は返事をしない。
「悪かったよ、喋っていいから」
「……ランクなんか訊いたところで意味はないと思うわ」
「いいから教えろ」
「7」
「は？　五月雨結と同じなのか？」
　どう見ても子供だし、もっと低いかと思っていた。
『黒の挑戦』の犯人は探偵役を選ぶことはできないが、少なくとも犯行前に相手の名前を知ることができる。もちろんその名前から、探偵図書館でプロフィールを調べることも可能だ。堤も当然、対戦相手となる探偵のことをリサーチしてある。

「お前の専門は？」
　堤は後部座席に向かって尋ねる。
「殺人」
「さ、殺人？　ガキが殺人事件専門の探偵？」
「あくまで探偵図書館の分類に限ったことよ。それも私が決めたことではないし」
　殺人事件が専門で、ランクが「７」ということは、少なからず事件を解決した実績があるということだろう。確かに研究所での立ち回りは一般人とは全然違った。もっと早く訊いておくべきだった。そうすれば、それなりの対応をとったのに──
「もしかしてお前、密室の謎も解けているのか？」
「ええ」
「……嘘だろ？」
「あなたにとってはどちらでもいいことではないかしら。どうせ私を殺すんでしょう？」
「それはそうだが……」
　本当に解決できたのか？
　ランク「７」の探偵にとっては、造作もないトリックなのか？
　今後、五月雨結と対決するに当たって、参考にしておきたい。
「あの究極の密室は絶対に解けないはずだ。何故なら『コルシカの兄弟』を使った密室だからだ。答えなどない。それともそのまんま『超常現象でした』って云い出すつもりか？」
「双子の片方を刺し殺したら、離れた場所にいるもう片方が同じ死因で死ぬ……面白い発想ね。でもそんなことは起こるはずがないわ」
「それじゃあまたマスターキーの話を持ち出すか？」
「マスターキーなど必要ない」
「だがＬ室の九連紫紺を殺害するには、『Ａ』と『Ｂ』の南京錠で封鎖された扉を突破する必要があるんだぜ？　鍵を開けるための指紋を持つ二人は、休憩室で一緒に酒を飲んでいた。彼らはずっと部屋にいたと証言している。この状況をどうやって説明する？」
「あなたがやったことなのだから、説明はいらないでしょう」
「お前の口から聞きたいんだよ」
「そう」霧切は小さなため息をつく。「その前に、尋ねてもいいかしら」
「くだらない質問には答えないぞ」
「あなたは犯罪被害者救済委員会の誘いに乗って今回の殺人事件を起こした。それは間違いないわ

ね？　では事件に使うトリックを選んだのはあなた自身？　それとも強制的に選ばされたの？」
「それが何か問題か？」
『黒の挑戦』のルールでは、事件に使うトリックを挑戦者が自由に選べる。トリックには相応のコストがあり、総コストによって召喚される探偵役のランクが決まる。コストが高ければ高いほど、ランクの高い探偵が呼ばれるという仕組みだ。
　堤も例外ではなく、自分でトリックを選んだのだが——
「もし強制的に選ばされたのだとしたら気の毒だと思って。よりによって『究極の密室』だなんて。自分で選んだのだとしたら、あさはかな選択だったわね」
「何が云いたい？」
「究極の密室などない。それが答えよ」
「でたらめ云うな。お前も確かに見ただろ？　究極としか云いようのない密室を」
「いいえ、私が見たのは究極でもなんでもない密室だったわ。むしろ本当にそんなものがあるとしたら見てみたいものね」
「余裕ぶりやがって……」
　心の声が自然と声に出ていた。
　堤はストレスを発散させるかのようにアクセルを踏み込む。
「云うまでもないことだけど、『黒の挑戦』は犯人と探偵が競い合うゲームよ。その点が普通の殺人事件とは違う。犯人が用意する凶器やトリックは、ポーカーでいうと手札にたとえられると思うわ。手札は挑戦状により一部がオープンになっている。同時に賭け金も提示され、探偵はそれを受けて自分の手札を用意する」
「突然なんの話だ？」
「ポーカーに勝つ方法は知っている？」
「そりゃあ相手の手札より、強い手札を出すだけだろ」
「そうね。それが正攻法でしょう。でもそれだけじゃないわ。特に多額の賭け金をやり取りするような場合に、有効な手段がある。それは——相手をゲームから降ろすということ」
　車の速度がますます上がっていく。
　堤は自分でもスピードをコントロールできなくなり始めていた。
「相手をゲームから降ろす方法はいくつかあるでしょうね。でもその基本はハッタリよ。心理的に勝てないと思わせる。たとえば賭け金を積み上げていけば、それだけで相手は金額の高さに腰が引けて、戦いを避けようとするかもしれない。まして場に見えている手札が、いかにもストレートフラッシュの気配がしてい

たらどうかしら？　そのうえ賭け金も相当な金額になっていたら？　普通なら、相手はこのゲームを降りるしかないと考えるでしょうね」
「だからなんの話をしているんだよ！」
「あなたが今回の事件でやろうとしたことよ」霧切は淡々と答える。「賭け金は五億。場に見せたカードは『究極の密室』という名のロイヤルストレートフラッシュの気配――そうしてあなたはこのゲームから探偵を降ろそうとした」
　堤は何も言葉を返せなかった。
　霧切は追い打ちをかけるように容赦なく続ける。
「『双生児能力開発研究所』の密室は、五月雨結というたった一人の探偵に向けられた十二の密室のうちの一つ。普通に考えたら、１６８時間で十二の密室殺人を解決するなんて無理よ。尋常ではない早解きが要求される。そうした状況の中、『究極の密室』と銘打たれたコスト５億６１００万の挑戦状があれば、探偵はとりあえず避けて後回しにしようとするでしょう。試験問題でも、引っかかりそうな難問は後回しにするのがセオリーですものね。そうして後回しにしている間に、他の問題につまずいて時間切れ……というのがあなたの想定していた結末。要するに『究極の密室』というハッタリで、探偵をゲームから降ろすのがあなたの真意」
　そうだ――
　堤は後悔していた。
『双生児能力開発研究所』のカードを選んだことではなく、霧切響子をもっと早く始末しなかったことを。
　目の前に現れた直後に殺しておけばよかったのだ。その場合、星居に目撃されていたかもしれないが、それなら星居も殺してしまえばいい。あいつが死んでいてもトリックには影響ない。
　探偵が複数人で事件解決に当たることは想定していたが、まさかこんなに早く現れるとは考えていなかった。しかもまあまあできるやつが来るとは。
「考えようによっては、『究極の密室』とは永遠に開かれない密室のことを云うのかもしれないわね。事実、今回の密室は開かれないまま終わる可能性はあった。そういう意味では、確かにあなたは『究極の密室』を買ったのかもしれない。あくまで理想の『究極の密室』に終わったけど」
　なんなんだよ、くそっ。
　ただでさえ制限時間が足りないのに、５億の密室だぞ？　普通は降りるに決まってるだろ！　普通は……
「ちなみに『究極の密室』なんて掲げたら、逆に一部の探偵は喜んで飛んでくると思うわよ。あなたに敗

因があるとしたら、探偵の心理を読み違えたことね。だって私も、少なからず『究極の密室』という言葉に惹かれたもの……」
「おいおい、なんだか勝った気でいるようだが、お前は密室の謎を何一つ解いちゃいないじゃないか」
「あなたがロイヤルストレートフラッシュに見せかけようとしたワンペアの密室のことね？」
「なんでそういう云い方するかな……ワンペアでも場合によっちゃ勝てるんだぜ？」
「残念だけど切り札なら手元に何枚もあるわ」
「じゃあ早く場に出せよ」
「指紋認証による南京錠とか、鎖による封印とか、『コルシカの兄弟』とか、白い布を被ったおばけとか——それらは全部、事件をより複雑に見せるための演出に過ぎない。これもハッタリね。トリックそのものは、呆れるほど古典的なものだったわ」
「云えよ」
「午後六時に簡単な実験を終えて、それぞれL室とR室に双子を閉じ込める際に、鎖と南京錠を使ったと云っていたわね。トリックの要になるのはこの時の行動だけ。簡単に云えば、鎖でぐるぐる巻きにしてドアを封印しているように見せかけて、実際は封印などしていなかった。ポイントは鎖の何処に南京錠をかけるかということね。近くのリング同士を南京錠で繋いでしまえば、鎖の封印はほとんど意味をなさない。たとえば長い一本の鎖を中心で畳んで二重にして、ドアの取っ手に巻きつける。取っ手は鎖が巻きつく力によって封印されたように固く開かなくなる。そして南京錠を、二重に畳んだ中心付近のリングを繋ぐようにして、掛け金をかける。これで一見すると鎖と南京錠でドアが封印されているように見えるけれど、ぐるぐる巻きをほどけば、あっさり鎖は外れる」
　鎖、南京錠、指紋認証、二重の扉……すべて霧切が云う通り、ハッタリだ。密室をより厳重に、より強固に見せかけるための小道具ばかりだが、原理的には『鍵をかけたふりをしてかけていない』というだけ。物理的には閉ざされていないが、あらゆる要素が心理的な密室を作ることに寄与している。R室側の鎖を巻き直したのも、密室がより強固なものであるかのように見せかけるためだ。もしあれらが外れた状態で廊下に落ちていたら、印象としては緩く感じる。特に『D』の鍵だけはかけ直せるので、犯行後、鎖を巻き直して実際に封印し直した。それによって、『A』や『B』の鎖も心理的に封印されていると印象付けようとしたのだ。
　仮に探偵が現れても、正攻法で時間切れまで粘れるのではないかと思ったが……
「反論は？」
　霧切が云う。癪なことに、楽しんでいるような声色だった。
「お前の説明を聞く限り、鎖でドアを封印したやつが犯人ってことになるよな。だが俺はさっき云ったはず

だぞ。鎖を巻いたのは星居だったと。だったら星居が犯人だと考えるべきだろ」
「あなたが嘘をついているだけよ。星居さんには、二人きりになった時に同じ質問をしたわ。『鎖でドアを封印したのは誰？』って。そうしたら全部あなたがやったと答えたわ」
　足の指を調べるとか調べないとかやっている時だ。
　あの時すでにトリックに勘付いていたのか。
「星居の方が嘘をついているかもしれないじゃないか」
「そうね。でも彼女は犯人ではない」
「は？　まさか『女同士の友情』みたいな心証で片づけようってんじゃないだろうな」
「映像に映っていた白いおばけ。被害者を刺す時に右手が映ったけど、マニキュアをしていなかったわ」
「……あっ」
　そうだ、あいつはマニキュアをしていた。しかも金がないのか、おしゃれなのかわからないが親指だけ。おかげで犯行後までマニキュアをしていることにさえ気づかなかった。そもそも女がどんなマニキュアしているかなんて、普段気にしたこともない……こんなことならマニキュアの用意も怠らなかったのに。
「後頭部の傷は本物っぽく見えたけど、わざと自分で傷つけたの？　だとしたらけっこう勇気あるのね。コーヒーメーカーに睡眠薬を入れたのはあなたでしょう？　それなら自分もそれを飲んだことにして、眠ったふりするだけでよかったんじゃないかしら。わざわざ頭を傷つけなくても……」
　くそ、完敗だ。
　殺人事件専門の探偵には、さほど難しくもないトリックだったか。
　だがこれでいい。問題点が浮き彫りになった。本物の探偵役――五月雨結と対峙（たいじ）する時には、問題点を修正しておけばいい。
　いずれにしろ五月雨結に情報が渡るのはもっとあとの方がいいだろう。ましてや霧切の持っている情報を渡してはならない。
　やはり霧切響子は殺そう。
「もう反論しないの？」
　彼女は鏡越しに、上目がちに尋ねた。まるで催促するように。
　これが探偵という生き物なのか。
「もう何も云うことはない」
「そう」
　霧切は短く云って、再び窓の外を眺める人形と化した。さっきまでよく喋っていたのに、まるで電池でも抜かれたかのようだ。

堤は燃料計を確かめる。何度見ても一緒だ。ガソリンは増えたりしない。それどころか減る一方だ。メーター上では針はたいして動いていないが、今も確実に減り続けている。

　どうしたものか……

　そろそろ答えを見つけなければ、こっちが先にタイムオーバーになるぞ。

「もう一度云うけど、あなたはもうゲームを降りるべきよ」

　追い打ちをかけるように霧切が云う。

「お前が降りろよ！　大体なんなんだよ、お前には関係ないだろうが。なんで俺の邪魔をするんだよ！命を懸けてまですることじゃないって。そうだろ、なあ？」

　霧切は返事しない。

　やはり窓の外を見たままだった。

　折れるつもりはない、か。

「じゃあこうしよう、お前の命は保証する。その代わり残り五日間、何もないところに閉じ込めさせてもらう。無事期限が過ぎれば、出られるように配慮する。その頃俺は、お前の知らない誰かになっているだろう。いくらお前が俺の犯罪を訴えようとしても無駄だ。なあ、五日間黙っていてくれればいいんだ。今ここで命のやり取りするより簡単だろ？」

「あなたの提案には乗らない」

　即答だった。

「俺だって人殺しがしたいわけじゃないんだ。七年前、妻をあの双子に殺されて、俺は人生のすべてを失った。失った人生を取り返したかっただけなんだ。それの何が悪い？　これ以上、俺に殺させないでくれ……頼むよ」

「嫌よ」

　またしても即答。

　脅しも泣き落としも通用しそうにない。

「どうしてだ？　なんで無関係な事件にそこまで執着する？」

「あなたは勘違いしているようだけど、私はあなたと無関係ではないの。あなたが犯罪被害者救済委員会に与(くみ)する限り、あなたは私の敵」

「そうか……お前にもそれなりに事情があるってわけか。それなら仕方ないな。折れるつもりがないなら、殺すしかない。残念だよ」

「あなたはもう一つ勘違いしている。私が何もできずにただ座っているだけだと思ったら大間違いよ。逆にあなたが折れるのを待ってあげているだけ。この状況を変える手段なんていくらでもあるわ」

「ふざけるなよガキが！　生意気な態度は改めろって教えてやったよな？　お前に何ができるっていうんだよ。できるもんならやってみろよ」
「いいのね？」
「おお、やってみろ」
「その前に、窓を開けてもらえるかしら。さっきからスイッチ押しているけど開かないの」
「ああ？　当たり前だ、こっちでロックしてるからな。誰が開けるか、バーカ」
「そう、ならいいわ」
　バックミラー越しに霧切が身体を前のめりに動かすのが見えた。
　何をするのかと思いきや、堤の首元近くに腕を伸ばしている。
　まさか首を絞めるつもりか……
　と思いきや、彼女は運転席のヘッドレストを引き抜いた。
「おい、何をするっ」
　制止している間もなかった。堤の後頭部にあったヘッドレストは、すでに霧切の手の中にあった。それは枕に二本のパイプがついた、巨大な電気プラグのような形をしていた。
　霧切はパイプの片方の先端を、右後部ドアの窓硝子の隙間に差し込む。
　その状態から、てこの原理で枕を押し下げると、あっさりと窓硝子が割られてしまった。通常、車の硝子は女子が殴る程度では割れないようになっているが、一点に力を集中させると簡単に割れる。
　たちまち外の冷たい夜気が流れ込んでくる。
　かなりスピードが出ていることもあって、ちょっとした嵐のようだった。
　ハンドルを握る手がかじかむ。
「おい、クソガキ！　何してんだよ！」
「これで持久戦は無理ね。もっとも最初からそのつもりもないけど」
　霧切はもう片方の窓にも、ヘッドレストのパイプを差し込んだ。
「おいっ、やめろ！」
　制止の声もむなしく、二枚目の窓硝子が割られた。
　ついさっきまで静かだった車内が、一変して風と走行音で騒々しくなる。
　次に霧切は制服のポケットからボールペンを取り出すと、ヘッドレストの表面に文字を書き始めた。ちょうど白いレザーだったので、ボールペンでも問題なく書けるようだ。
「な、何を書いている？」
「あなたの名前、車のナンバー、特徴、そしてHELP」

「やめ――」
　堤が云い終わる前に、霧切は外に向かってヘッドレストを放り投げてしまった。
「他の車があれで事故らないことを祈るわ」
　霧切は云いながら、今度は助手席のヘッドレストを引き抜き始めた。
　手がつけられない！
　まずいぞこれは――
　高速道路上に目立つ障害物が落ちていれば、通報される可能性が高い。通報があれば、回収も速(すみ)やかに行なわれるだろう。その場合、霧切の書いたメッセージが伝わってしまう。
「次は研究所で起きた事件の概要を書いておこうかしら。私が殺されてもいいように」
「わかった！　俺の負けだ！」
　堤はとうとう敗北宣言をした。
　迷いはなかった。とにかく今は霧切の行動を止めなければならない。
「もっと早く聞きたかったわね」
　霧切は云いながら、手元のヘッドレストを窓の外に投げた。
「おいっ」
「嘘つきは信用できない」
「わかったわかった、すぐにお前を降ろす。俺は自首する。その前に高速を降りなきゃいけない。それまでじっとしてろ。いいな？」
「――いいわ」
　返事までかなり間があった。
　しかしとりあえず納得したようだ。
　それから十分ほど走っていると、インターチェンジの表示が見えてきた。とりあえず助かった。このまま高速道路上を走っていたら、警察に追ってくれと云っているようなものだ。これでいい。堤は車線を変えて、一般道路に車を進めた。
　ゆるやかなカーブを降りる。すでにスピードはかなり遅くなっているが、霧切は窓から飛び出すつもりはなさそうだ。
　インターチェンジを降りると、周囲には田園風景が広がっていた。夏場には水面(みなも)の輝く美しい場所になるはずだが、今は鬱々(うつうつ)とした白い平原のように見えた。水田のすぐ向こうには、黒い山々の陰が壁のように立ち並んでいる。
　すぐ正面に橋が見えてきた。

大きな赤い吊り橋だ。

左右は渓谷と呼んでもよさそうな崖（がけ）になっている。

やるしかない。

勝算はある。

こちらにはエアバッグがついているが、後部座席にはない。

堤はアクセルを踏み込んだ。

身体がシートに押しつけられる。

死の重みだ。

これを突破すれば、生が見えてくる。

霧切が悲鳴に近い声で、何か云うのが聞こえた。

しかし窓から吹き込んでくる風の音でよく聞こえない。

橋の直前でハンドルを右に切った。

次の瞬間、身体がふわりと浮いた。

それはタイヤが地面を離れ、自動車が放物線を描く落下物と化した証拠だった。

しかし浮遊感はそう長く続かなかった。すぐに激しい衝撃が襲いかかる。肩と腹にシートベルトが食い込み、目の前が一瞬、真っ白になった。エアバッグだ。車体が岩に叩きつけられ、ひしゃげる音が聞こえた。自動車は鉄の塊となって、重力と自然にもてあそばれながら、崖下へと落ちていった。

気づくと天地が引っ繰り返っていた。

堤はシートベルトを外し、ぐしゃぐしゃになった車の天井に転がり落ちると、窓の隙間から外に這い出た。ガソリンのにおいがする。いや、それとも血のにおいだろうか？

すぐ傍で川の流れる音がする。

どうやら谷底の岩場らしい。

「おーい、大丈夫かー？」

遠くから声が聞こえた。

見ると、車のヘッドライトがこちらを照らしている。懐中電灯を持った男が近づいてきた。

「うわ、こりゃ大変だ」

男は潰れた自動車に明かりを当てて云った。

堤もその光景を見て、同感だと思った。車は原形こそ留めてはいるが、これがさっきまで二人の運命を乗せて走る檻（おり）だったとは信じ難い。

「あんた、怪我は？」
　初老の男が尋ねる。
「いや……特に……」
　堤は自分の身体を見下ろしながら云った。細かい擦(す)り傷などはあるみたいだが、致命傷はない。まだ足が震えている。
「よかったなあ、あんた。ついてるよ。一生分の幸運、使っちゃったんじゃないの？　がはは」
「ど、同乗者が……」
「なんだって？」
　男が懐中電灯をひしゃげた車内に向けた。
　二人揃って屈み込んで、中を確かめる。
　霧切は後部座席で逆さまの状態でぐったりとしていた。青ざめているが出血している様子はない。
「生きてるぞ。助け出そう」
　男が車の中に上半身を突っ込んで、霧切のシートベルトを外した。霧切の身体が力なく横たわる。男が彼女の脇を抱えて引っ張り出した。
　余計なことを……
「あんたも手伝って！」
　云われたので仕方なく、霧切を車から離れた平坦な場所まで運び出した。
「あんたの娘か？　よかったな、まだ息はある。急いで病院に連れて行った方がいい」
「下手に動かさない方が……」
「あ、ああ、そうだな、そうかもしれん。すぐ近くに診療所がある。そこの先生を呼んでこよう。あんたは救急車を呼ぶんだ！」
「ちょっと待ってください。あれはあなたの車ですか？」
　堤は川沿いに見えるヘッドライトを指差す。
「そうだが……それがどうかしたかね？」
「どうやってここまで下りてきたんですか？」
「上の道路と繋がっている砂利道があるんだよ。すごい音が聞こえたもんだから、下りてみたらあんたの事故車を見つけたんだ。それが今大事なことかね？　とりあえず私は自分の車で先生を呼んでくるから」
　男はその場を立ち去ろうとした。
　堤は足元の大きな石を拾った。

「あのー」

　男を呼び止める。

「なんだね、まだ何か――」

　振り返った男の側頭部を、石で殴りつけた。

　男はその場に倒れ込む。

　死んだか？

　死んでもらわなきゃ困る。

　堤は石をもう一度振り上げたが、そこで思い直した。

　自分の手に、人を殺した感触が染みつくのが嫌だった。その感触はゲームクリアしたあとも残り続けるだろう。できることなら、クリア後はすべてをリセットして、清らかな気持ちでスタートしたい。

　堤は男の両足を持って引きずり、川に突き落とした。男は波に翻弄（ほんろう）されながら流されていった。丸太（まるた）が流されていくみたいであっけなかった。

　これでいい。

　霧切のところへ戻る。

　霧切は苦悶（くもん）の表情を浮かべたまま横たわっている。

　試しに頬を軽く叩いてみると、苦しげに顔を逸らそうとするだけで、意識さえもはっきりしていない様子だった。

　――『あなたはまだ人生をやり直せる』だって？

　その通りだ。

　この勝負に勝てばやり直せる。

　堤は霧切を見下ろした。

　勝つためには、彼女を――

――to be continued.

星海社FICTIONS
キ1-04
4
北山猛邦
星海社
DIVE INTO THE BOOKREVIEW &INFORMATION!
北山猛邦
小松崎類
彼らにとって『霧切』とは？
彼らにとって探偵とは？
まるで呪いみたいだ。
トリプルゼロクラス探偵にしてパラレルシンキング&マルチタスクの天才、
龍造寺月下が突きつける驚愕の『黒の挑戦』——難攻不落の「密室十二宮」は残り六つ!
原作ゲーム『ダンガンロンパ』のシナリオライター・小高和剛からの直々の指名を受け、
「物理の北山」こと本格ミステリーの旗手・北山猛邦が描く
超高校級の霧切響子の過去——。
これぞ"本格×ダンガンロンパ"!!

☆星海社FICTIONS
北山猛邦
Kitayama Takekuni
Illustration
小松崎類
Komatsuzaki Rui
「結お姉さまが戦うことを諦めなかったから、私も一緒に戦うのよ」
ダンガンロンパ霧切
DANGANRONPA KIRIGIRI
4
星海社

星海社FICTIONS
キ1-04
DIVE INTO THE BOOKREVIEW &INFORMATION!
4
彼らにとって『霧切』とは？
彼らにとって探偵とは？
まるで呪いみたいだ。
トリプルゼロクラス探偵にしてパラレルシンキング&マルチタスクの天才、
龍造寺月下が突きつける驚愕の「黒の挑戦」――難攻不落の「密室十二宮」は残り六つ!
原作ゲーム『ダンガンロンパ』のシナリオライター・小高和剛からの直々の指名を受け、
「物理の北山」こと本格ミステリーの旗手・北山猛邦が描く
超高校級の霧切響子の過去――。
これぞ“本格×ダンガンロンパ”!!
北山猛邦
ファン必読の“星海社FICTIONS×『ダンガンロンパ』”シリーズ!
ダンガンロンパ/ゼロ（上）（下）
小高和剛
ダンガンロンパ霧切 1～4 以下続刊
北山猛邦
ダンガンロンパ十神（上）
世界征服未遂常習犯
佐藤友哉
星海社
キ1-04

Illustration　小松崎類

ブックデザイン　　eia

編集担当　太田　史
編集　担当　　村邦

フォントディレクター　紺野慎一
電子書籍ディレクター　松島 智
オペレーションチーム　　万 愛　三本絵理

校閲　　来堂

フォント制作協力　字　工房　リアルタイプ　　　印

制作協力　新　　　堂

本作品は、2015年12月、小社より星海社 IC ION として 行されたものをe- IC ION として電子書籍化したものです。
e- IC ION では、 正部分や図 点数などが異なる場合があります。

ダンガンロンパ霧切４

2020年10月1日発行（01）

者　北山猛邦

発行者　太田　史

発行所　式会社星海社
112-0013
東京都文京区音羽1-17-14
音羽 Kビル4
htt s:// .sei aisha.co.

発売元　式会社　談社
112-8001
東京都文京区音羽2-12-21
htt s:// . odansha.co.